十七世紀の後半、ミシシツピー上流に布教行脚したフランス宣教師ルイ・アヌパン Louis Hennepin (1640? aft. 1701) は、其の旅行中、一語も通ぜぬ不安の蠻境を、たゞ此のパイプ一本を賴りに押し通した苦心を語つて居るが、ある部落では、此のパイプを認めずといふものが出て、はしなくも彼等の間に議論沸騰して、容易に解決すべくもなかつたところへ、酋長が出て來て、ルイ牧師のパイプを口にあてゝ見て不正なしと斷じたので、漸くにして虎口を逃れる事が出來た由である。

ルイ師は、探檢家ド・ラサール氏 R. Robert Cavelier de La Salle (1643-1680) と行を共にしたのであつた。ミシシツピイに南下する途を五湖地方にえらび、その途中に、常に英國殖民に加擔して、佛蘭西殖民と戰ふた精悍なるイロクオイ族 Iroquois or Five Nations (彼等の狩獵地は英佛殖民地の間に介在する重要な地域を占めて居た) の風習を仔細に亘つて知ることが出來た。

牧師の此の旅行記は一六七八年に出版されたものであるが、それから百五十年後、アメリカの畫家ジョージ・カトリンの觀察した所といみじき合致を示して居るのも、極めて興味ふかく、且つ愉快なところである。よつてその重複をさけて、以下カトリン氏 George Catlin (1796-1 72) の著書 Letters & Notes on the Manners, Customs & Conditions of the North American Indians. の一部 (北アメリカンインデイアンの生活、習慣、狀態に關する研究) を紹介する。

「我等はヒューロン湖の島民より與へられたる平和のカリユメツト即ちパイプを以つて食料を得んと、三人の者を遣した。此の平和のカリユメツトなるものは、彼等蠻人には非常に尊いものであるが故に、これについて一言說明しやう。これは赤、黑又は白色の大理石の大きな煙草パイプであつて、雁首は美しく磨かれ、約二尺半程の長さの柄管は美しく强い芦又は篠竹で作られ、色とりどりの澤山の羽毛を以つて飾られ、婦人の毛髮で編み合せてある。各部落民は、その思ふがまゝに裝飾を凝らし、其の土地に住む鳥によつて羽毛を異にして居る。かくの如きパイプは、これを交換した部落間の同盟を意味して安全の證となるものである。かうしてすべての使者は、カリユメツトを平和の表徵として持ち歩くのである。彼等蠻人は皆、此のカリユメツトの信仰を犯す如き事があれば、恐るべき災禍は忽ちにして、彼等の頭上に下る可しと堅く信じて居る。彼等は此のパイプに盛るには、最上の煙草をもつてし、大事を議したあとには、これを相手に捧げ、自分亦これをうけて喫煙するのである云々。」

戰爭のために作られたパイプと、平和の爲めに作られたパイプ――この二つは先にも述べた通り、外觀によつて直ちに區別のつくやうに出來て居るが、これがもし、混同され誤用された時には、當然重大なる結果を惹起する。普通土人間に、宣戰布告の意志表示をするには、此の戰爭パイプを敵方に送りとゞけるのであるが、これは平和パイプの受納が直ちに、兩方干戈をおさむべき合圖とされると同樣である。然し乍ら單純無智な彼等としても、時には奸智をめぐらして敵を欺くの冒險をさへ敢てする事がある。即ち戰爭パイプを送るに、他の何かに蔽ふてその所在を不明にしたり、又は故意に裝飾を附して、平和パイプに擬して、何等他意ないかの如くに見せかけやうとする事さへある。

ある時、シオウクス族が敵を陷れやうとして、此の奸計をめぐらした。即ち彼等は拾二本の平和パイプを送つて和議を乞ふたが、先方に指揮官をして居た一佛蘭西士官が、此の間の事情に明るく、仔細にそのパイプを檢べたところ、その中の一本は他の十一本の平和パイプの如くに、毛髮で編み合されては居らず、柄には恐る可き毒蛇の彫刻がほどこしてあつた。これによつて佛國士官はシオウクス族の奸計を知り、先んじて奇襲を試みて、一擧にこれを擊滅したといふ事である。(ヘウキット氏による。)

どうせ敵を欺くつもりなら、最初から平和パイプばかりを送つたらよさゝうなものだが、それが彼等の絕對的信仰と關聯して居り、平和パイプによつて神の誓ひを結び乍ら、欺いて敵を打つといふやうな事は、明かに神に對する冒

瀆反逆であつて、忽ちにして神の怒りを買ひ、恐る可き天罰はむしろ彼等自身の頭上に下されるものと信ぜられて居るから不可能なのである。敵を欺くことは容易であつても、神を欺くことは出來ない。彼等の素朴なる良心は、自らの作つた偶像に自らを縛りつけて、こゝに世にも嚴かなるタブーを築きあげて居るのでああつて、愚鈍と嗤ひ去る可くあまりにも純眞である。

複雜にして皮相、强力にして不安なる歐米の近代文化樣式が、文明の美衣をまとふて、海の滿潮の如くに世界を征服しやうとする時、亡び行く是等素朴の眞善美のために、水底深く沈められた樣な哀愁を覺えるのも、時に吾等の心情の一片である。名曲インディアンラメントも、わづかに我等が美しき都會の夕べ、底淺き耳に媚びるに過ぎないものであらうかも知れないが、亡び行く民族の哀愁は、啻に奪はれたる獵地と、ダコタの石切場にのみ漂ふものではあるまい。弓と矢を持つた曠原の勇者も、今は風冷きミシシツピイのほとりに、その羽毛をなびかせ乍ら、彼等が遠き祖父の日を、又曾祖父の日をしのんでは、深い憂愁にうなだれて居るのではあるまいか。まことに彼等は奪はれてある。彼等の現狀こそは卽ち雁首のないパイプである。

ミシシツピイの谷深きダコタの東部に位して、眞紅の石を產する所がある。こゝが卽ちダコタの石切場であつて、インディアンの神聖なるパイプの材料をとる所となつて居る。平原のインディアンは、遠くより此處を訪れ來つて、此の石をとり、パイプの火皿を作つたのである。

此の石切場では所謂「神の休戰」が行はれるのであるが、これは前述のやうに、彼等のパイプに關する限りは、悉く神意より出でたものであつて、此の火皿を作る事も勿論、神への聖なる潔齋の中になされねばならぬからである。故に、こでは、すべての武器をすてゝ、東西の部落　南北の氏族相共にならんで、神聖なるパイプ石を採るのである。此の詳細を最初に觀察研究したのは、前述のアメリカの畫家ジョージ・カトリン氏であるとされて居るが、事實氏の著述(北アメリカンインディアンの生活、習慣、狀態ニ關スル研究)はその挿繪と相俟つて、前世紀におけるインディアン研究の、貴重なる資料とされて居るものである。この事から、眞紅のパイプ石は、氏の名譽の爲めにカトリナイト(Catlinite)と稱せられる。

曠漠たる中部アメリカの平原に散住するインディアンのための唯一の石切場。彼等が何百里の旅をつゞけて訪れ來つて、たゞ一片の石を切つて行く、此のダコタの石切場こそ、實に彼等の信仰のエルサレムであるからだ。こゝに訪れて來る者は、信仰淸き巡禮であり、持ち歸るパームは卽ち此の赤き石の一片である。

これに關して彼等の傳へる神話は次の如くである。

「それよりすでに幾世經ぬる。我等が大神ギチエマニトウはかつて國の民達すべてをここに召し給ひぬ。大神みづから赤き岩の上に立ち、その一角をかきて手に丸め給へば、たちどころに大いなるパイプとなりぬ。大神はその煙あまねく彼等が頭上に吹きかけ給ひ、又天上四界に吹き送り給ひて、彼等を誡めぬ。曰く、此の石は赤し、此の石は爾等の肉なりと。又曰く爾等此の石をもつて平和パイプを作れ、こは爾等すべてのものなるぞ。こゝには爾等その武器を地上より起すべからず。かく誡め給ひて大神一息强く煙を吹き給へば、おん姿濛々たる煙につゝまれて昇天し、あたり數里が程の岩は殘るくまなく溶け輝きぬ。二つの大いなる釜又地底より現れて、守護の女神二柱火焰の中の釜に入り給ひぬ、かくて此の女神は今なほこゝに在し給ひて、訪れ來る信者の長に應へ給ふとぞ。」

これはカトリン氏の著書から引用したものであるが、ロングフエローの「ヒアワサの歌」(H. W. Longfellow (1807-1882) Song of Hiawatha)には、此の神話が美しく

歌はれて居る。

萬能の神ギチエマニトウは
生命の主マニトウは降り給ひて
岩山の赤き巖の上に立ち
國民あまた召されけり
部族を共に召されけり
大神の足跡よりは河溢れ
朝の光に輝きぬ
崖の上より流れ落ち
慧星イシュクダのごと輝きぬ
大神やがて身を屈め
指もて廣き草の上に
うねる川路をひき給ひ
示して「こゝを流れよ」と
さて岩山の赤き石
角をみづからかき給ひ

パイプの火皿を作られぬ
かたちそなへて作られぬ
かくて河邊に下り給ひ
末の綠葉色も濃き
芦をパイプの柄となして
盛るは柳の幹の皮
赤き柳の幹の皮
近くの森に息をかけ
その枝々をすり合せ
燃して焰となし給ふ
山を連ねてその上に
立てる大神マニトウは
其のカリユメツト
平和パイプを吸ひ給ふ
民への合圖に吸ひ給ふ
かくて煙はおもむろに

靜けき朝を昇り行く
初めの黑き一すじは
更に色濃き青色に
やがて擴がる白雲と
森の梢のそれに似て
延び延び延びて昇り行く。

かくてその煙の高きは天のいたゞきに達し、天をも凌ぎて昇り、低きは地のかぎりをつくして擴がり行き、タワゼンダ、ウヨミンの谷よりツスカルザの森を越えて、ロツキーの峯に及び五湖のほとりも蔽ひつくす。すべての部落は、これを望んで、平和パイプのブクワナであることを知るのである。これを見た各部落の豫言者はいふ。

望み見よ彼のブクワナを
柳の鞭の如も棚引く
合圖をもつて遙かより
ギチェ マニトウの大神は
部落の民を召さるゝぞ
兵士共を召さるゝぞ」

こゝに於て、あらゆる部落の兵士達は、此の平原の山へと急ぐ。赤きパイプストーンの石切場へと馳せ參ずるの

である。彼等はその武器を「秋の木の葉のごとく彩り、朝のみ空のごとく彩り、」由來するところ祖父、曾祖父の昔より遠き恨みを抱き合ふて、不和確執の根柢解くべくもなく、眦を決し、肩を怒らして集ひ來る。彼等の大親ギチェマニトウは、此のいとしき子等の爭ひをふかく憂ひ憐れみ、その頃となれる魂を和げて、「遠くなる水のひゞきにも似たる聲もて」彼等を訓へる、「我は爾等に獲物あまたすみて不足なき獵地を頒ち、漁るべき魚あまた棲む河を與へたるに、何をもつて爾等かく爭ふか。我、爾等の戰ひに倦めり、我爾等の流血に憂ふ。爾等すべて力を一にしてこそ、すべての危難を防ぐべけれ、さればこれより後は兄弟の如くあれ、爭ふ勿れ唯平和であれ。」

流るゝ河にゆあみして
頰の隈取り洗ひ去り
指の血糊も拭ひ去れ
戈は土中に埋めすてゝ
こゝより赤き石をかき
平和パイプを刳り作れ
傍に生えし芦を折り
美しき羽もて飾るべし
此のカリユメツト共に吸ひ

以後同胞として生きよ

よつて戰ひの勇士達は、その鹿の裘を脫ぎ、川に浸つて戰ひの汚惡一切を洗ひ落して、足裏までも清淨となり、武器はこと〳〵く堤に埋め去る。大神のやさしき微笑に守られて、彼等は今日までの、恨みも憎しみも忘れ去つて、相共に助けてパイプを作り初める。石をかきとり、岸邊の芦を折り、彼等の最も美しき羽毛をこれに飾つて、おのがじし歸途につく。此の樣を見て大神マニトウはいたく滿足し給ふて、雲の合間の窓を開き、立ち罩めし煙の中を天つみ空に昇り行き給ふのである。

以上がヒヤワサの歌の第一章の大體であるが、ダコタの石切場の傳說を歌つて憾みないと思はれる。此の神話は幾百年可憐なるインデイアンに傳へられて、赤きパイプストーンの產地は、最近まで其の神聖と文明よりの孤獨とを誇つて來たのであるが、近代の物質文明は强力なる大陸橫斷の鐵道をその近くに走らせ、最文明人四十萬の住む大都會はまた是處を遠からず建てられて、インデイアンの聖地は、傳說は、さうして彼等の生活までがその壓力の爲めに、いたましき歪曲を餘儀なくされるに至つたのである。

然し、ダコタ族は、昔からパイプを使用したのではなく、初めは土中に孔を掘つて喫煙したものである。これはクリー族にも見られる所であり、中央アジア、西部アジアに行はれた樣式でもある。現にインド、ビルマの邊境には土煙管(earth pipe)なる方法が用ひられて居るといふより行はれて居るといふべきか。彼等が喫煙せんとする時には、先づ粘土のやうな土の軟いところを擇んで、足で踏み固め、程よき孔を掘り、傍から斜めに芦の管をさし入れる。これが卽ち彼等のパイプであるが、これを吸ふには、極度にかゞむか、腹匍ひにならねばならぬ。煙草を詰めたら其上に眞赤に燃えた炭火を一つ置いて、兩手で顎を支へ乍ら、煙草をたのしむのである。

中部インデイアンがパイプストーンを用ひるやうになつたのは、さう昔からの話しではないらしく、現在、最古のパイプを使用したと考へられるのは、北アメリカ西南部からメキシコ一帶に住んで居つたマヤ族(Maya)であらうと推定されて居る。彼等の住んで居た地域は詳細に言へば、今のメキシコ南部チアパス、グワテマラ、サルヴドル、ヴエラクルズ、ユカタンの諸地方に亘り、身軀は倭少ではあるが、その文化程度は著しく發達して居た。紀元前七〇〇年より一〇〇〇年に溯る彼等の遺跡中には驚歎に價する幾多のものを示して居る。彼等は當時すでに農業によりて生活し、金銀の工作に長じ、楔形文字を有して鞏固なる政治組織に成功して居た。

アメリカ發見當時でも、勿論他の如何なるインデイアンよりも開けて居り、すでにカヽオ、綿の栽培さへも行つて居たといふ。現在でも此のマヤ語を話す土人は約三十萬ありと稱せられ、今世紀の初頭まで頑强に團結して、メキシコ政府を困らせた部落すらあつた程である。

こゝに我等に最も興味あるのは、彼等の祖先の喫煙である。今のチアパス・バレンクに殘された彼等の遺跡の一つ、ある寺院を飾つたタイルには、マヤの農業の神が、パイプを口にして喫煙して居る形が、見事な彫刻によつて示されて居る。そのパイプを見るに、眞直ぐの單純な喇叭形のもので、先の方程大きくなつて居る。

此の寺院の歷史は、紀元前百十四年迄溯るものであるが、喫煙の風は勿論これより遙かに先んじて居たことは、容易に考へられる所である。これについては前述の紀元前七〇〇年とするものから、一〇〇〇年に及ぶといふ說まである程である。何れにしても數百年を紀元前に溯つて、すでに喫煙の風が行はれて居たことは確かで、此のマヤの彫刻

パンレクの廢墟に發見せられたるタイル彫刻

右、農神チャク　中、修驗者　左、マヤ人

にも見るやうに煙を他にふきかけることが、宗教的意義を含んで廣く北米全土に亘つて行はれて居るのは、前述の通りである。マヤの神はチャクと稱する農作の神であつて、屢々パイプを携へて描かれて居るが、喫煙は單にチャク神のみならず、一般の人間も行つたことは同種のタイルによつて知られる。（上圖參照）

然しこれのみによつて、マヤ民族が最初の煙草嗜用民族なりと斷定を下すことは出來ない。喫煙必ずしも煙草のみとは限られず、あるひはそれがアフリカに於ける大麻、インドに於ける蒟醤（ぢんま）、又は南米の一部に於けるコカの如きものであつたかもしれないからである。然し彼等マヤの文化が、トルテツク、アズテツクの二民族に繼がれてメキシコに承けられ、遂に大陸發見當時には完全なる煙草喫煙となつて居たのであるから、他にこれに先だつところの煙草の喫用乃至は存在が立證されぬ限り、煙草が本來この地方に原生して居たものであることが考へられ、從つて又、マヤ民族が煙草喫煙の先驅をなしたものであることが推論されるわけである。

更にマヤ民族を溯つての太古の喫煙に關しては、極く大略乍らすでに第一篇に於て述べておいたから、再び純情のアメリカンインディアンのパイプに話をもどすが、テクサス・ニューメキシコ、アリゾナ地方に住んだプェブロ族（Pueblo (Cliff dweller)）は、その先住民族バスケットメーカー（籐工人種ともいふべきか）のパイプよりも更に長く、且つ薄手のものを用ひたと推定されるが、これは土又は軟質の石をもつて作られ、時には美しい裝飾をつけてある。此の系統をひいて、今日尙ほ同型と見られるパイプを使用するものにホピ族がある。

カリフォルニアの土人亦、大部分眞直のパイプを使用したもので、プエブロのものと稍々類似した點をもつて居る。其の材料は石よりもむしろ木の方が多いが、立派なものは矢張り滑石、石鹼石などで作られてある。又ロッキーよりカンサスに至る大平原の土人も、眞直のパイプを持つて居るが、これは主として羚羊の骨で作られてあり、吸口を皮で卷いてある。アラパホ族の神聖なパイプの如きも、黑石又は赤石で作られて居るが、眞直の點は同樣である、クロー族の如きも、此の不便な――灰が口の中へ飛び込んで來る型を用ひて居た。此の眞直なパイプを使用するには、先づ吸口に草を丸めて詰め、それから煙草を詰めるのであるが、これは灰の口に入るのを防ぐのみでなく、又そのニコチンを幾分除去する効があるわけだ。

此の眞直ぐなパイプは西南部だけではなく、古く東部にも見られる所であるが、的確に何族の使用したものであるかは判じ難い。イリノイ州の土中から發見されるパイプは、緻密な褐色の滑石で、美しく磨かれてある。是等のパイプの大きなこと丶、仕上げの美しいことは、明かに祭祀用の神聖パイプであることを語つて居る。

しかしいくら神聖であらうと何であらうと、此の眞直ぐのパイプの使用は甚だ不快な現象を惹き起す。日本の居候のやうに吸がらで咽喉をやく程、吸ひ込まなくとも、熱い灰が――時には火さへそのまゝ咽喉へ飛び込んで來る。だ

から此の危險を防ぐ爲めに、先づ煙草をつめる前に、先にいつた草の葉の他に、石ころの小さなのなどを入れるのであるが、こんなことでは、彼等の理想通りの喫煙、卽ち煙だけを吸ふといふことは、中々の難事である。

偶々ある所に、大變手先きの無器用な男があつて、滿足な——卽ち眞直なパイプが作られず、どうしても孔が眞直に通らない。恥しいのでこつそり隱れて吸ふて居たが、下手のおかげで灰が中々咽喉まで來ない。卽ちこゝに雁首をまげて作れば、石コロを入れたり、草の葉を入れたり、又は煙草を落さぬ爲めに、天を仰いで喫煙するといつた樣な必要もないといふ大發明をしたとは咄しであるが、曩に述べた種族以外のパイプは、大抵幾分の角度をもつて、雁首をつけて居る。ミシシッピイの盆地大平原地方では、其の中間を行つて、極めて內氣な首の擡げ方をしたパイプもある。同じ眞直なパイプでも、變つたものには、二本の柄の出たものがある。アイヌのパイプ又は京都あたりにも此の種のものが、ある社會に使用せられたことは、すでに日本篇で述べた通りであるが、これの使用は、一寸第三者の目にあまり氣味のものであるのは勿論だ。アメリカでは、斷崖地方の民族（クリフデュウエラー）Cliff-Dweller が用ひたもの、又例のスペインのデ・オヴィエードGonzalo Fernandez de Oviedo gy Valdés (1478—1557)が十六世紀の初めに、報告したものなどがその類である。彼が一五三五年に出版した「印度史」の中には、此の二つの柄のついた管で煙を吸ふと述べてあるが、しかし此の場合の二本の管は、二人の口にあてがはれるのではなくて、二つの鼻の孔にあてがはれるので一寸普通のパイプと異つて居る。その故かどうか分らぬが、オヴィエードは、このパイプが卽ち「タバコ」なりと主張して居るのは面白い。

オヴィエードの印度史が出版せられた翌年、セントローレンス河口を探險したフランス人、ジヤク・カルシエJacques Cartier (1494-aft.1552)が言ふところを聽くに

「彼等印度人が又每夏乾曝して貯藏するところの一種の草あり。此を用ふるは男のみにして、首より吊せし革の袋に此の草を入れて木又は石にて作れるピープ（註、こゝでは笛樣の樂器を意味す）樣のものと共に携へたり。彼等此草を用ふる時は、もみて粉となし、その笛卽ち管の一端につめ、赤く熾れる炭火の小塊を其上に置き、他方の端を口にあて煙を吸ふこと久しきに亘つて、全身煙を以つて飽滿され、遂に鼻により漏洩するに至ること煙突の如し、彼等これを以つて保濕防疫の德ありとなす。されば我等亦試みしが、これを唇にあつるや辛氣薄荷の如く刺戟せり。」

これ又、東部に於て見られる眞直のパイプを言ふて居るのであるが、英國の最古の文獻と稱せられる、ビーナ、ローベル兩博士の著述中にも、インド歸りの水夫等が「小さな煙出し」を携へて來たとあつて、興味ある繪をそへて居るのはすでに紹介した通りである。

アメリカ土人の間に用ひられる雁首の曲つた普通のパイプ——（エルボウパイプ）Elbow Pipe——は實に多種多樣であつて、是を完全に分類することは至難の事に屬する程だ。限りある書物に、これを洩れなく擧げるといふことは更にむつかしいことであるから、極く大體を語つて見るつもりである。

ロングフェローのヒアワサの歌のモデルとされたと言はれる、オジブワOjibwa族の間には大體四樣のパイプを見る。一つは婦人パイプとて小型で柄も短く裝飾も少い。二は普通のパイプで一に比し稍大形で裝飾も複雜になつて居るが、第三の勇士のパイプに比しては、その大いさ、その裝飾は遙かに見劣りがする。最も雄大なものは酋長用、祭祀用のものなどで長大なる柄と複雜なる裝飾を附けて居る。然し一般個人のものでも、其の所有者の手によつて、美しく裝飾を施されて居るものもある。此の四種は大體、全インデイアンのパイプの分類に適用され得るものだが、その間には

最大限の融通が認められねばならぬことは勿論である。

ダコタの石切場よりのパイプといつても、その石材を他から讓り受けたとか、持つて來て貰つたのなどでは、其の德を現さぬと信ぜられて居るので、彼等は皆遙々の道をダコタまで巡禮して來たものであるが、かくの如き特殊のパイプ以外の材料は、勿論部落々々に交換融通されて居たものである。その材料としては、石、粘土（クレイ）、木、角（ツノ）、骨などが用ひられたが今日最も多く殘されてあるもの、卽ち土中から發掘されるものは、矢張り何と云つても石、粘土の二種が大部分を占めて居る。大平原以東の各地には、種々のストーンパイプが散在して居り、ニューヨーク、カナダには、後者のすぐれたる標本が多數發見される。

クレイパイプは主として、五湖地方、ローレンス河流域に住んだ好戰のイロクォイ族の墓地、村落のあとに見出されるものをその代表とする。此の種のものは、美しい硬質のクレイであつて、優美なる喇叭狀をなして居り、長めの雁首と短い柄が特徵で、これによつて容易に鑑別出來るといふ。

ヨーロッパからの開拓者が初めてアメリカの土を踏んだ頃の書物には、大抵ラージパイプとかいてあるが、實は彼等は土人中の酋長又はその代表者などが持つて居つたパイプを見ていふたものであつて、一般のもつ小型のパイプが注意を惹かなかつたのは無理からぬところであらう。然しやがて此の地に定住の意を決するや、彼等は小型のパイプを倣ひ、やがては逆にインデイアンに、彼等のパイプの影響を及ぼすに至つたのは面白いことである。

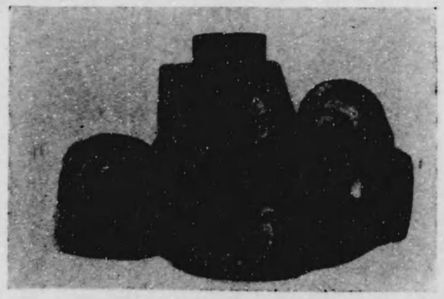
イロクォイパイプに見るやうに、雁首も一緒に作られてあるのが大體古い樣式であつたが、柄を別にして芦などをさし込んだものも多い。南東部の諸地方では、むしろ芦や木の柄をつけたものの方が普通であつて、しかも粘土で細長い中空の柄を作るといふ、難しい技巧を必要としないところから、雁首には比較的入念の細工が施されてある。カロリナに住むカタウバ（Catawba）族が、多少の歐洲的影響を免れぬとは云へ、今日なほ保存して居る古來のパイプの型などは、その好例である。これに反して柄が極度に長いクレイパイプは、アーカンサスのカド（Caddoan）族が用ひたらしく、其の柄の長さは一尺二寸以上に及んで居るが、これは大抵破損してその墓地から掘り出される。これはあきらかに、玉蜀黍の穗軸に芦をさして作つた原始的パイプの型をそのまゝクレイに持つて來たもので中々技巧的の細工であつた。

ストンパイプになると、あのギチエ・マニトウの神話を有する民族だけでも、其の分布は極めて廣く、從つて其の種類も極めて多樣である。所によつては、同一の型が石とクレイの二つの材料によつて示されて居るが、ストンパイプにはクレイでは到底及びがたい技巧が示されあつて、驚嘆に價するものもある。用ひられる石は、滑石蠟石などの軟質のものを主とするが、中には石英を用ひたものもある。素材は一般にその品質を重視したが、又一方ダコタの石切場のやうに、一定の場所以外からこれを採らぬといふやうなこともあつた。これは主として彼等の信仰によるものである。

此の他に蛇紋石、石盤石などが用ひられるが、ミシシツピイより大平原地方にかけては、粘板岩の一種で細工には適度の軟さを持つて居り、然も質が緻密であるから、その出來上りも美しく光澤にとむといふ、例のカトリナイトが主要部分を占める。このカトリナイトの石切場としては、ダコタ（一說にはミネソタ州に屬するといふ）が最も有名なことは前述の如くである。

ここには、美しい赤色のカトリナイト——我國の赤間ケ石に似て居る——を產するが、これは石英質の層の間に挾

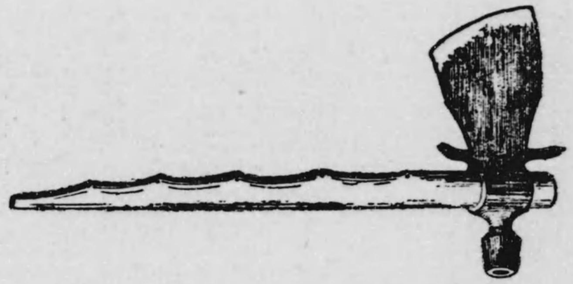
まれて居て、その厚さは約一尺五六寸を出ないに反して、これを疊み込んだ石英の厚さは、約六尺——八尺に達して居る。土人は唯信仰の一念から、此の困難な仕事を、それこそ石に嚙りついてもやるのである。彼等には、ボーリングもなければ、勿論ハツバもない。ではどうしてこの石英の層にたゝみ込まれたカトリナイトを採取するかといふと、先づ岩の上でさかんに火をたいて充分に岩を熱する。さうして急に冷水をそゝぐと、岩はボコリと割れて、そこに膚美しきカトリナイトが出て來るといふ方法でやるのだ。現在では、此の石切場のあとは一哩以上の延長を有して居つて、數世紀にわたる採取を物語つて居る。



上　ハイダ族のスレート製パイプ
下　ハイダ族の木製パイプ（蛋白石の象嵌あり）

土人の口碑によれば、こゝには多くの部族が集つて來て、敵意をすてゝ採取に協力したものであるが、ダコタ族は地元丈けに最も勢力を有して居つて、專用の採取場をその中に持つて居つたとさへ傳へられて居る。然るにこゝに悲慘なのは、白人が彼等を此の石切場から逐ふてこれに代り、一八六五年、六六年の二ケ年間に約二千のパイプを作つて、土人に賣りつけたことである——否、インディアン達がこれを買はねばならなかつたことである。さうして遂には柄だけのパイプを持たねばならなくなつたことである。

然るに、此の白人との接觸によつて、もう一つの影響がインディアンのパイプに及ぼされた。即ち彼の戰斧パイプ（Tomahawk Pipe）がそれである。これぞ眞の戰爭パイプとも云ふべきものであらうが、その宗教的意義においては、彼の戰爭パイプと異つて、殆んど見るべきものを持たぬ。これはつまり彼等の武器たる斧を、そのまゝパイプに仕立てたもので、此の斧を持ちあるくことは又パイプを持つてあるくといふ事にもなる。然しこの樣な功利的の發明は、勿論信仰に生きるインディアンのものではなく、全く英佛の殖民によつて作られた所謂トレードパイプ（貿易パイプとでもいふべきか、外國から輸入されたパイプ英國に於けるオランダクレイ、アメリカに於ける英國クレイなどがそれである）の一種であつて、最も變態的なものに屬する。（上圖參照）これは歐洲殖民が、土人の歡心を買はんために、考へ出したもので、普通の斧の背に火皿がつき、柄がそのまゝ雜宇となつて居る。勿論火皿は鋼鐵製であつて、英國型のものは、その斧刄が扁平であるに反して、スペイン型は刄に反りを持つて居る。此の戰斧パイプは時に精巧なる細工を施して酋長あたりに贈られた事もあり、東部インディアンでは、是を珍重するのあまり、遂に棍棒までもパイプに作りあげたものさへある。



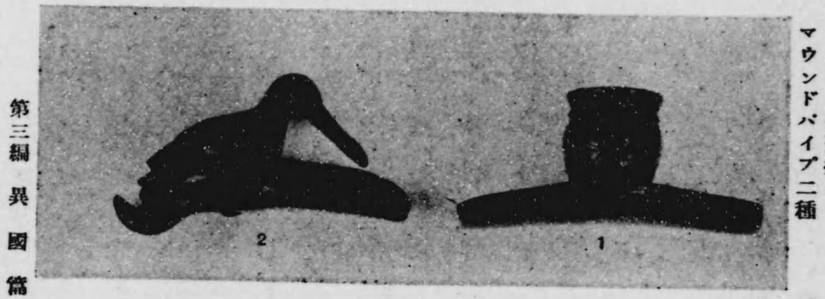
紀州日高郡の虎吉等の米國漂流記に、歸國の途、乍浦（サホ）に於て見た所の「煙管は大なるものにて、らうは木を刳りぬきたるものなり（中略）他行の節持ち煙管は長さ一間位にして火皿に劍有て土突きてらうの中程へ煙草入を据り付、杖にして歩行候由」などとあるのも、この戰斧パイプを思ひ出させはするが、なほ及ばざること遠い。況んや元和頃、我

が國の不良少年が肩にかついで市中を横行濶歩した鐵煙管の如きは、同日の話しではない。

アメリカ北西部の沿岸、今のブリティシュ・コロンビア地方では又特殊のパイプを見る。此の地方は峽灣深く山地に喰ひ込み、巨杉幹をならべて海に逼り、大小の島嶼又錯雜散在するといふ有様で、鮭や鰈の漁場としてすぐれて居たので、土人は早くもその杉を伐つて舟を作り、海の幸を漁つて生活して居た。さうして彼等は家の前に建てるトーテム・ポール（彼等の部落、又は姓氏の表徴として、鳥魚獸の形を彫りつけて家の前に建てた柱碑）を作るにも此の杉材を用ひた。從つて彼等が木工にすぐれた技能を有するやうになつたのは當然で、そのパイプの如き亦、木で作つたものが多い。さうしてその彫刻的技能は角、石磬石にも及ぼされて獨特の美を誇つて居る。これ等のパイプは驚く可き程に錯雜した鳥獸人間の彫刻を以つて作られてあつて、彼等が「自然」に對する態度を知るにもまた、重要なる資料である。（ハイダ族パイプの圖一九七頁參照）

パイプに現される動物は、多くは彼等の家紋ともいふべきトーテムであつて、その眼に寶石を象嵌したものすらある。鷲、鷹、大烏、海狸、海豹などが主として扱はれ、これ等と一諸に彫られて居る人間は、超自然界と交靈するところの聖者を意味して居る。大鯨の如きは當然彼等の最も印象の深い對照となつて表現されて居る。

しかし、此の種のパイプは他のインディアンのそれに比して、極く近世に初まつたもので十八世以後と推定されて居る。彼等は以前は單に嚙み煙草の風のみしか知らず、訪れ來つた外來人と言へば、先づ南東アジア、マレイ地方の蒟醤食ひの漂流民位のものであつて、東方のインディアンの風は、ロッキイに遮られて是迄に及ばず、彼等が西洋式のパイプを知つたのは、漸く一七七八年、Captain James Cook (1728–99) キャプテン・クックが此の海岸を訪れた時に始まるといはれて居る。



オハイオ州發掘のマウンドパイプ二種

此の地方のパイプ以上に、その特性を發揮してトーテムを取扱つたものが卽ちマウンド・パイプである アルゴンキンに屬するチッペワ、デラウェア、シャンウェーの諸族には、その墓に土を盛り、死後の生活に必要とするもの——生前使用されたものを共に埋める風がある。これは何も珍しい風習といふ程のものではなく、日本にも多く見受けられるところで、犬養首相の死に際しても生前愛用の煙管煙具が棺中に納められて居る。此のインディアンの墓跡から發掘されるパイプが卽ちマウンドパイプであつて、メキシコ灣より、北は五湖地方に及ぶ廣汎の地域にわたつて見出されるが、就中オハイオ洲の如きはその代表的なるものである。

是を作り是を埋めたる土人は、コロンブスのアメリカ發見當時農耕に從事して居たものと云はれ、宗教的のトーテムを建てゝ崇拜して居た。彼等は部落又は氏姓によつてそのトーテムの鳥獸を異にし、神聖なる傳說を信じ、それの狩獵を禁じて居ることは、我が稻荷大明神の狐に於ける、八幡樣の白鳩に於ける以上のものであつて、それ自體殆んど神に迄高揚されて居るのであるが、此のトーテムが卽ち彼等のパイプにも彫り付けられて墓跡から發掘されるのである。

此のマウンドパイプの型式は、全く獨特のもので、他にその類を見ることは出來ない。火皿は扁平な、又は稍反りかへつた細長い臺の中央に直立して居る。さうして臺そのものが一端に孔を通じて、柄となり吸口となつて居るのである。此の火皿が卽ちトテームの型をとつて居るので、梟、海狸、鷲などが現され、人體を現したものには、その大いさから判斷して、明かに祭祀用と見られるものもある。これ等のパイプは、石か燒土を彫つたものゝみで、クレイのものは殆んどない。しかもこれが石製の平和パイプに影響を及ぼして居ることは直ちに想像出來るところである。

ギチエ・マニトウの大いなるみ姿を天に仰ぎ、ミシシツピイのほとりに蘆を折り、又グレートプレインに野牛を逐ひ、グランドキヤニオンの斷崖に祈り、自然のふところに抱かれて神を畏れた純情の子等、マヤの太古より煙草を知つて渡り來つた白人にこれを傳へ、入り來つた白人にこれを奪はれ、遂にその安住の地をも逐はれて行く。嘗つては戰爭パイプを高くかゝげて、疾驅したであらう曠原の勇士等も、今は映畫會社の一プログラム・ピクチュアに主演するフラツパーを引き立てやうため、神聖なる傳統を誇るべき服裝で、一場面の端役を引きうけるインジヤンとされて了つたのだ。悲慘なる亡失である。彼等のパイプからは、すでに大神マニトウを呼ぶべき力は消えて了つた。まことに悲慘なる亡失である。大陸横斷列車は今や彼等の葬送曲を奏しつゝ驀進して居るのではないか！

第四章　コンゴーの傳說

アフリカ大陸の邊陬にまで、行き亘つて居る煙草とパイプ、しかもそれが今より四世紀を溯るといふ事實は、ワイナー教授（Proffesor Leo Weiner）をして、そのダツカ・パイプの使用區域と關聯して、アフリカはコロンブスより約一世紀以前にアメリカへ

ブアカ族のダツカパイプ

はせるところの所以のものは何であるか――つまりかくの如く早くから、かくの如く廣汎に煙草が知られて居た事の原因は何處にあるか。

コロンブスのアメリカ發見以前に於て、ポルトガルの船はすでにアフリカ西海岸を走つて居た。さうして一五〇〇年、ブラヂルが發見されてから、ポルトガルと南米との交通は俄然頻繁となつて、アフリカ西海岸も亦、當然ポルトガルの海外政策の影響の下に置かれねばならなかつた。さうして其の影響たるや、先づポルトガル人の奴隷賣買に初つたのである。今も名に殘る奴隷海岸に訪れるものは、ポルトガルの船に非ずんばイギリスのそれであり、イギリスの船に非ずんばオランダのそれであつて、何れも海外侵略の帝國主義者の船であつた。

こゝに、ヨーロツパとアフリカとブラヂル間の目まぐるしい民族の混錯が展開されたわけであつて、アフリカの煙草の歷史亦、こゝに發生する。一般的にも云へることであるが、特に未開の土人の間にあつては、何等か外的の重大煙草を渡した――卽ちアフリカこそは眞の煙草の故鄕であると迄極言せしめて居るが、アメリカに於ける煙草の歷史から見れば、直ちにそれが無責任なる獨斷より生れた暴論であることが首肯されるであらう。それでは、ワイナー教授をして、かく言

な原因のない限り、自ら其の地を離れ又はその風習を變へるといふ樣なことはなく、父祖何代の面影を維持し續けるものであるが、十六世紀初頭よりの奴隷賣買業者の侵入は、俄然アフリカの平和をかき亂した。白人は奴隷を求めて上陸し、奴隷を漁つて侵入して來た。かくして自由なるニグロは捕へられて賣られ、送られてブラヂルに至るもの〻數は夥しいものであつた。

しかして、逃れ來る奴隷、歸り來る黑人は、白人と共に、ブラヂルの煙草を、アフリカに傳へずには居なかつたのである。しかもそれは、もし推察に誤りないならば、恐らく以前から土人間に行はれて居たであらう大麻喫煙の風習の重力のために、驚く可き流行の加速度を得たと共に、一方內地深く踏み入る白人達が、土人懷柔の一策として、ガラス玉などと共に、煙草を携へた事實と相俟つて、ワイナー敎授の說をすら生むまでになつたものであらう。

一六〇七年、ハリスの旅行記（Harris Travels）には、恐らく最初のものであらうと考へられる、煙草の記錄を見ることが出來る。

「煙草は彼等には、生活の半ばともいふべし。女も男と同樣に甚しき喫煙者にして、葉靑く新鮮なる中にその汁液を搾りとり、これを乾燥して刻み用ふ。彼等の手眞似を以つて我等に示すところによれば、葉のまゝ用ふる時は、その峻烈のために醉暈するに至るが故なりと。彼等のパイプの火皿は土製にして頗る長大、其の下端に於て中空の柄一二尺ばかりなるを欽めて、こゝより煙を吸ふ。然も彼等は唯口に含むのみにては滿足せず、腹中に迄吸込む、煙草を飲とむは全くこの事なり。」

オランダ人、ボスマン（Bosman）の「ギニア（Guinia）」といふ本は十七世紀末に書かれたものであるが、その中にブラヂル型のパイプのことが述べられてある。

「此の國亦煙草を產す。其の甚しき辛味は、是を用ふる土人の傍にあるも堪へがたき程に刺戟的なれども、彼等は全くこれを喜べり。

「彼等の中には、六尺に及ぶ芦のパイプを持てるものあり。その端に石又は土製の火皿を附したるが、其の大なること二掬み三掬みの煙草を一時に容るゝに足る程にして、彼等はこれを休む事なく一氣に吸ひ盡すなり。長大なれば、これを持つ事なく地上に支へるのみにして、內地のニグロは皆これを用ひたれども、我等の間にありて、日々白人と交るものは、ポルトガル――否むしろブラヂル煙草を用ふること、吾等と異らず、これとても幾分はよしと雖も、なほその辛味甚しきものあり。

「ニグロは男女を問はず煙草を好めるが故に、パンを求むべき最後の一錢をもこれに代へ、煙草なきに苦しむよりも、寧ろ餓に堪へんと云へり。かくの如き有樣なれば、其の價極めて高價にして、ポルトガル人は此の屑物一ポンドを以つて、なほ五志、又は四分の一ヤコブの金貨を得たり。

「されば吾等イスパニヤ、ヴアージニヤの良き煙草を用ふるものを讃ふべきなれども、かのアモルスフォルトの雜草を喜ぶ愚劣の輩にはその卑しき嗜好の罰として、一生涯ニグロよりもよき煙草を與へず、ブラヂル煙草も土曜日曜のみに之を許すべし。これとても、彼等は彼等のみ相交りて、吾等上品の喫煙者に交らしめざらん事を條件とすべきなり。」

アモルスフォルトとは、オランダのデヴエンテル附近の村名で、ヨーロツパで最初に煙草を栽培した名譽を誇るべき地と云はれて居るが、それは兎も角として、そこに產する煙草の品質たるやボスマン自身愛想をつかして居た程の

下等品であつたらしく、それと同日に談ぜられるアフリカ煙草亦、如何に辛辣なものであつたかゞ想像される。

大麻の煙を嗜み、又この樣に辛味の劇しい煙草しか持たぬ彼等に、水煙管――ダツカパイプ(dakka とは大麻の意)が用ひられるのは當然のことであらう。その煙を、水に濾すことによつて、幾分辛味を弱めて居るのは首肯できるが、更にその水を大切に保存して居て、酒のやうに呑むといふに至つては、畢竟濟度しがたき煙痴の輩といふ他はない。

アフリカに於けるパイプの多種多樣は、全く眩惑的であつて、容易に語り盡さるべき程度のものではない。よつてこゝでは、コンゴーの土人に語り傳へられる、煙草起源の物語を以つてこれに代へやう。

「今は昔、シヤムバ・ケムベ――あなかしこ、神のおん名は讃へられてあれ――ブションゴの地を治め給へる時、ルサナ・ルムンバラと呼ぶ男ありけり。彼はその性落ちつかず、靜かに村にとゞまる事なく、畑耕すよと見れば、羊を追ひ、獸を狩り、又は女あまたと交り、又此處より彼處と國のさ中を、彷徨ひありけり。さるほどに彼は、そのかみシヤムバの世には廣き限りをつくせるブションゴの地をも歩みつくし、さからひがたき漂旅のあこがれは、國の境を越えし彼方に誘惑せり。諸人(もろびと)ひとしく、彼の企てを愚かなりとて諫めしも効なく、ルムンバラは世の若人の例にもれず、老ひし人々のまごころこめしいましめも笑ひ去りて、まだ見ぬ國の誘惑にさからひがたかりしぞ是非もなき。さなり、まことに我等が幸は吾が居ぬ國にこそありと覺ゆれ。

「かくて一日、ルムンバラは弓と矢をとり、袋には糧つめて、ひとり西の方へと旅立ちぬ。月うつり星かはりて、幾歲經ぬる、彼のたよりを、村人きけるものなし、十年か二十年か又三十年か、誰數ふるや。とまれ年月へだたり、村人覺ゆる者もなくなりぬ。やがては旅に死せると思はるゝに至りて、弔はれぬ。『生前かくも向ふ見ずなりし男に今は安らけき眠りあれ』と。

「一夜村人ミズンバの焚火のまわりに集ひて、過ぎ去りしよき日のことゞもなつかしみ合へり。彼等はすでに老ひてありき。若者が明日の日のまぼろしにうつゝをぬかす折にても、老は昔をなつかしむものぞや。されど過去も未來も、彼等の思ふが如きものならざればこそ憂き世なれ、思ひ出の上を月光は淡くてらせど、又憧憬(のぞみ)は昇り來る朝日の光に輝けども。彼等の中には、ルサナ・ルムンバラの昔より老ひ來りて、そのかみの村の神秘にふれしものもありき。たま〳〵一人彼の名を口にのぼせしかど、皆々今は昔の友の愚かなりしに、灰色の頭をふるに過ぎざりき。なほもかたみに語り更かせる時、旅人一人歩み來りて彼等の間に席を乞へり。心怪しみしかども、彼等尋ねて禮を失ふをおそれたれば、旅人亦しばし默し居たり。やがて、しげ〳〵と村人の顏を見廻し、話しかけぬ。『おん身等ミズンバの村人よ、誰か我を憶え居らずや?』村人彼を見しが皆々その首をふれり。『おん身はボベ・ミクウェテにあらざるか、そなたはミコベならずや?』されど二人ともに彼を辨へざりき。旅人はもの憂はしげにうなだれて言へり、『異國に過せし永の月日は、こよなく親しみ合へる幼な友達も見忘れ果つる迄に、我を老ひしめたることの悲しや。誰か我を見覺えざるや、ルサナ・ルムンバラを! あの旅好きを!』

「すべては驚きて飛び起ちぬ。彼等その手もてルムンバラに觸れ試みて、身體(からだ)なき妖靈がよき村人をたぶらかすにあらざるかを知らんとせり。今に生きながらへて、まことに此の世のものなるを知れる時、歡びの聲は圍める焚火をゆるがしぬ。永く行方の知れざりし此の旅人が歸り來れるしらせは、風にあふられし野火の如くに村中にひろがりぬ。老も若きも彼を迎へんものとあまた相携へて集ひ來りぬ。すべての村人こゝに宴して、ルサナ・ルムンバラ

を讃へたり。

「やがて最後の羊も食べつくされ、最後の瓢もかたむけつくされ、おどりも疲れ果てし時に、老ひたる人々は此の宴の客を彼等のさ中に招じ出して、求めたり。

「ルサナ・ルムンバラよ、吾等今おん身の恙なく歸り來りしをかくよろこび迎へたり。願はくはおん身、如何に遙けき異國を旅したるかを語りて、持ち歸りしもろ〳〵のものを示し給へ。おん身の持ち歸りたる寶は何？　おん身の旅に集めし不思議なるもの貴きものを以つて吾等の眼をよろこばしめ給へ。』

「ルムンバラは彼の嚢をさぐりて煙草の葉二つ三つと種子の一包をとり出しぬ。

「彼おごそかに言へり。『ブションゴの人々よ、おん身等に此のものを持ち歸りしを感謝せよ。』

「老ひたる人々は、つぎ〳〵と此の葉を手にとりて見しが、唯頭をふるのみなりき。一人ははげしく叫びぬ。

「ルサナ・ルムンバラよ。そなたは今をたはむれの時となすや。此の草吾等に何の益やある。』

「他の者は嘲りて言へり。『恐らくは此の男、その誇りとする旅に何の得るところもなく、むしろ何かを失へるに非るか』と意味ありげに頭を指しぬ。

「ルサナ・ルムンバラは唯微笑みぬ。『我いまだ老耄せるにあらず、ミズンバの友達よ。今われの持ち來りし草こそは世にも貴きものなるぞ。』

『食ふによきものなりや。』

『否。』

『病によきものなりや。』

『然り、すべての病を癒す。その煙を吸へば惱める魂もいやす事、泣く兒の母に抱かるるに似たり。』

「かくて彼は嚢中よりパイプを取出し、煙草少しをつめて、木の燃えさしもてこれに火をつぎ、吸ひ初めたるに彼の顏は喜びに輝きぬ。

「老人達はひとしく語り合へぬ。『悲しきことよ、我が友の狂ひたるや疑ひなし、見よ彼は今火を食べ煙を飲む』と。

「されど彼等の一人、すぐれて勇氣あり。吾も試みてんと、ルムンバラに求めてパイプを受けとり、大きく一つ吸ひ込みたるに激しくむせかへりて、地にまろび喘ぎ悶えたり、漸く治りたる時に、彼はルムンバラを罵り拳をかためて責めよりぬ。

「ルサナ・ルムンバラの彼に答ふる樣、『おん身は母が初めて與へたる堅き食物に咽喉つまらする赤子の如し。されどそは、慣るゝに從ひて食事の折のよき友となるべきものぞ。おん身はあまりにも吸ひ過ぎたるなり。ことわざにも、一つ一つと籠をみたすとか。おん身は少しばかりを試むべかりしなり。さらばおん身もやがては吾のごとくに此の煙のあやしき力をよろこぶに至るべし。此の草はマカヤと呼びて人間至上の樂しみなり。吾はこれをベンデの國に學びたるなり。その國の人々はチュベンデと呼びて、潮を渡りて來れる不思議の民よりこれを知れるなり。おゝマカヤよ、マカヤよ、汝は如何なる不思議をなさんとするや。』言ひ畢りてルサナ・ルムンバラは恍惚として眼をとぢぬ。『火の鐵をやはらぐるごと、マカヤ亦人の心をやはらげん。もしもこれよりおん身等のはらからにしておん身等をあやまれる折、怒の血潮に顏を染め、走り行きて弓矢をとり、彼の命を斷たむとすることあらば——パイプ

をとつて煙草をのみ給へ。おん身等の怒はその芳香に消えむ。然して云はん、『さなり、われ、わが母の子を殺すべきにはあらぬぞや、たゞ彼をうちて理をさとさん』と。されどおん身等棍棒をとり行かんとする折にパイプをとりて、更に一ぷくを試みよ。道半ばにしておん身等は立ちどまり、微笑みて言はん、『否とよ、我はわが弟を打つべからず、彼はわが若き日の友ならずや、唯彼を叱るこそ——杖もて打つ事をせで、言葉激しく叱るこそふさはしけれ』と。かくて行く行くほどに、なほ煙草を吸ひつづけ給へ。一吸毎におん身等の心は情ふかくゆるやかになり行きて、怖れおのゝく罪人の許に至りし時には、彼のうなじをかい抱きて言はん、『兄弟よ、弟よ、過ぎ去れるものは過ぎ去らせよ、いざ我が小舎に來りて共に飲み、共に食ひて謝せん、二人は共に愛し合はん』と。

「さておん身等はみな、このルサナ・ルムンバラのいつはり云はざるを知れり。何時にまれおん身等の心怒りに燃え、憂ひに沈む折々には、唯マカヤの煙をのみ給へ。さらば平和と幸福とは再び心にたちもどらん。」

以上は、人類學者トーデイ氏(Mr. Torday)の傳へるところであつて、アメリカンインデイアンのヒアワサの神話の如き神韻漂渺たるところもなく、又山犬と牛のそれのやうに稚拙にして可憐なる童心もないが、又それ丈け現實的に、何等の不合理もないところに價値がある。然もこれより推論する時は、よく實際の場合に合致して居るのである。

一說には、ブションゴより西方に旅して行つたルムンバラは、コンゴの海岸に達し、ここに白人の奴隷商に捕へられて、南米に渡つたのではないか。さうしてベンデとは今のベネドをさすのではあるまいか。ベネドはアフリカギネア海岸から最も近い南米の港の一つである事實に考へて見ても首肯されるではないかと云ふのであるが、さうすると、ベンデの人々が「潮を渡りて來れる不思議の民よりこれを知れる」ことが、おかしくなる。南米ブラヂルには、海路煙草を傳へるが如きことはなかつた筈である。

よつて、此のベネドとは、ギネア海岸ニヂエル河の三角洲に位するベンデ(Bende)をさすものといふ說が、より合理的に考へられる。こゝはブションゴ(コンゴーの奥地)より西北に位して居り、「潮を渡りて來れる不思議の民」も解釋がつくわけである。卽ちブラヂル又はヨーロツパより來つた白人奴隷商を意味するものであつて、ルムンバラの語るところとよく合致して居る。ギネア海岸に上陸した煙草は大體こんな風にして、內地に入つて行つたものであらう。たゞ一つこゝに遺憾なのは、マカヤなる名の語源であるが、適當の文獻もなく、不明のまゝであることだ。

アフリカに於て、大麻(土語にて dakka)を喫煙することは、すでに煙草渡來以前からであつたと云はれ、これに用ひられる瓢製の水パイプ——ダツカ(dakka)パイプの種類も夥しい。アフリカでは、一般に大麻は、有毒危險であるにもかゝはらず——いやむしろその性質がある故にか、神聖にして且つ平和と友情の表徵とせられて居つて、バルカ族(Baluka)(コンゴ地方)の酋長の如きは「大麻の子」と稱せられて、神の子の意味をさへ有して居る。(ワイスマン氏の報告による。)我國古來の神道に於ても、大麻は神聖なる幣の美稱であり、柏と共にその纖維を神に捧げるならはしがあるが、東西處を全く異にして、古來何の關係もなかつたと思はれる、日本とアフリカに、大麻が共に神聖視されて居るといふことは、畢竟するにその强烈激甚な痲力の故であつて、我々を醉暈昏倒させるやうな麻力は卽ち超自然の作用であつて、そこには拒みがたき神意が顯示されて居ると見るは、原始宗教の通相である。前述のアメリカ土人の煙草、南米一部におけるコカ、キンマ、さては我が國の神酒など皆然りである。

この大麻の葉、芽を乾燥して作つたハシシュは強烈な魔醉劑であるが、その強毒は、これを用ひる民族を一代二代位にして滅して了ふと云はれて居るくらゐで、從つて、大麻喫飲の風は、永く同一民族、同一部落の間に行はれるといふことはなく、轉々として、民族より民族へ、部落より部落へと移つて行つて居る。バルカ族でも、これを喫飲して居るものは、僅々その二パーセントに過ぎず、然も之を喫せぬ土人間には、恐るべき罪惡として排されて居る。コンゴ地方に於ける大麻の用法は、これを細く刻んで鈴懸の葉に包んで吸ふものもあるといふが、これは一部に限られた方法であつて、主としてダツカパイプが使用されて居る。これとても前述の如く、極めて稀であつて、大勢は煙草によつて次第に驅逐されつゝあり、唯その用器卽ちダツカパイプが、大麻喫飲當時の名殘として、煙草に用ひられて居るといふに過ぎないのである。

原始未開の民族の間では、かくの如き痲痺性を有する植物は、一種の神力を帶びたものとして、宗教的待遇をうけて居るが、これはその痲痺性に淫する自己內心の矛盾を、宗教の欺瞞によつて蔽はんとする心理をも多分に含んで居る。アメリカンインディアン中、メキシコ地方の土人にあつては、煙草を用ひるに「燻する」、「香を焚く」などの言葉を用ひて其の神聖を强調して居るがごときも、その顯著な一例であらう。

かくて宗教の自己欺瞞性によつて、痲痺性の植物は皆神性を帶びるものと斷定されて、こゝに何等の矛盾も、危懼もなく、バアング（矢張り大麻から製するもの）ガンヂヤ（同上）などが、單獨に又は煙草に混じて用ひられるに至るのである。甚しきに至つては、コカインの原料コカを嚙んで、そこに尙ほ宗教的理由を見出さうとして居るものさへある。南米ペルー、ボリヴイア地方には此の傾向最も顯著なるものがある。

此地方のコカ喫食は、遂に煙草の領域をさへ侵して、煙草の煙を吸ふといふことは全然なく、皆、これを舐めるか食べるかである。更に舐めても、食べてもまだ不足と見えて、煙草の葉を煎じて濃液を作る。此の脂氣の强い眞黑な汁を瓢簞に入れて、腰に下げてあるくこと、丁度我國の煙草入れに異らない。

コロンビア地方の一部では、途中、知人に會ふたり、又は客を迎へた際には、お互に腰なる一瓢をとり出し、相手と交換して、その中へ指を突込んで舐めて見て、その味をほめ合ふ。近代生活のスピードは、彼等にも影響して、今では單にその眞似だけの略式となつて居る由であるが、もつて我國往時の請取渡しの禮にも比すべきか。

しかし以上の痲痺性植物の喫吸の害などは、魔草マリヒユアナの烈毒に比しては問題ではない。この草は矢張り中央アメリカ、メキシコ邊に生育するわづか二尺位の草にしか過ぎないのであるが、此の草を煙草同樣乾燥して、紙に卷き又はパイプに詰めて喫ふのであるが、わづか二三服にして、此の魔草の力によつて惡魔の捕虜となつて了ふのである。

この中毒症狀が、判然五段に分けられて進展するのも亦、マリヒユアナの魔毒が如何に强烈で且つ呪はしいものであるかを示すので全く恐怖の極みである。その中毒症狀の第一段は全く無意識の痲醉狀態で殆んど呼吸すら止まる。第二段は阿片のそれに於ける樣な恍惚狀態、第三段は非常な昂奮狀態で、狂犬の斷末魔の樣な叫びを發し初める。これが昂じて第四段に入ると最も怖るべき狂亂狀態となる。こゝでは全く人間でなく惡魔の狂暴があるのみだ。時には兇器をもつて戸外に飛び出して、手當り次第に人を殺傷する。この場合には、古來我國に傳へられるところのはしりどころ（莨菪）の中毒症狀に見る樣に唯ひたり走りに走るが、決して左右へそれることはないので、その惡魔の正面

を巧みに避けさへすれば、危難は免れるといふ。

さうして此の狀態の後に、昂奮が鎭まり、體力が衰へると、全く昏睡狀態に陷つて、前後不覺、生ける屍の如くに數日を昏々と眠りつゞけて、覺めては全くそのことを記憶しない。

かくの如く、マリヒュアナは、酒、煙草、阿片、コカイン、大麻、カルモチン等の作用を併せそなへた毒草であるので、現在では、この栽培、賣買は國法によつて嚴重に取締られて居る。

第五章　ニコチンの名譽

吾人の單なる煙草的觀察からしても、コロンブス（Christopher Columbus (1446?-1506)）——クリストファ・コロンブスは、正しく世紀の人物である。彼によしアメリカ大陸を發見した功なくとも、アメリカ土人の風習中から、煙草を文明へ導入するの緒を得せしめた一事は、よく彼の名を不朽たらしむべきものであらう。まことに、ジェームス・バリイの云ふが如く、英國はサー、ウヲルター、ラレイの名譽の爲めに、其の名を改むべきであつたとするならば、タバコは、當然コロンブスの名によつて呼ばれ、學名コロンブサーナ・タバキウム（Colombusana Tabacum）又はヘルバ・コロンブサ（Herba Colombusa）とでも云ふべきであつたらう。

夜と晝と、晝と夜とを、彼の船は暗黑と恐怖と孤獨と共に、次第に人の生くる所を遠ざかつて行つたのである。且つて人間の船が浮んだことのない海の嵐、行方を知らぬ潮流のはげしさ、舷側を襲ふ怪魚の飛沫（しぶき）——さうして無智な水夫達の不安より來る陰謀などの中を、押しきつて、たゞ一人東洋の富を目あてに船を進めた彼コロンブスの自信と意志には、正に英雄的風丰がある。

恐らくあと一時間で、コロンブスを殺して船をかへさうと謀らせる程に水夫を劫しつゞけたであらう長い長い絶望的の航海の幾十日後、遂にオリノコの匂しき淡水（まみづ）が、此の船べりに媚び來つて、ひた〳〵と接吻して迎へてくれた、その船の歡び、まことに、「見よ、その口に橄欖の若葉ありき」である。地球の丸さをあまりにも過少に考へたコロンブスの誤謬は、しかし乍らその推論の正しさの故に、結果においては豫期以上の成功を齎したのだ。晴れ行く大洋の朝霧の彼方、遙か水平線上に、今こそ欺き了せぬバハマの島影が見え出したのである。今五萬噸の巨船を浮べ、やがては大型旅客機が百餘の旅客を乗せて飛ぶであらう、此の大西洋の最初の開拓者、クリストファ・コロンブスは讃へられてあれ。

彼は初めてワツトリングの岸に上陸した時、力强い大地の觸感が、足底からぐつと押し上げて來るのに、戰慄と感激のいつぱいを味はつたことであらう。こゝより更に西南に進む途中、乾いた葉を積んだ土人の獨木舟を見た由であるが、まことの喫煙を見たのはキュバ（一說にはサント・ドミンゴ）に於てゞある。

コロンブスは、印度又は支那に達したものと考へて居たから、何はさておき、先づ大汗に敬意を表さうといふので、カルデア語、アラビア語、ヘブライ語を解する碩學二名を先發させた。

彼等は、或ひはタヂマハールの壯麗を、又は萬里の長城の雄大を、さなくばマルコポロの言ふ黃金葺きの日本家屋

を見んと豫期して行つたかも知れないが、事實彼等二名の碩學が最初に動かされた好奇心は、タバコによつてゞあつた。彼等の見たところによると、「諸人多く枯葉を卷きたるものと共に、火把を携へたり、此のものゝ片方に火をつけ、他方のはしより煙を飲みたり。然して彼等の示すところによれば、このもの四肢五體を安らかにし、醉を呼び、眠りをさそひ、つかれを和ぐる由にて、タバコといふものなりとぞ。」

コロンブスのアメリカ紀行をものした、チアバの僧正バルトロメオ・デ・ラスカサス(Bartholome) de Lascasas(1974-1566)は當時永くアメリカに止つて、新世界の研究をした權威者であるが、彼の「インド史」(Hist. Gen. de La Indias)によると「彼等は途中印度人の男女あまた小さき火を携へたるに會へり、そは一種の草を燃してその煙を吸ふなり。」又「印度人は一種の草を持ちて、その煙を吸ふに陶然喜悅すること甚し。彼等は此の葉を乾し卷きて棒狀となすこと我國の小兒等が、聖誕節に作る小銃の如し。この一端に火をつけて、他方より舐め吸ふてその煙をのみ、五肢全體の安慰を求め、遂に醉酩に至る。彼等の語るをきけば、かくする時はすでに何等の疲勞を覺ゆる事なしと。その小銃即ち彼等がタバコと稱するものはすでに我が殖民にも用ひられたり。人若し此の習慣を止めしめんと試むとも、彼等はその快を失ふこと不可能なりと答ふる有樣なり。知らず、それによりて何の美味を味ひ、何の德を見出すかを。」

チアバの僧正が、只管神のおん前に清淨ならんとするのは、それは吾人のさして關係するところではないが、これが煙草の非難となつて現れる時は、靜かに次の如き例を數へて見たくなる。つまりマンチエスターのムアハウス僧正は、「余は煙草をのむが故にます〳〵立派なるクリスチヤンなり」と云ふて居るし、ロンドンには、パイプくわへて大歡喜の中に昇天した牧師あり、ソートンの牧師補には、煙草の缺乏に堪へかねて、祈禱の鐘の麻綱をチ切つてパイプに詰めて吸ふた勇敢のもあれば、ドラクロア師は、イタリヤに最初の煙草を持ち歸つて居るし、ベネヂクト十三世は、煙草の德を讃へて、是を難じた先賢をこと〴〵く罵つてその教書を破棄した位である。

もと〳〵煙草の初りには、土人が神を拜するに當つて、これを犧牲の壇に燻じて祈つた程のものであるから、その宗教的見地から反對するといふ樣なことは、唯ジエームス一世の愚を學ぶに過ぎぬことになるし、又是をのんだ事もなくて反對するのは、陸にのみ止つて水を罵る樣なものである。

チアバの僧正の「インド史」には、コロンブスが歸國に當つて、煙草又はその種子を持ち歸つたか否かについては、何の言及もして居ないし、彼の凱旋一四九三年直後のイスパニアの文獻にもタバコのことは見當らない。

然るにコロンブスの第二次探險に從つて、アメリカに渡り、一四九六年三月以來サントドミンゴに止つたロマノ・パノ(Romano Pano)及びペトルス・ド・マルチリス(Petrus de Martyris)の兩名は、「吾等カルヽ五世(註、スペイン王カルヽ一世)に此の草の種子を献上せる最初の名譽を受くべきものなり」と主張して居るのから見れば、當時すでに、イスパニヤに渡つたことは肯定できる。

ついで勇將フェルナンド・コルテヅ(Fernand Cortez)の名は、煙草に關聯して無視することの出來ぬものである。十六世紀初頭、イスパニヤはすでにキュバを屬領として、ヴエラスケヅ(Verasquez)が、こゝに總督であつたが、彼は西方にメキシコといふ繁榮の王國あるを知つて、これを攻略しやうとコルテヅに計つた。

よつて、コルテヅは十一隻の軍船に六百七十人の戰士をのせて進み、キュバを攻め落したのが一五一九年のことである。當時のメキシコは、彼の世界最古の喫煙の記錄を殘したマヤ族のあとをうけたアズテク族の營むところで、驚嘆すべき文化を有し、文學、歷數に通じ、農をもつて榮えて居つたが、コルテヅは先づその軍隊を今のヴエラクルズ

に上陸せしめて、是を陷れた。

國王モンテズマ(Montezuma)は、こゝにイスパニヤ王カルヽ一世の主權を認めるといふことになり、多くの貢物を奉つたが、それは實に大船一隻に滿載して送つたと傳へられる程である。その貢物の目錄中に、煙草の幾包みかゞ數へられてあつた。しかしイスパニヤ國王は、その金銀財寶にこそ滿足したが、此の煙を吸ふだけの草の葉の包みと種子には、受く可き待遇を與へはしなかつた。カルヽ一世は、單に二三の航海者、探險家にのみ用ひられて居るに過ぎなかつた煙草には、さしたる驚くべき魅力のあることを知らなかつたのである。

さうしてマドリツドの宮廷でも、煙草の種子が、その花園に植えられた時には、定めし異鄕の珍草として見事な花を開くことだらう位にしか考へられて居なかつた。ところでその花は、人々の期待を裏切つて何の變哲もないものであつたので、宮廷は更に此の草に對する興味を失ふに至つたが、此頃からスペインの民衆は、煙草の何たるやを知り初めて來た。

コロンブスの二回に渡る探險に同行した水夫達は、正に當時の新知識であり、尖端人であつたわけで、煙草の流行は先づ彼等から初つた。しかし、その初めは、矢張り單なる醫藥的効果にのみ、大きな期待がかけられて居たに過ぎないのであつて、コルテヅがメキシコより本國に傳へたのも、此の意味であつたといふ。だから見たものも、まだ見ぬ者も、唯傳へ聞いてやがてマドリツド宮殿の花園より出るであらう靈草のたよりを、鶴首して待つて居たのであるが、誇張して傳へられたその特功の何分の一も、此草が有しないのは止むを得ぬところである。したがつてその期待が大きかつた丈けに、現實曝露の悲哀はそれ丈け痛切であつたわけで、折角これまでになつた、マドリツド市民の煙草に對する興味を、一時に減殺して了つた。これより以後四十年間は、殆んどその存在をすら忘れられんばかりに、唯宮庭の一隅につゝましく花咲くのみであつた。

だから、一五二〇年から六〇年に至る間の四十年は、實に南歐に渡つた煙草の隱忍雌伏準備の時代と見るべきであるが、一方、新世界からの歸航者は、彼地の煙草について語り傳へるもの多く、半信半疑の中にも、昔日の興味は再び呼び醒されて來た。煙草の復活はたゞ、機會の問題とまでなつて來たのである。

一五六〇年、スペイン領メキシコを旅行したフェルナンデス・ド・トレド(Juan Fernandes de Toledo)の著述は、さう大した權威あるものではなかつたのであるが、一般の興味を活動させる重大な動機を作つた。といふのは、彼がその著述中に、煙草が鎭痛劑として、又生創、刄創などに特効あることを、事實の權威を以つて述べて居るのに興味をもたれた國王カルヽ一世は、フェルナンデスのいふところ、果して事實なるや否やを試さうと、メキシコの法に從つて、犬に創つけ、それに煙草の青葉の汁を塗布したところ、其効全く神の如きに驚嘆したといふ。民衆は學者によつて主張せられ、國王によつて實驗されたその効果を信ずるに、尙ほ躊躇するほどの懷疑派ではなかつた。こゝにスペインは、やがて情熱の煙草工女カルメンを生むべき文化の世界へ進み出したわけである。

かくて一五七四年、セヴィラの博士ニコラスモナルデス(Dr. Nicolas Monardes)は、アメリカの醫藥に關する三卷の研究を公にしたが、彼は此の著述の中に、萬病に對する煙草の用法を巨細に亘つて詳說し、後世歐洲醫學界に、煙草の論ぜられる際は必ず引用される程の權威を示した。然も、彼は一度もアメリカの地を踏んだ經驗なく、此の浩瀚なる研究は、主として新世界から歸り來つた、旅行者、水夫等の口より語られたところに基いてなされたものであるといふに至つては、まこ

とに彼の努力と才能の非凡なのに驚かされる。こゝには煙草の醫藥的効能をならべ立てる餘裕はないので、その結論となつて居るところを一部引用して見る。

「略、一般に煙草と呼ばれたる此草は、主としてヌエバ・エスパニヤとして知られたる地方のインデイアンの間に古くより知られたるもの也。此國を占領せし後、我がイスパニヤ人は土人に教へらるゝまゝに、戰爭にうけし傷に用ひ、治療して其の効を知れるものなり。數年以前（註、此の結論は一五七一年述）此草はイスパニヤに渡りしが、初めの程は唯その花美しきまゝに、庭園を飾るに用ひらるゝのみにして、その不可思議なる藥効は未だ認められざりしなり。今我等がこれを愛するは、その美しき故にはあらずして、實にその効能の故なり。然して是等の藥効は、大方の讃辭を受くるにあやまたざるものなる事を信ず云々。」

モナルデス著述の圖

かくの如く、スペインの煙草はメキシコ渡來であつたので、その用法亦メキシコ風に、葉卷、卷煙草としてゞあつて、一般にパイプを用ひるといふ事はなかつた。モナルデスは、芦及び木のパイプも新エスパニヤから渡つた由を述べて居るが、これ等のパイプは喘息を癒す際に用ひられた、謂はゞ醫療器具としてゞあつたので、喫煙の道具として取扱はれなかつた由を斷つて居る。

スペインは、かやうに煙草を輸入して我が物とするに至つたが、一般に考へられたであらう樣に、歐洲大陸に是を傳へるといふ役目を演じて居ないのは一見甚だ不合理のやうではあるが、それは當時唯海外發展にのみ汲々として、ピレネー山脈によつて遮斷せられて居る歐洲本土との接觸は殊更疎かつたに起因して居る。尤も十九世紀の葉卷の流行は、スペインよりとせられて居るが、これとて獨逸人によつて紹介せられたもので、スペインはこゝにも積極的の役目をなしては居ないのである。

ポルトガルにあつても、矢張り精確なる最初は不明である。一五五八年、フランダースのダミアン・ド・グース（Damian de Goes）なるものが、種子をフロリダから齎して、首都リスボンの王宮に植えたに初るとの說が、溯り得る最古のものとされて居るが、實際航海者によつて紹介されたのは、それより以前と考へられる。下つて信ずべき文獻としては、一五六〇年及び、一五六四――六五年の二回に亘つて、南歐の植物を調査したクルシウス（Clusius）の著「異邦論（Exotica）」がある。これにはポルトガルの冬季、花滿開の煙草が栽培されて居るのを見たと書いてある。然しこれ等の文獻は、やがてフランス人ジヤン・ニコー（Jean Nicot）が登場する舞臺の背景として以外には、さして重要なものではない。ポルトガルの煙草は、それがニコーを離れて論ぜられる限りは、殆んど興味を惹くに足らぬ程度にしか過ぎないのである。然して、ニコーは、彼一人のみにても、一方ならぬ興味を提供しては居るが、我々をかくも喝采させる所以のものは、實に今一人アンドレ・テヴエー（André Thevet）なる硬骨漢あるが故である。煙草を中心とした、此の二人の對立は、十六世紀の煙草史中、最も興味ある一頁を占めるものと云へやう。

アンドレー・テヴエーは、一五〇二年アンゴウレムに生れて、神學を巴里に學んだが、さしたる成績を示すこともたかつた。性來旅行を好み異國の風物に憧れて堪へきれず、遂に一五五五年ヴイユゲイニヨン(V. Duardo Villegaignon)の探險隊に加つてブラヂルに渡つた。此の一行はガナブラ河畔か、又はサント・ジヤヌアリオ(今のリオデジヤネイロ)附近に殖民地を建設せんとの目的であつた。テヴエーは同年十一月より翌五六年一月迄の三ケ月、是處に止つたが、その間ラプラタの奥地に踏み入つて、バタゴニヤ人に殺されやうとしたところを、居合せたスコットランド人に助けられたりして、種々の研究を遂げた。その結果が、一五五七年「別名アメリカ南海佛蘭西奇譚」(Les Singularitez de la France antarctique, autrement nommée Amerique: et de plusieurs terres et isles decouvertes de nostre temps.) といふ樣な一書となつて現れたが、その內容は、彼の根氣と努力にも不闘、稍々混亂晦澁の憾みがあつて、ブラヂルに於て親しく觀察したところ以外に、アフリカ、ペルー、カナダ、フロリダ諸國に頁數の大部分を費して居る。然も此の諸國には、彼の足跡は及んで居ず、他より聞いた所、讀んだところを集成したに過ぎない。だから此の本の價値は、わづかの頁しか占めて居ないブラヂル篇にあるといふてもよい位だが、幸なことには、彼は此の中に、煙草に論及して、ブラヂルの土語ペチユン Petun を出して居るし、大きな椰子の葉で此のペチユン卽ち煙草を卷き、蠟燭の樣にして用ひると述べて居るのも新しい報告であつた。事實、當時ブラヂルでは、パイプの使用はなかつたのである。

我が文化年間、磐水大槻玄澤翁が上梓した蒐錄中に、盎牒列究斯(アンデレアス)、的歇去斯(ヂヘチユス)の名によつて紹介されてあるのが卽ち彼アンドレー・テヴエーのことであつて、「此草初メ之ヲ出ス所ノ土人其ノ乾葉ヲ呼ビテ百敦(ペチユウン)ト曰フ、又答跋(タバコ)古ト曰フ、常ニ乾葉ヲ取リ達獨兒(ダードル)樹葉(椰類)ヲ以テ其ノ一頭ヲ捲キテ點火シ一方ヲ口ニ着ケテ之ヲ吸フ(原漢文)(第一篇二五頁參照)」と譯されて居る。テヴエーは更にカナダの煙草に迄論及しては居るが、彼の著書中、自ら其葉又は種子をフランスへ持ち歸つたといふことは述べてない。

一方、ジヤン・ニコーは、一五三〇年、ニーメの公證人の息として生れ、長じて巴里に學び、認められて一五五九年より六一年に至る間、フランス大使としてポルトガルに駐在したが、その赴任の年のある日リスボンの刑務所を訪れて典獄からフロリダ渡來の珍草として、煙草の種子を贈られた。一說には、ダミアン・ド・グースからであるとも傳へられて居るが、何人から貰つたかといふことは、こゝではさして重大の問題ではない。一五五九年の夏、ニコーの庭に此の花の咲いたことこそ注意すべき事柄だ。

かくて、彼は煙草の醫藥的價値の發見に沒頭したが、それによつて得た確心は、遂に彼をして、その葉と種子とを國王フランソア二世と后母カタリナ・ド・メヂチに献上せしむるに至つた。然して翌一五六〇年には、早くも廣く一般に知られる樣になり、更に翌年彼が喫煙草を頭痛の妙藥として、カタリナ母后に献じてより、流行はフランス全土に導かれたと傳へられて居る。

これによつて、一五七三年、ニコーが編纂にあづかつた、佛蘭西羅甸辭書には、煙草をニコチアナ(Nicotiana)と命名して、「此ノ草ハアラユル傷創、腫物、上唇狼瘡【潰瘍及ビ潰蝕性顏面腫】水疱疹其他ニ對シテ奇効アリ、ジヤン・ニコー氏、ポルトガル國王ニ使節タリシ時、フランスニ送ラレタルモノニシテ、其名亦ニコー氏ヨリ來ル」「農家」(La Maison rustique)第　卷　第　章參照」と說明されてある。

此の農家なる本は、一五七〇年シヤルル・エシアンヌ(Charles Estianne)、ジヤン・リイボー(Jean Liebault)の兩名が、巴里で出版した、農業の書物で

あつて、中に煙草に關する最初の研究が發表されてある。此の際、兩名が參考としたものは、ニコーの意見であつてテヴェーの著述ではなかつた。事實リイボーは親しくニコーについて、其の所說をきゝ、最初の煙草を傳へたといふ彼の名譽のために、ニコチアヌの名を與へたといふのである。

だから、これをきいて憤慨したのはテヴェーで、此の佛蘭西雜甸辭書が出版されてから二年、卽ち一五七五年に彼は「萬國世界學」なる著を公にして、ニコーに反駁した。「余は何人よりも先んじて此草の種子をフランスに傳へたるを誇り得るものなり。余は何人よりも先んじて、此草の種子を蒔き、余の故鄕に因みてこれをアンゴールモアジーヌ草(Herbe Angoulmoisine)と命名せるものなり、その後、嘗つて一度の航海の經驗もなき何某とやらん、自らの名を附したるは、我におくること十年の後のことなり。」(Cosmographie Universelle)

此の何某とやらんいふ男とは、勿論ニコーを指して居る。何しろ彼の前著、南海佛蘭西奇譚には、煙草のことは書いてあるが、持ち歸つたとは云ふてないのは、前述の通りなので、それから二十年近く經つて、今更、あの時持ち歸つたと言ひ足したところで、時効にかゝりさうだし、且つその論敵は、宮廷の名士で王の寵愛も一入であるといふ、まことに相手にとつて不足はないが、それ丈け又つらいわけであつた。

一六〇〇年版、オリヴイエ・ド・セレーの「農業舞臺」(Olivier de Serres, Theatre d'Agriculture)には、テヴェーの事情も知つて居乍ら、全くニコーを支持して居るのを初め、フランスの特權階級は悉く、テヴェーを相手にせず、ニコーこそは、煙草の眞の紹介者なることを宣傳これ努めた。その頃編纂された「全國人名辭書」の如きも、ジヤン・ニコーの條には、「フランシスカンテヴェーは、煙草を佛蘭西に渡せる光榮をニコーと爭ひたれども、彼の主張は好意を以て迎へられず、最初煙草に與へられたるニコチアヌの名は、尠くとも科學的術語として用ひられたり。されど彼ニコーが母后に獻じたるものゝ重大なる意義を知り、他日國庫に於て三千萬の收入を見るに至るべきものなるを豫め察知せるものなるや否やは疑はし。」などとあるが、こんな書き方は、カーライルの所謂卑下の高慢であつて、まことに紳士のとらざる惡趣味といふべきだ。

更にテヴェーの條を見ると、煙草に關聯しては一言の言及もないのみか、「その輕信を以つて知らる」とある。苟しくも全國紳士錄ともいふべき本に、こんな風に紹介されて快しとするものがあるかどうか。更に「然れども彼、無智と嘘吐きより遠ざかれり、語學と地理に造詣ありと信ぜらる。」に至つては、實に侮辱して居るわけで、彼の主張をあれ程に否定反對して居乍ら、殊更當時の學界社交界の一覽表であり、後世にはその誇りを傳へるべき紳士錄に、輕信を以つて知られて居るが、嘘吐きから遠ざかつて居るなどと、書きとばすのは、實に言語同斷の侮辱である、これでは、嘗つては嘘吐きであつたといふ消極的證明ではないか。宮廷貴族、社交界などが相結んで、野にある純情の一學徒をかく迄に侮辱嘲弄しやうとする、その特權階級の低級下劣こそ、まさに王朝時代の特徵であつたのだらう。

しかもテヴェーには有力なる味方もなく、爾來快々として樂まず、遂に煙草の代りに、萬斛の恨みをのんで死んで了つた。若干遲すぎた憾みがないでもないが、彼の死後約三百年をたつた一八七八年、パウル・ガフアレルが、彼の南海佛蘭奇譯の再版の序論に於て、初めて力强い辯護をしてくれた。

「テヴェーのための正當なる辯護は今日迄、何等一般から耳をかされるところとならなかつた。彼れが當然煙草に與ふべき權利を保有するエルブ・アンゴウルモアジーヌの名は拒まれて來た。健忘の後繼者はこれにつぎ、尙ほひきつゞき不當の感謝をニコーに捧げて居る。吾人は尠くともかの不正なる判斷に虛僞の烙印を押し、テヴェーに、

然して唯テヴエー一人にのみ、國庫はその莫大なる收入を負ひ、讀者の大多數はその日々の享樂を負ふものなる事を、聲高く主張するに何の反對を受くべきいはれかあらん。」

死後、あまりに遲い憾みはあつても、テヴエーにしてもし靈あつてこれを聞いたならば、もつて瞑すべきであらう。

然らば、三百年も爭ひつゞけて、尙ほ兩方共に讓歩しやうとしないその原因は如何なるところに存するか。今兩者の場合の根本に立ち入つて見やう。

テヴエーがブラヂルから持ち來つたと稱するものは、メキシコ系のニコチアナ・タバキウム種（Nicotiana tabacum）でなければならぬし、ニコーがポルトガルから持つて歸つたものは、ダミアン・ド・グースの記錄にもフロリダ產とある故に、明らかにニコチアナ・ルスチカ種（Nicotiana Rustica）である。フロリダでは當時、まだタバキウム種は知られて居なかつたものである。此の二種は前述のオリヴイエ・ド・セレーの著述にも、それと考へられる二種があげられてゐるが、賢明なる著者は、これを雄草、雌草と區別した。卽ち葉の大きなタバキウム種は雄草、小さな葉のルスチカ種は雌草であると言ふて居るが、彼はこゝにニコーを支持しやうとし乍ら、明かにテヴエーの著書から學んだと思はれる「雄ベチユム又はタバクといふ。」「アメリカ（註こゝには南米をさす）のベチユム」などの文字が用ひられてあつて、國內におけるニコチアナ・タバキウム種の存在を承認して、問ふに落ちず、語るに落ちて居る。

然も一五五九年、ニコーがポルトガルに栽培し、これを宮廷に献じてよりわづか二年の短日月に、煙草がフランス全土に擴まつたといふ事は、一寸そのまゝ信をおきがたい所で、これはむしろそれまで一般的に知られてなかつたニコチアナ・タバキウム種が、當時すでに潛航的にひろく行き亘つて居たことを力强く證明するものに他ならない。

卽ちニコーがポルトガルから煙草を入れたのが一五五九年であるに對して、テヴエーがブラヂルから歸國したのが一五五六年であるから、その間に、又はそれ以前に他の何人かゞブラヂル煙草を輸入したといふことが實證されぬ限り、テヴエーは自らいふやうに十年も前ではないが――こゝらあたりの誇張があの紳士錄にやられる弱點なのだらう――ニコーより三年早くタバキウム種を輸入して居たわけである。

であるから、テヴエーが主張するエルブ・アンゴウルモアジーヌの名稱は、當然ニコチアナに代るべきであるとするガフアレルの所論は正當なりとせねばならぬ。テヴエー、性愚鈍にして社交の術に長ぜず、遂にその功をニコーに奪はれて了つた。さうして彼ニコーの名は、今や煙草のある處、全世界に知られて居る有樣であるが、テヴエーは今尙ほこれを無念に思つて居るだらうか。もしさうだつたら、私は彼を慰めてやりたい。且つてはリスボンの宮廷に使し、フランソア二世のマントウの影に權勢を張り、聲望一世に高かつた彼も、今は徑半吋の試驗管の中に $C_{10}H_{14}N_2$ といふ姿となり果てゝ云はれることには「ニコチンは煙草の毒なり」と。

Molière (1622-1673) Don Juan, ou Le Festin de Pierre.
モリエルの喜劇「ピエールの饗宴に於けるドン・フアン」（一六六五）の第一幕にスガナレルはこんな意味のことを云ふて居る。

「アリストートルだの哲學だのが何を云はうとも、煙草にかなふものはない。これこそは紳士の情熱で、煙草のまずに生きてる輩は生きてる資格がないものだ。人間の頭を歡ばせきよめるだけではなうて、魂に德を吹き込んで立派

な紳士とする。一度これを用ひる時は、何人と共に飲むとも、どんなに懇懃となるかわからないし、何處にあつてもその左右に分ち與へるよろこびといふものがある。人はこれを他人から求められるのを待たずに、こつちから先方の望むのをせき立てる程だ。此の一事だけでも煙草を用ひる人々の、德と名譽の感情をどんなに高めるものであるかどうなづけやう。」

又、ブルア・リツトン Bulwer-Lytton (1803–1873) も同じやうに「パイプは腦を豐かにし、心をひらき、是をのむ者の考へは聖者の如く、行ひはサマリヤ人の如し」と推賞して居る。

ボウドレエル Charles Baudelaire (1821–1867) に、「詩人とパイプ」といふ詩があるが、大體こんな意味である。

我は一詩人のパイプ
我が色はかのアビシニア
彼我を下に置くことなきしるし
その胸の憂へ疲るゝ時々に
我は煙をあぐるなり
あるじを待てる賤が家の
夕げの煙のそれのごと
我が火口よりのぼり來る
ゆらめき青き煙もて
抱き慰むその心
そのなぐさめとその希望
又その徒然をいやすべき
力はわれの火皿にぞ。

南歐の太陽が、乙女の頰に褐色の接吻をする美しき國イタリヤ。カラブリアの酒に頰を染め、髭を濡らしてベスツムの圓柱に倚りかゝるよき國イタリア。こゝには一五六一年、プロスペロ・サンタクローチエ Prospero Santa Croce 師がリスボンより持ち歸つて、ヘルバ・サンタクローチエの名を與へたが、カストレ・デュランテ Castore Durante の新本草譜 Herbario novo（一五八五年ローマ版）には、「現在ローマにて夥しく見らるゝ煙草は、ひとへに尊敬すべき紳士サンタ・クローチエ僧正がポルトガルよりイタリアに持ち來りしによる」と述べて、煙草の効を推賞して居るが、これはニコチアナ・ルスチカ種である。

一方トスカナ駐劄の使節ニコロ・トルナブオニ Nicolo Tornabuoni 師は、煙草の藥効に感じて、種子をフロレンスの叔父アルフオンゾ Alfonso・トルナブオニ Tornabuoni に送つてよこしたのが、ニコチアナ・タバキウム種で、これをヘルバ・トルナブオナと命名した。それが何時の事か年代は不明であるが、此のトスカナ渡來の藥草を非常な興味と熱心とを以つて栽培して居たメヂチ家 Cosimo I de Medici の初代コシモが死んだのが一五七四年といふから、それより數年乃至は十數年以前のことであらう。

更に、正しき喫煙の法を傳へたのがこれ亦僧籍にあつた、クレセンチイオ Cardinal Crescenzio 僧正である。彼が英國（或ひは英國人）からパイプの使用と喫煙草の用法を敎はつたのが、凡そ一六一〇年の頃のことで、これより喫煙の風は特に敎會を中

心として盛になつて行つたのでウルバン八世の如きは、遂に教會の境内に於て、喫煙するものは破門するとさへ宣告するに至つた。

此の國の諺に、「酒と煙草と戀は人間を灰にする」'Bacco, tobacco e Venere riducon l'uomo in cenere, といふのがあるが、全く煙草に對するイタリア人の情熱は、時として恐るべきものになつて居る。前世紀の初め、佛蘭西から起つた、自由の思想が、全歐洲に非常な衝動を惹起して、宛然革命時代の觀を呈した時、當時オーストリアの屬領であつたイタリーにも、國粹フアツショ、カルボナリ黨が、自由と獨立と統一とを目標として起つたが、黨それ自らが先づ統一を缺いて居たところへ、オーストリアの辣腕宰相メツテルニツヒ Klemens W. N. L. von Metternich (1773-1859) の策謀は、何の苦もなく此の運動を鎭壓して了つた。かくもカルボナリが脆かつたのは、必ずしも史家が主張する樣な原因のみによるものではない。

元來煙草は、オーストリア政府の專賣となつて居たので、ひとたびイタリアの叛亂となるや、政府は直ちに、イタリアへの煙草輸送を禁じ、これに反して、出征のオーストリア兵士には、わざ〳〵多すぎる程の煙草を配給して、成るべくイタリア兵に見せびらかす樣にせよと命じたものである。イタリア側敗北の原因は實にこゝに存したのであつて、これが爲めに士氣大いに衰へ、折角の第一次獨立運動は失敗してしまつた。

この一八三〇年の失敗より十數年、イタリアにおける自由と獨立とを要望する聲は遂に完全なる國民運動にまで生長し、オーストリアに對する敵慨心は、メツテルニヒの陰險なる壓迫政策の故に愈々激化した。さうして過般の轍を踏むことを怖れて、國民の間に自然に禁煙勵行の氣運が起つて來た。物理學者ヨハン・カントニ等の宣言は、アメリカが獨立せんとするや先づイギリス茶のボイコツトより初めた先例を引いて、國民の覺醒を促した。

かくて「煙草を吸ふ奴はオーストリア人かスパイだ」と迄云はれる樣になつて、カフエー、バーなどでも、オーストリアの官吏軍人と共に、煙草は憎惡の目標となり、遂に一八四六年一月一日には、ある愛國秘密結社で國民的禁煙運動の强行が決議されるに至つた。

これがミラノの街頭に直接行動となつて現れるや、遂に市民と軍隊との衝突の火蓋は切られた。

總督ラデツキイ Johan W. A. F. F. Radetzky (1766-1858) は、その軍隊が煙草の故に加へられた侮辱に激怒して、殊更に兵士をして街上にて喫煙することを命じた。至るところに市民と兵士との衝突が惹起された。それがやがて凄慘な市街戰へと擴大して行つた。

この種の騷擾はひとりミラノに止らず、ボロニヤ、パヴイアにおいても相踵で起つた。これ等はライネル太公の意志によつて何れも軍隊側の讓步で一先づ平靜に歸したものゝ、ラデツキイ總督の怒りはおさまる筈もなく、そのライネル太公への報告中にも、この軍隊の讓步は反逆的行動への屈服なりとして、再びかゝる事あらば大擧軍隊を繰り出して實力をもつて彈壓するとあつた。それにも不關、パヂユア、ヴェニスにも同樣の事件が續發する有樣であつた。

こゝに至つて今まで認識不足であつたウキン政府もやうやくにして、事態の容易ならざるを悟つたが、メツテルニヒはなほも彈壓政策によつてこれを押へつけんとして居た。ミラノ事件に對しても彼はライネル太公の措置を軟弱なりとして大體次の如く不滿の意を表して居る。

「こは地方的特質と流行的特徵とを具へたる發作的病症狀態に外ならぬ。地方的特質とは外國人に對する傳統的憎惡を意味し、流行的特徵とは、近頃のはやり物例の革命的精神とかいふものだ。こんなものに對して兵力など用ゐる必要は全然ない。一結社が禁煙の指令權など持つものでは斷じてない。かやうの出過ぎた結社は直ちに强制解消せしめ

ればよいのだ。」

しかし「少數の誠忠者以外、貴族社會全般の空氣極めて險惡にして、政府及びオーストリア施設に對する反抗――これが彼等の合言葉」となつて居たといふライネル太公の觀察が正しかつたのだ。

かくて遂に四八年の早春、巴里より二月革命の飛報至るや、三月ウキーンの暴動、メツテルニヒの亡命と歴史の走馬燈は目まぐるしく廻轉して、イタリア獨立の旗は各地に相呼應して飜り、やがてイタリア今日の基礎を固むるに至つたのである。

第六章　北歐・アジアの煙草

英國の水夫、學生等はパイプをくわへて得意氣に大陸を歩き廻つたもので、ヨーロツパに於けるパイプ紹介者の名譽を與へられて居る程である。十六世紀末オランダのライデン大學に學んだ、デルフトの醫師ウイリアム・ヴアン・デル・メール(William van der Meer, Dr. J. Neander)が一六二一年、ブレーメンの醫師ネアンデル博士に送つた手紙中には、彼が一五九〇年頃まで知らなかつたパイプ使用を、このライデンに來て初めて覺えたが、最初英、佛の學生に眞似て吸ふた時には、あまり感心しなかつたと述べて居る。

然しこれは唯パイプの使用だけの話しで、煙草そのものの輸入は十六世紀の中葉に溯る。卽ちチューリツヒの醫師コンラヂン・フォン・ゲスネル(Konradin von Gesner)は、アウグスブルグのさる博士が煙草の葉を送つてくれた由を、早くも一五六五年の手紙にかいて居る。つまりフランスがポルトガルから煙草を傳へて後、わづかに五年であるが、その間に祖國フランスを逃れ來つたユゲノー達によつて傳へられたものと考へられる。又一說にはカルル五世(Charles V (1500-1558) イスパニヤ王カルル一世)が、スペインの軍隊をはるゝ〳〵獨逸に動かし、舊教擁護の爲に戰つた、あの一五五五年迄の禍亂の中に、直接スペインから傳へられたとも云はれて居るが、スペイン本國における煙草の歴史から見て、これは容易に首肯しがたいところである。

一五五九年には、チユウリンゲンのヅウルに於て煙草が栽培せられた記錄をのこして居るが、更に稍下つては、一五九八年、フアルツ伯フリイドリツヒ四世(Pfalzgraf Count Palatinate Friedrich)の政治錄にも、信賴すべき記錄が見られる。これによると當時すでに、フランス、アルサス地方の煙草栽培は、南獨逸一帶にまで擴つて居たと思はれる。しかしてこれら記錄の古いものは、概ね醫師の手になつたものであるか、又はそれに關聯したものであるところから見ても、最初は矢張り醫藥として用ひられたものであらうといふ事は、容易に推定されるところである。

ゲエテ(J. W. Göthe (1794-1832))の煙草嫌ひは有名なものだが、彼は煙草のために危くも鼎の輕重を問はれんとする樣な輕卒をやつて居る。卽ち史劇「エグモンド(Egmond)」の第二幕「ブリユツセル市の廣場」におけるゾエストの科目、「兵隊さんが俺(ヤシ)のところへ煙草を買ひに來た……」といふのがそれである。時はフイリツプ二世がオランダの自治權を奪ふべく、軍隊を動かした一五六七年に當る。

ダンヒル氏によれば、アモルスフオルトで煙草が栽培されたのがオランダ最初のことで、一六一五年なりといふて居り、更に一五六一年に作り初めてから五年目には、アメリカの本場物に優る品質のものを收穫した(ハミルトン氏)とさへ誇張して傳へられて居るが、一七世紀の初め頃に出たボスマンの著書「ギニア」の中には、その品質を極度に

罵つて居るくらゐだから、これも容易には信じ難い。先づ前掲のフリイドリツヒ四世の政治錄が信賴するに足るものとせば、それによつてオランダ地方でも一五九〇年代には、煙草も一般化しては居たであらうが、それより三十年も以前にすでに、ブリユツセルで煙草店があつたことは、全然否定し去るといふことも早計だが、しかしそれを斷然肯定すべき材料は見出しがたいところである。結局ゲエテは、あの場合ゾエストに煙草なんか賣らせない方が無難だつたであらう。

オランダ、ドイツ地方に、煙草がほんとうに一般化したのは、やうやく三十年戰爭以後のことである。

オランダ、イギリス、フランスが相談の結果、舊敎を奉ずるハプスブルグ家を打倒して、ドイツ地方の新敎徒を助け、各自國の勢力を伸展させやうといふのが此の三十年戰爭の原因であるが、一六一八年から四八年迄の丁度三十年間、斷續したので此の名がある。いつも引き合ひに出すが、あの愛嬌者の英王ジエームス一世は、フアルツ伯フリイドリツヒ五世を助ける爲めに軍隊を送つた。たゞ、海を隔てゝ養子を聲援した丈けであつたので、フリードリツヒ五世は敗けたのだといふ說もあるが、獨逸のものの本を見ると、少し許りではあつたが、軍隊を送つたと書いてある。

さうして、此の勇敢なるイギリスの兵隊はジエームス一世を王と戴くが故に、殆んどみんな煙草好き——尤も英國で煙草の嫌ひなのは、ジエームス王とシルヴエスターとあと二三人しか居なかつたのである——であつたものだから、その背囊には煙草をつめ、口にはパイプをくわへて出征したのである。一六二〇年、チツタウに至るや、此のパイプをくわへたイギリス兵のシイクなスタイルは、全く村の娘達をのぼせさせ、若者を憂鬱にし、老人を仰天させて了つた。かうして彼等は至る處に、煙草の煙と得意さとを吐きちらしつゝ戀を拾つては捨て、拾つては捨てしながら、二年の後には、ラインのほとりまで進軍した。

此のイギリス兵のパイプに惚れたのは、獨逸の娘達ばかりではない。侯伯の貴族大名までこれに倣ふ樣になつたので、ます〳〵得意のイギリス兵は、晝間は吃驚して居る百姓共の前を、兩手を胸にパイプを横ちよにくわへて往つたり來たりして見せる兵隊さんであり、夜はパイプの火を目じるしに、娘達を誘き出す兵隊さんであつた。村の青年達は憤慨した。「俺らもパイプちうものを吸うて對抗すべえ。外國の奴等に村の娘ッ子をとられてたまるもんか」といふことになり、遂に喫煙は全獨逸に擴がつて行つたと傳へられる。

これに對して一方では、「近ごろ新敎の異國より妖草渡り」などと攻擊の起つたのも亦當然のことであつて、「惡魔の草」、「地獄の責苦」などの罵りを受けなければならなかつたのは、何處とも同樣である。モシエローシュ（ヘツセン・カツセルの樞密顧問官）あたりが、「煙草のみは唯惡魔に魅かれた奴等のみ」などと喚めきたてゝも一向平氣であり得たが、一六五一年バウツエンの狹量無智なる市長が、それこそ惡魔に魅かれて、壓制的の法令を發するに至つたには少々閉口したといふことだ。

Johan Michael Moscherosch

「以レ之市民各々可二心得一事

吾等ひとしく愛し候祖國獨乙の國民性が、彼程に長き間惱まされ候戰爭の爾後、罪深き煙草喫吸の風流行致候事、よろづ不都合を惹き起すもとにて有之候。是の如き煙草喫吸は三四十年以前、吾等が親父の時代までは全く知られざりしものにて有レ之候へば、彼等は皆老年白髮となる迄に長壽仕れる次第に有レ之候、依つて吾等是に制禁布告致すものに有レ之候

一、爾後當領に於て煙草相飲み候者は、五ターレルの罰金たるべき事
一、燧石、炭火又は燃木を興へ候者亦右に同じく五ターレルの罰金を懲せらるべき事
一、右の條々其の都度屹度容赦なく取立て申すべき者也。」

一ターレルは約一圓五拾錢に相當するから、五ターレルと云へば、當時としては中々の大金であつた。

一六八〇年、ケルン選擧侯は、呪咀侮辱等の行爲に對して、五金貨グルーデンの罰金を課することを布令したが、その中に煙草をのむこと亦、火難罪とでもいふべき危險性の故に、同樣五グルーデンの罰金を課して居るが、こんなやり方が――どんなやり方でもだが――煙草に對して成功したといふためしはないのであつて、火難罪を犯すもの日に數十名を數へた。遂に、リューネブルグあたりでは、此の「煙草飲み候重罪」に對して牢舍、笞刑の罰を課した、然も此の笞刑は街の廣場・公衆の前でやるといふのだから、流石の愛煙家(フョーケ)連中も一寸たじろいだが、それとても大した効果なく終つて了つた。

此の煙草の制禁令のやうなものゝ活用が、最少の角度內に局限されて、しかもネヂの切れた時計の振子のやうに、次第にその振幅を狹めて行くのは、何處でも同樣であつて、我が德川政府の二百年に亘る禁壓も、名あつて實なかつたことは、すでに述べた通りである。獨逸に於ても、大勢は阻止しがたく、十八世紀初頭、諸侯自ら煙草を欲し、遂に人民の喫煙に對しては、許可證を出す樣に迄なつた。けれどもユリツヒベルグあたりでは、此の許可證なくて喫煙した者は、二十金貨グルーデンの罰金とあれば、まだ必ずしも油斷はならなかつた。

ザクセンゴータでは領主の命によつて、煙草呑みは三尺高い臺の上に、酒呑みと共にあげられ、又はその名を役所に掲示されて、嚴罰を課せられた程で、これをかばひ隱匿したもの亦、罪を免れ得ないといふ有樣であつた。一七二七年のフォジツシエツアイツング(世界最古の日刊新聞)の三面にこんなことが出て居る。「其の日、一人の男は密かに煙草のめる罪により、又一人の女はそれを幇助(ほうじょ)せる罪によりて、各々三日の間廣場の曝臺に上げられたりと云々。」

こんなことでは、中々効果のないことは、喫煙者死刑論すらあつた日本の江戸時代の煙草の流行でもわかる所だが、一七六四年、フリイドリツヒ大王は遂に勅令によつて、火難の虞れある喫煙を禁じた。しかしやがてヴアン・クラエスを生み、シュタインメツツを生み、モルトケ、ビスマルクを生んだ獨逸國民の煙草熱に對しては、フリイドリツヒ大王の勅令も効ない有樣であつた。

煙草はかくの如くにして全國に擴がつて行つた。煙草禁令は他面又その流行の歷史でもある。壓されて擴がるものは餅ばかりではない。何侯の命令、何處のお達し、今日は町令、明日は縣令、そして勅令といふ風に次々と、禁令が出るので、しまひには、民衆もこれに狎れて、パイプをくわへて高札に集るといふ風であつた。やがて町の片隅にタバコ屋といつた看板が現れ初めた。事實、ルイ十四世が、フアルツを攻めラインに侵入した一六八八年以前に、すでにパイプを賣る店が此の地方にあつたと云はれて居る。

煙草に對する彈壓の最後のあがきは、小さく貧弱であつた。「街頭にありては喫煙いたすまじき事」といふのがそれであるが、かの全歐を混亂の渦中に投じ去つた二月革命の火の嵐が、一八四八年一度ベルリン市中を吹き荒ぶや、市民は遂に、その三月七日テイアガルテンに大會を開き、課稅減額、出版の自由、檢閱制度の改善などと共に喫煙の自由を要求するに至つた。

プロシア王フリイドリツヒ四世は、大勢を察知して四月中に聯合地方議會を召集して善處すべき事を約し、極力事態の惡化を防がうとした。市民は王の此の態度に喜び、十八日王宮の前に參集して萬歲を叫んで、さしもの危機も去つたかの如くに思はれた時、突如群集中に混つて居た共和主義、社會主義の一派が軍隊の退去を要求したに端を發して、軍隊の發砲となり、市民は激昂して投石し、急造のバリケードによつて翌十九日まで凄慘なる市街戰は市內至るところに戰はれた。

十九日の劇的シインは、ジイメンスの「追憶記」(Werner von Siemens, Erinnerung. 1892. Berlin.)によつて知ることが出來る。

「暴動化した市民の一群は、凄慘な市街戰に倒れた同志の屍を擔いで王城前の廣場へ行つて、悲慘なる犧牲を國王に示さうとした。その時突然まだ年若いリヒノウスキイ公が躍り上つて群集に叫びかけた。「――市民諸君！　王は寬大なる思召をもつて、此の衝突の中止を希望されて居る。卽ち軍隊は直ちに撤退させて諸君の力をお信じにならうといはれるのだ。諸君の要求は全部御承認遊ばされた。だからこゝは一先づ安心して引いてくれ給へ！」

群集の中から質問がとんだ。

「それは本當か？　本當に全部御承認なされたのか？」

「勿論全部だ。」

「ぢやタバコもいゝんだな？」

「勿論タバコもお許し下された。」

「ティアガルテンででもいゝんだな？」

「勿論ティアガルテンでゞも。」

「さうか。ぢやもう用はない。歸らう、歸らう。」

こんな聲が群集の中に起つて、さしも殺氣立つて居た空氣も、平穩に消えてしまつた。」

勿論リヒノウスキイ公は獨斷で此の處置に出たもので、責任はあとで一身に負ふつもりであつたのだ。

かくて王は、直ちに軍隊を撤退させ、內閣を更迭し、十八日發砲の責任者たる王弟ウイルヘルムを辭任させ、國事犯人を大赦したが、その二十五日、卽ち一八四八年三月二十五日次の如く發令された。

「失火の虞れある地域以外にありては街上禁煙の令は、爾今以後當市及び附近町村において、撤廢せらるべきものなり。」

かくて、シュロツトマンの葉卷會社が、その製品をわざ〳〵クツクスハーフェンまで遠廻りして賣り出したといふ樣な苦心も必要ない喫煙時代となつて來たのである。

ロシア人が、煙草傳來の當初、これを貪り吸ふたことは非常なもので、鼻を質に置いてもといふ日本の呑兵衞どころか、その日の糧たる一片のパンでも煙草とならば喜んで換へたといふ位である。その吸殼の始末などにも、まことに無頓着で、モスカウではその爲めに大火を起した――日本ではちつとも珍しくない事だが――事さへある。それで一六三四年には、遂に賣買使用を禁じて、これに違反する者の鼻をそぎ落す事とした。が、そんなことで好き以上の煙草がやめられやう筈もなく、英國で一磅四十錢位のものがロシアでは六、七圓に賣れたといふ事實から考へても、

その煙草に對する熱狂ぶりがわかる。

ロシアでは、パイプの他に水煙管も用ひられた。J. Grull クラル氏に云はせると、これは最も獸的な方法であるさうなが、しかし喫煙を原始人以來の饑餓に對する本能の變形だとする說によるならば、ライオンの太股にカブリ附いたであらう我等の祖先の食慾を聯想させるところの、嚙煙草の形式こそ、喫煙方法中の最野蠻といふべきではあるまいか。此の水煙管は、南方、小アジア、トルコ方面から傳へられたものであるが、主として牛の角の中央に孔を穿けて、木製の火皿を嵌めてある。かうして角の中に水を注ぎ込んで、端の方から煙を吸ふので、アフリカのダツカパイプに最も近い形式と云ふべきものである。しかし實際はトルコ、ペルシヤのフーカ、カリアンを模して及ばず、かくの如き拙なるものを作り出したと見るのが當つて居る。

ロシアパイプの一種

その吸ひ方の貪婪なことは、クラル氏によると、まことに目を瞠らせる程のものであつて、二三度で吸ひつくし、吐き出す時は、忽ち室內濛々として咫尺を辨ぜぬとあるが、それ程でもあるまい。かうして醉ふと、ばつたり床にひつくり返つて、ものゝ二三十分は動く事が出來ない。さうしてやがて起き上る時には、もうすつかり元氣を恢復して、煙草の効能を並べたてると云ふて居るが、これも少しく云ひ過ぎの感があらう。

パイプは多く木製であつて、其の型式には、ヨーロッパの影響ありと認められる點は至つて尠く、その柄も太く火皿につゞき、火皿は柄が少し大きくなつた位の鈍重な感じのするものである。然し此の型は、その後メヤシヤウムのパイプが現れても、專ら模せられた所である事から考へて見れば、中々の興味あるものだ。さうして、材料が珍重されるメヤシヤウムになると、先に鈍重と云はれた型は、莊重とか、豐滿といふやうな言葉で形容される樣になる。かくて此の型は、さしたる變化もなく、シベリアに迄廣く分布して居る。

吸煙者が鼻を削がれるやうな受難の時代は、ピーター大帝の治世に入つて全く過ぎ去つた昔話となつて了つた。といふのは、不世出の才物ピーター大帝自身、英國に職人奉公をして居た頃に、煙草を覺えて歸つて來たからである。さうして歸國後、頑瞑固陋なる宗教への挑戰と國庫收入增加の見地から、政府專賣を目論んだ。此の時、機敏な英國のカーマーテン侯爵 Marquis Carmarthen は煙草の一手輸入權を二萬八千磅で買ひとつて、一ケ年百五十ポンドの煙草を英國から輸出した。これで、ロシアでは鼻をそぐなどといふ法律は、火の中へくべて了つたのである。

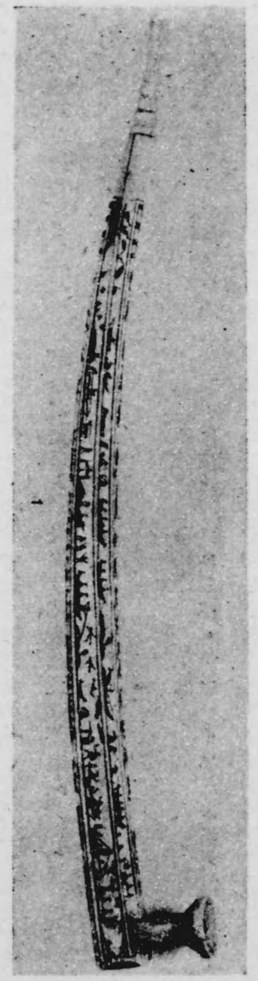
一六九八年には、英國のサー・トーマス・オスボーン Sir Thomas Osbone は、レフォルト Lefort、ゴロヴィン Golovin 等と調印して、更にシベリアへの一手輸入權を獲得した。これによつて、その翌年に三千噸、その翌年は五千噸、ついで六千噸を輸入したが、輸入稅として、露國皇室に年一萬二千磅を支拂ひ、最上煙草一千磅（目方）を納めても尙ほ利益は莫大であつた。といふのは、蒙古を經て、支那から輸入されて居つた煙草が、シベリアに於て英國のそれに對抗することが出來ず、此の可憐な國際經濟戰に完全に敗北して了つたからである。しかし、此のオスボーン卿の一手輸入權も四年の生命で一七〇五年には、これを失つて居る。

こゝに最も我々の興味を惹くのは、此のシベリアに於て、ヨーロッパで南北に別れた煙草が再び合して居ることである。いづれ次の章でも述べるつもりであるが、南方ではポルトガルより、印度を經て渡つた煙草が、南米より直接フイリツピン、臺灣に渡つたであらうと想像される煙草と、南支那に於て合して南半球の世界一週を完成して居ることになるが、これが北方シベリアで、歐洲からロシアに入り、バミールの北方を急いでシベリアを東した煙草と、出會ひ、はしなくも、英支兩國の貿易戰を現出したのである。(二四頁地圖參照)

つまり、ヨーロッパを東方に急いだ煙草は、バミール高原の障壁によつて二分され、南北に別れて進んだが、遂にシベリアで再び會合して居る。けれども南方から支那に入つた煙草は、途中メキシコ系の煙草と野合したまゝシベリアへ渡つたと疑はれる弱味のせいか、シベリアへ流れた津太夫をして云はせれば「唐より來るは油くさく覺ゆ」とある。

然し、支那煙草は此の間に、滿洲蒙古をへて、馬の脊、駱駝の脊から、馴鹿の角にかけられてツンドラ地帶に迄、齎らされて居る。卽ちアムールの森林に狩獵するツングースは、先づ支那蒙古から煙草を傳へ、更にこれを北方のチユクチに傳へたのである。さうしてチユクチは更に、ベーリング海峽の結氷を渡り來つたエスキモーに傳へ、エスキモーはこれをアラスカの森林地帶以北にすむ、ユーコンインデイアンに傳へて、とう〳〵生れ故郷へと歸つたのである。だから結局一番馬鹿を見たのはエスキモー、ユーコンインデイアンの連中であつて、森一つ河一つの隔りは、竟に世界一週三百年の隔りとはなつたのである。

北方氷の生活にも煙草がある。彼等は岩かげに、海豹を待ち伏せ、氷のかげに熊を打つて、斧を覘るのだ。毛皮を厚くまとふた後影は、オロラの光に默々として動く。さうして彼等は、灰をすりまぜた煙草を、鼻に入れ、齒ぐきに塗つて、寂寞氷の如き生活に、わづかに流れる水の懷しさを求めるのだ。疾風の如く飛び行く馴鹿、犬の群、たゞ氷の上を橇が走るのみだ。鮭とあざらしとおつとせいと、さうして灰色の空には、時々年老いた大鷲と――彼等は尙ほここにも、煙草をもち、藝術を樂んで居るのだ。氷の下から掘り出した馴鹿の角に、夜ながの小舍に獸油をとばし乍ら刻む小刀、彼等はこうしてパイプを作るのである。細長く二つに割つて溝を彫り、再びこれを合せてパイプを作るのである。さうしてこゝに自らの生活を彫り刻む。馴鹿とあざらしと魚と人と。かくて彼等は、又春早く訪れ來るであらう密獵船と、毛皮と交換に得べき煙草に、すべてののぞみをうちかけて、長き夜々、パイプを作つて居るのである。



エスキモーパイプ

凍結のシベリア奥地から、風軟き中亞トルコに話をうつす。殊にトルコは、クサンテ、カヴラ、サムソン、ラタキア等々の近代煙草フアイルの夢にも通ふよき葉を出す處である。

トルコに煙草の渡つたのは、印度と同年であり、我が長崎に初めて栽培された一六〇五年といふのも何かの緣因だ

らう。しかしジョンダラムといふ英國商人の語るところによると、一五九九年、彼はコンスタンチノープルへの航海の途中、ダーダネルスの近くにトルコの軍艦に會ふた。その軍艦は突然、ダラム等の船に停船を命じて、煙草とパイプを强要したとあるからには、十六世紀末にはすでに、煙草そのものは知られて居たものゝやうである。然も英國船と見て停船を命じたあたりから考へて見ると、矢張り英國船又は英國人からこれを敎へられたものであらう。ダラムの文に「煙草を與へ候へば彼のふね、また何れへともなく走り去り候」とあるあたり、宛然中世海賊生活の美しさである。

一六一〇年、コンスタンチノープルを訪れたジョージ・サンディス（George Sandys）によると當時、「トルコ人は又信ぜられぬ迄に阿片を飲む。こは小亞細亞より夥しく送らるゝところにして、平時戰時をとはず、これによりて彼等全く恐怖を失ひ、勇氣を出すとか。されど吾人考ふるにたゞ目眩きて騷々しき夢を見るのみ。しかも彼等はこれを宗敎的にも用ふ。然して又同樣の見地より煙草をも喜べり。彼等はこれを盛るに木の大いなる器を作り、それに芦をさし込みて用ふ。吾人は、此のもの英國より渡りていまだ久しからずと信ず。然してもしモラト・バサ命じて、煙草のむ者の鼻にパイプを貫き、街を引き廻すがごとき事なかりせば、主要貿易品となりたるべきを疑ふ能はず。然れども、彼等なほ密かに是に好み溺るゝ故に、我が英國にありては賣りがたき品すら、尙ほ上品として迎へらるゝなり。」といふ有樣であつた。恐らく此の英國よりの輸入は、十六、七世紀の交ロンドンのレヴアント會社によつて初められ、パイプの用ひ方も亦これに伴つたものと考へられる。

けれども、煙草に對するサルタンの迫害は常識の域を脫して居て、命を奪はれたものも少くないといふ有樣であつた。十七世紀の中頃、フランス著名の旅行家ジャン・ド・テヴノー（Jean de Thévenot (1633-1667)）は、コンスタンチノープルに於て、サルタンが變裝して街をうろついて居るのを見たが、これは彼の禁令が實際行はれて居るか否かを知るためであつたといふのだから、神經質の王樣もあつたものである。

「彼が首を多く刎ねたるも唯煙草の故なり。先日も、煙草のみ居たりとてコンスタンチノープルの大通りに二人の男の首を刎ねたり。これより先、煙草を禁じたるは、彼サルタンが街を行ける折、人民のふかし居りし煙草の煙、彼の鼻の中に入りし故とか。されど思ふに、こは生前煙草を斥けん爲めにあらゆる手段をなせる先帝アムラートを學ぶに過ぎざるものなり。アムラートは煙草のめる者の鼻に孔をあけて、これよりパイプを吊し、首には煙草の包みを下げて、これを吸はしめざるなどの事あり。アムラートがかく煙草を禁じたるは、火災を恐れたる故なり。事實彼等煙草のめる儘居眠りて、遂に大事を惹き起せること一再ならずといふ。彼は煙草のむ者を探し出さむ爲めにあらゆる策を講じ、煙草のむものありと云はるゝ處には自ら赴き、莫大の謝罪金、多數の嘆願にも耳をかさずして、直ちにその者の首を刎ねたり。」

アムラート王などは、見樣によつては、殘忍性恐煙症——尤もこんな名稱があるかないか知らないが——とでもいふ精神病者なので、こんな王樣を戴いて居た日にはいくら名前はトルコでも、ハンガリア、トランシルヴニアをオーストリアにとられたり、クリミヤをロシアに胡魔化されたりして了ふのは當然の話しである。

然し、十七世紀中葉あたりからは、壓制も餘程ゆるんで、一八八三年政府專賣と定める迄には、あのバイロンが讃めたゝへて居るフーカがすでに全盛を來して居た。フイリツプ氏が當時の有樣を述ぶる所によると、

「トルコ人の煙草を吸ふことの甚しき、パイプも用ひざるにあらずやと疑はるゝ程なり。彼等は仕事をなすにも、煙草を離すことなければ、異國のキリスト教徒と商談、交渉などいたす折に、屢々其の返答を喫煙によりて長びかし、尠からず有利なるやに思はる。商用の爲めに彼等を訪るゝとも、もし早朝喫煙せざる以前ならば、直ちに闖入者としてその氣嫌を損ずるや必せり。才はしれる我が友、此の地に永くとゞまりて、上流の間に交りしが、彼の語るを聞くに、トルコの上流には、火皿と管とを別にして、琥珀の吸口たゞ一箇に二千磅を拂ふて惜まず、且つ火皿は夏期用として素馨木（ジャスミン）にて作り、冬期用としては櫻を用ひたりと云ふ。大小の差異なく正しき大いさの火皿を得るために、木の若枝をとりて下方に撓め、養分の上昇を防ぎて、均一緻密なる材を得るに力め、其の香氣を失はざらん爲めに、表皮の剝落せざるやう、愼重に取扱ふ。上流富貴なるものはそのパイプの美と數とを誇れり。これに任ぜられたる專門の下僕ありて、來客の折などにその用をなせり。これ等のパイプの常に、新しく清潔を保つべきこと、獨乙パイプの古きを誇るなどとは、全くその事情を異にせり。尙ほ我が友人の語るによれば、トルコにあるアメリカ、ユダヤの細民は、英國のそれに比して二倍の量を容るべきパイプを、わづか一息にて吸ひつくし、鼻口より出す外に、耳よりも吐けり。」

とあるなど、これこそまことに耳よりな話しともいふべきか。

インドに煙草が輸入されたのは、一六〇五年といふことはさきに述べた。あのトーマス・ロー（Sir Thomas Roe）に從つて、印度に旅行をしたエドワード・テリイ（Edward Terry）は、此の國の煙草に關して最古の英文献であると云はれるものを殘して居る。これによると、「彼等は夥しく煙草を作れども、西印度に於けるごとく良品を產する事を知らず」とあるが、彼の旅行（一六一六―一九年）したところは、西部インドのマルワ、グジャラート地方に過ぎぬのであつて、是をもつて直ちに全印度を論じ去ることは出來ない。

インド王アクバル（Akbar）の臣、アサド・ベグ（Asad Beg of Kazwin）が記した次の一文は、煙草の傳來當時の事情を語つて興味あるものであるがこれが一六〇五年の記錄であるといふことは、更にその興味を深からしむるものである。

「ビジヤプール（ボンベイ附近）に於て余は煙草を見出せり。かくの如きもの未だかつて印度にはなかりしもの故に、持ちかへりて、美しき寶石のパイプをとゝのへたり。柄はアーチンに於て極上と稱せらるゝものにして長さ三キュビツト、美しく磨きて兩端には寶石珠瓔を飾れり。更に卵形のヤマの玉髓をもつて作れる美麗の吸口を得て是に嵌め、黃金の火器をそへたり。アジルカアンは余に優秀なる細工を施せる葯醬（ナツメ）入れの袋を與へたる故に、これに煙草を詰めて、一枚の葉燃ゆれば、皆火のつく樣にならべたり。これ等すべてを體裁よく銀盆の上に載せ、又パイプの柄を納むべき銀の鞘をも、紫の天鵞絨に包みて是に添へたり。

「アクバル皇帝は余の献上物を嘉納し給ひ、盆に載せたる數々の珍物を、かく短期間に集めたるは、如何にしてかと尋ねられたり。皇帝はいたく驚き給ひて、パイプに詰むるばかりにとゝのへ置きたる煙草をしらべ、其の何物なるか、何處より得たるかを尋ね給ひぬ。太守カーンイ・アザミ代りて答へて曰く、『こはタバコと申すものにて、メツカ、メヂナにはよく知られ候。此の博士皇帝に献上せむと持參せるものに候。』皇帝はこれをしらべ給ひ、一服呑ませよと余に命じ給ひぬ。皇帝の呑み初め給へる時、一名の醫師近づきて是を止めたり。されど畏くも皇帝は余の好

意を無にせざらむ爲めに、今少し飲まざるべからずとて、尊きおん口に吸口を近づけて、二三度吸ひ給ひぬ。醫師はいたく困却して、これ以上は止めたき心なりき。皇帝はパイプを口より離し給ひ、これをカーンイ・アザミに試みさせ給へり。彼亦二三度吸ひ込みたり。かくて彼は藥劑師を呼びてその特質を尋ねたり。藥劑師は典籍にいまだかゝる物記しあらざれども、こは新しき發明にして、その柄は支那より渡り、ヨーロッパの醫師も數多、このものの德を讃へたる由、申し述べたり。初めの醫師の云ふ樣、『まことに此のものは未だ試みられざる藥にして、醫師とても、これにつきて書きたるもの無レ之次第なれば、我等如何にせばとて此の未知の藥を皇帝に進め參らせんや。』余は彼に答へぬ。『ヨーロッパの人々はこれにつきて知るところなき程に無智にはあらず。學者ありて是を用ふるに、誤ること少し。貴殿は此のものを試みもせず其の質を窮めもせで、醫師、王者、偉人、貴族によりて決せらる可き判斷を、ひとり下し給ふとは如何に。事物の斷ぜらるゝは、そのものゝ性の善惡によるべく、決定は其の時の事實によるべしと信ぜらる。』醫師のいふ樣、『我等敢へてヨーロッパ人に從ひて、未だ一度の試みもなく、我が國の賢人によりて讃へられしこともなきものを用ふるの要なし。』余は更に答へたり。『奇怪なることを承るもの哉。世界何物と雖も、且つては新しきものなりしなり。アダムの日より今日迄、次第に發明せられ來れるものゝみ。新なるもの現れて、世に知らるゝや各人これを用ふるなり。醫師賢人は唯其の性質の善惡によりて、決すべきものにして、よき性質は一朝にして現はるゝものに非ず。彼の支那の草根も、古來はこれなきところ、新しく發見せられて諸病に効あるものなり。』皇帝は、余が醫師と論じ合ふ所を聞きて、驚き喜び給ひ、余を祝福してカーンイ・アザミを顧みて仰せらるゝには、『アサドの申すところまことに賢しと聞かざるか。まことに朕は異國の賢人によりて用ひられたるものを、單に我國の書籍に見えずとて、排すべきにあらず、然らずんば我國如何にして進歩すべきや』と。醫師はなほも云はんとせしに、王はこれを制し給ひて、僧を呼び給へり。其の僧は煙草の德あまた讃へたるも、醫師は遂に何人にも從はざりき、されどなほ彼はすぐれたる醫師にてありき。余は多くの煙草とパイプとを持ちたる故に貴族數人のもとに献上せるが、他にも求め來るあり、事實すべてのものが幾分を乞ふ有樣にて、かくて煙草はやり初めたり。其後商人に賣るもの出でて速かに擴がりしが、王は遂に用ひ給はざりき。」

即ち此のアサド・ベクが煙草を擴めたといふことになるが、彼自身ビジャプールに於てこれを發見したといふのであるから、これより先、つまり一六〇五年以前に、ポルトガル船のボムベイに入つたものが、輸入して居たところであらうと考へられるし、且つこれに先だつて茹醬（heiel）（檳榔の類）の喫煙も行はれて居たらしく、これがために、煙具を集めるのにも比較的容易であり、且つその流行も速かであり得たものであらう。

此の後五年、セイロン島に於て栽培の記錄があるやうに、全國的となり、一六一九年、英國の某輸出會社の出荷案內狀の一片によつて、すでに印度より紅海々岸地方に輸出されて居ることが指摘される。しかし、ジャハンギル王は一六一七年禁煙令を出して、違反者を死刑にして居るが、其の禁令に曰く、

「喫煙は多數人民の身心を損ふもの甚しきが故に、朕はこゝに何人と雖も、この風習をなすことを嚴禁す、朕の弟ベルシヤ王、アバス亦其害を知りて、イラン地方の喫煙を禁ずべき令を發せり。」

然し十七世紀中頃には、その栽培もすこぶる盛であつたと見え、フランスの一寶石商の語るところによれば、ブルハンプル附近では、收穫の半分を棄てねばならぬ程の年もあつたといふし、又、ヴィンセンツォ・マリヤの旅行記に

I. B. Tavernier -1659

F. Vincenzo Maria (Viaggio all Indie

Orientali 1672)は、インドの煙草は優にアジア、ヨーロッパの需要をみたすべしと迄述べて居る。

ペルシアでは、例のオスマントルコとの戰爭中に、知られたものであつて、當時のアバス王(Shah Abbas (1586–1628))は、狂性の煙草嫌ひで、一六一七年にはインド王・兄ヂャハンギルと相應じて、禁煙令を出したが、是を犯す者には、駱駝の糞を詰めたパイプを吸はせたといふから、衞生も糞もあつたものではない。ダンヒル氏に云はせると、駱駝の糞は、欵冬花(よなのたう)、のこぎり草、檳榔子、赤柳、羊蹄の葉などの煙草代用品中、最も不愉快な品質のものだといふことだ。

然し、アバスの孫、セフイ王は更に一六二六年、全國に煙草隱密を出動させて、此の「破廉恥の草」を商ふ商人の咽喉に、鉛の熱湯を注ぎ込ませたのに比しては、まだ凌ぎ易い牛の糞である。これからわづか十年にして、「如何なる境遇、如何なる性質のペルシヤ人と雖も煙草のまざるはなし、然して彼等煙草のむに場所をえらばず、寺院の中にてものみたり。彼等はヨーロッパより輸入せらるゝものを、イングリスタンバクとて珍重すること一方ならず。これ此の國に煙草を持ち來れるもの、多くは英國人なればなり。」(オレアリウス、A. Olearius 一六三六)と云はれる迄になつたのである。

第七章　中華の煙草

西洋の學者の一部には、煙草はすでに支那三千年のむかしより知られて居つたところだと言ふて居るものもあるが、その古代文化に眩惑されてかゝる速斷をすることは危險であると思ふ。或は南方馬來(マレイ)、交趾(カウチ)の大麻、蒟醬(カンマ)喫吸の風が、中華の文明にとり入れられたことがあつたかもしれないけれども、黄河の流域に育まれた文化には、此等南方との交渉はほとんどなかつたと考へられる。よしあつたにせよ、さうして大麻蒟醬の喫吸を行つたにせよ、それが我等の煙草とは直ちに關係づけらるべきものではない事は屢述の通りであつて、支那の煙草は矢張り十六七世紀の交よりその文献を殘して居るのである。

一般に考へられ易いのは、日本に訪れたところの南蠻船が北上の途これを支那沿岸に齎したものであらうといふことである。即ちポルトガル、オランダの船がマレイの南端を廻つて支那海を北上して來る時、これを齎したものと考へられ易い。しかし多くの事實はこれを裏切つて居る樣である。最初支那に煙草の入つたのは、是等南蠻の諸船によるものではなく、フイリツピン・臺灣をへて輸入されたものと、次で南方交趾支那より入り來つたものゝ二種があるのである。後者はさまで奇異の感はなく、先づ當然と考へられるが、前者の臺灣説は一見甚だ不合理の如くである。

しかし當時(十六七世紀の交)の福建省の商人はすでに片舟を操つて南海の諸島に渡り、交易通商によつて利を覓めて居た。その渡るところは主として呂宋、臺灣であるが、此の臺灣と呂宋の島民の用ひるところの煙管は驚くべき類似を示して居て、明にその系統の同一であることを語つて居る。更に彼等の喫煙の樣式、脂をとる箸を持つ所なども全く同樣であつて、煙草が呂宋より臺灣に渡されたものであるといふ考へに、極めて有力なる支持をなすものである。

食物本草綱目(李東壁)に「返魂煙、姚可成曰ク返魂草ハ東夷海島諸山ニ出ヅ、夷人采得乾曝シテ中國ニ來貨ス云々」とある。返魂煙(又ハ草)は煙草の美稱である。中華の民がいふ東夷海島諸山とは臺灣呂宋を指すに他ならない。漳州府志には唯「淡芭菰、東洋ニ出ヅ、近ゴロ是ヲ蒔ク者多ク有リ」とのみであるが、此のタンバコの名は十七世紀初頭福建省に初めて知られたる名稱で、これ亦前説を支持すべき重要なるものである。食物本草會纂(西湖沈季龍著)には、「煙草火、東邊塞外海島諸山ニ出ヅ今中國遍地ニコレアリ」と述べて居る。清翁長祚の花曆百詠には「把姑、淡

把姑ヲ謂フナリ、卽チ今人吸フトコロノ煙ナリ初メ海南ニ出ヅ云々」とある。

然して祝守道の聞見扈言は「煙酒崇禎未年纔ニ見ル、コレヨリサキ百歳ノ老人モ未ダコレヲ見ザル也。其種ハ閩ヨリ來リ後杭嘉ニ遍シ云々。」又、張路玉の本草蓬言には「煙草ノ火ニ至リテハ方書錄セズ。惟朝鮮誌ニコレヲ見ル。閩人ヨリ初ム云々」とあり、倪朱謨の本草彙言にも、「沈氏曰ク烟草ハ江南浙閩諸處ニ生ズ。」などとある。

閩とは卽ち今の福建省をいふのであつて、こゝより煙草が出たといふのは勿論、こゝに初めて知られたといふ意味に他ならない。福建の土人は古來進取の氣性にとみ、福州、厦門からよく冒險、臺灣に航行して交易の利をもとめた。だから呂宋から臺灣に渡つた煙草が、又彼等によつて本土福建に持ち歸られたのは極めて有りうべき事であらう。一六九四年、支那に於て出版されたる臺灣史（本名未詳）にも、煙草は初め臺灣に產し福建省漳州の商人が是を持ち歸つた事がしるされてある（ラウファー氏著亞細亞に於ける煙草及び其の使用）。

B. Laufer, Tobacco and its Use in Asia

肇慶府志には、「煙草ハ交趾ヨリ出ヅ」とあり、南方交趾、印度支那よりの輸入のあつた事を語つて居る。これらは前述のポルトガル、スペイン、イギリスの諸船によつて、印度、日本に輸入せられたものと同一系統として怪しむに足りないが、呂宋臺灣にあつたといふ煙草は、然らば何處より渡つたものであるか。本來そこに生育して居たか、然らざれば何時如何なる徑路をもつて何處から入つて來たものであるかの疑問が生じて來る。

植物學者ルムフ氏の報告によると、十七世紀後半氏がジヤヴに渡つた際、土人の老いたるものが父母のおしへたところとて、ジヤヴにはポルトガル船の渡來以前に煙草があつた由を語つて居たといふことである。さうして當時では彼等はこれを單に藥草として用ひて居つて、喫煙用としてはポルトガル人渡來以後に於て漸く知つたといふのである。

G. F. Rumph

又少し飛び離れては居るが、アウストラリヤ北端には、古くから一種の煙草（Nicotiana Suaveolens）が生育して居た事實などから見ても、或は呂宋臺灣にもまた獨立に生長した煙草があつたのではないかといふ樣なかすかな希望を含む想像が許されないでもないが、か樣な事を根據として論を進める事の危險は極めて大きい。

一五一九年、マヂエランがスペインを出帆してより、アメリカ南海を迂回して二年の航海の後、フイリツピンに着し世界一週の最初の名譽を獲得したが、これより太平洋の航路は拓かれて、彼我の往復も少くはなかつた。我國よりメキシコに渡れるあり、又はマヂエランの航路を追ふて露西亞から歸國した漁夫もあり、これ等の事實からしても、南アメリカとフイリツピン諸島との交通は早くから行はれて居た事がわかる。よしその交通が頻繁でなかつたにせよ否、頻繁でなかつたればこそ、それ丈け又、まれ〳〵に來る船は十年二十年の文化の使者であつたわけだ。日毎に通ふ內海の汽船は一通の手紙をもたらすに過ぎまいが、一年一度の入船は一年間のたよりを齎らすものだ。故にその訪れること甚だまれであつても、アメリカよりの船は、早くもフイリツピンに煙草を齎して居たものではなからうか。此の推論は更に、現在の呂宋、臺灣の土人間に用ひられるシガーの原型が、十六世末のメキシコのそれに倣つて居るといふ事實（ラウファー氏による）、及び我が明和三年ボルネオに漂流した船頭孫七の語るところ（筑前靑木興勝編南海紀聞）によれば、「ソヲロク（註同島サラワク州 Sarawak）の人は烟管を用ひず「アタブ」の葉に煙草を包み、是を捻り火をつけ喫す。其形紙燭の如し、名づけて「ロウコ」と云、二三寸ばかりに吸なして捨つ云々」などあるに見ても、是等南支那海諸島に於ける南米の影響を否定することは出來ない。

つまり是等諸島の煙草（Nicotiana Tobacum）は直接アメリカより逸早く輸入せられて居り、それが臺灣に渡り、更

にジャンク様の小舟で福建省に渡されたと考へられるのである。

これが先にのべた南方交趾支那、印度支那方面から入つて來て廣西、廣東に傳へられた煙草と共に、支那煙草の原始を語るべきものである。然して此の他にヨーロッパから陸路シベリアに入り蒙古を南下して、北方支那に入つたものがあるとしても、これは支那全體から見てその影響は極めて小さく、むしろ北支の獸皮商がシベリヤに齎した南方渡來のもの丶方が重大である(ロシアの章參照)。唯こゝに興味ある事は、アメリカ發見當時東西に別れた煙草が、それより後半世紀にして、支那南部に於て再會したといふその驚くべき傳播の速度であらう。

煙草が最初輸入された當時は、それが藥として用ひられた事は、歐洲に於けると同樣で、空想に富んだ支那人は、その奇異なる作用に更に神秘性を與へる迄になつた。ヨーロッパに於ては、モナルデスの著書に止めをさすが、支那に於ける煙草の藥學的研究は全く詳細多岐に亘つて居て、その文獻もまた決して少くはない。これ等の中我國に渡つて、今尙ほ民間に信じ行はれて居るものも一二には止らないのである。

本草從新(吳氏醫學術第三種)には、「煙辛溫ニシテ風寒濕痺、滯氣停痰、山嵐瘴氣ヲ治ス。其氣口ニ入レバ常度ニ循ヒ頃刻ニシテ一身ヲ四周シ、人ヲシテ通體俱快ナラシム。人以テ酒ニ代ヘ茗ニ代ヘ終身厭ハズ、然レドモ火氣熏灼シテ血ヲ耗シ年ヲ損ズ、人自ラ覺ラズ」とて咽喉カタル、マラリヤのごとき類から、風邪、熱病に効ありと云ふて居るが、治療藥といふよりもむしろ豫防藥と見るべきではあるまいか。同書の增訂異本には更に、「煙ハ陽氣ヲ宣ベ經路ヲ行リ山嵐瘴氣ヲ治ス。明時滇ヲ征ス。深ク瘴地ニ入リテ軍中皆病ニ染ム。獨リ一營煙ヲ服スルヲ以ツテ免ルルコトヲ得タリ。是ニヨツテ遍ク遠邇ニ傳ハリ人皆之ヲ服ス矣。寒濕陰邪、穢ヲ辟シ虫ヲ殺シ、汁ヲ搗キテ頭虱ヲ毒スベシ。其性純陽ニシテ能ク行キ能ク散ズ」とある。煙草を吸ふて居た軍隊のみマラリヤを免れたといふ事はあり得る事で、現にフランスでも一つの煙草工場のみひとりインフルエンザの襲來を防ぎ得た事實もある位である。然し折角の妙藥も、虱とりではさう純陽でもない樣だ。

物理小識には「諸風血惡瘡ヲ治ス」とあり、其他本草彙言、食物本草會纂の如きも、煙草の藥効を論じて詳細を極めて居る。醫意商には、「煙ハ氣味具ニ辛シ、性熱シテ毒アリ、手ヲ太陰ニ足ヲ陽明ノ二經ニ入レテ善ク凝寒ヲ治シ、[illegible]ク瘴氣ヲ解キ、最モ霧濕ヲ消ス、此ノ三効有リ。而シテ從來本草未ダ採ラザル者ハ蓋シ霧濕之毒ハ山海ニ起リ、山瘴ノ氣ハ山ニ盛ニシテ、凝寒ノ氣ハ北ニ極マル。此ノ三邪ハ行キテ中土ニ至レバ毒微ナリ。故ニ此ノ三邪ヲ解クノ藥亦中土ヨリ生ゼズシテ從ツテ載スルナキ也、云々」とて中國に此の草のなかつたのは、中國にこれを用ふべき病氣がなかつたからだといふ支那一流の合理論を展開させて居る。

錦囊秘錄には、色々とその藥効を讃へた後「人以ツテ酒ニ代ヘ茗ニ代ヘ終身厭ハズ、厭ヘバ則チ病來ル。嗜メバ則病癒ル醒レバ能ク醉ハシメ、醉ヘバ能ク醒メシム云々」とあるが、厭へば則ち病來るなどいふのは明からにニコチン中毒で、嗜めばすなはち癒るといふのだから、一見缺くべからざる靈藥とも見えるのである。此の因果を顚倒して疑はせぬところに、煙草の効ありとでも云ふべきか。

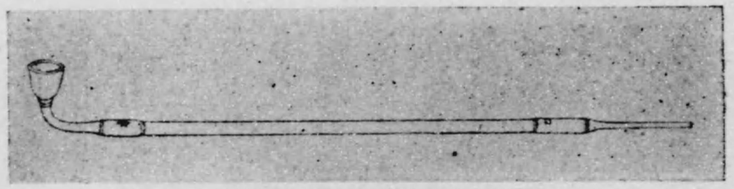
食物本草會纂にきせるに關して少し述べてある所を引くと、「煙ヲ吸フノ管一ナラズ、金銀銅鐵ノ四種アリ、長サ約七八寸ニシテ竹管ノ短キ者ハ一二尺、長キモノハ丈餘ニシテ好事者ハ吸管長遠ナレバ則チ煙ノ來ルコト舒徐ナルヲ以テ美トナス」とあるが、これは可なり進步した形であつて、初めは節組竹を根から切りとり、根に穴を穿つて火皿と

したものである。又は木を縦に割り、中に溝を彫つて再びこれを併せたものもある。現に安徽河南の田舍ではなほ此種竹製の煙管が用ひられて居て、その火皿の緣にわづかの金屬を附して、竹の燒けるのを防いである。西藏、貴州の如き地方に亦是に類した煙管を見ることが出來る。

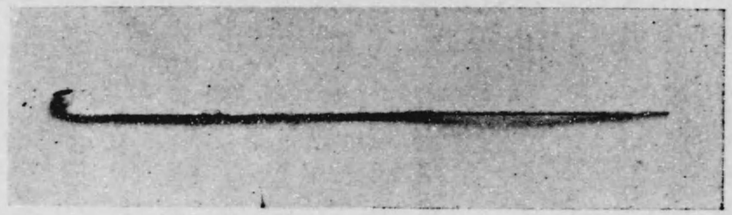
又北部西部には鹿の骨、羊の脛骨などをそのまゝ、先端に孔を穿つて用ひて居るものもある。更に有名なるダンヒル・コレクションの中には、矢張り支那西部より出たと稱せられる人間の小兒の脛骨のパイプがあるが、そのまゝの原型を保つ此のパイプで、何人が喫煙したのかと思ふと、その心理に慄然たらざるを得ない。妻子、知伯を惡むのあまりこれを殺して、その髑髏に漆を塗つて杯となし、酒宴あれば卽ちこれに酒を盛つて快となしたといふ故事などに思ひ併せる時、古來支那民族性の裏面には、殘忍にして執拗なる變態性が蠢いて居るのを否定できない。

然しかくの如きものは全くの異例にしか過ぎぬのであつて、普通のきせるは大體我が慶長元和時代のものと殆んど同型である。さうして朝鮮の現在の煙管もまた此の類である事から考へて、何等かの關係が此の間に見出される樣な氣がする。つまり我國では、煙草は直接南蠻より渡つたが、その初期の金屬煙管は、近くの支那の型が輸入されたものであつて、それは更に慶長元和に於て先づ獨自の型式で發達して來たものと見られる。更に朝鮮の煙管を見ると、現在使用されて居るものが、我が慶長時代のそれと殆んど全く同型なのに氣がつく。こゝに於て朝鮮の煙草は積極的の反證があげられぬ限り、芝峯類說の「近年出ヅ倭國ニ」とあるのを信じさせるに有力な根據を示し得るのである。

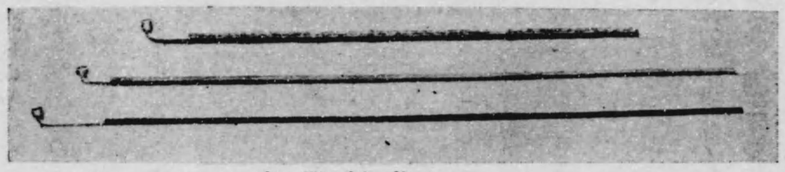
兒戲原覽にも「倭ニ出ヅ」とあり、又フランス人アンリ・エメル（Henri Hemel）（一說にはオランダ人ヘンリ・ハメル（Henry Hamel of Gorcum）なるもの、一六五三年東方に航海して、朝鮮に難破し、こゝに一六六八年迄の十三年間捕虜として暮したが、彼は歸國するやそ



慶長元和頃の煙管（蒐錄より）



朝鮮煙管



支那煙管

の旅行記を公にした（一六六八年）。その中に「約五六十年前朝鮮は初めて煙草を日本より受け入れたり云々」と述べて居る。卽ち溯つて大體我が慶長年間に當り、長崎に於ける煙草栽培の記念すべき慶長十年（或は十二年）（一六〇三又は五年）をも含み得るのであり、然も此年には朝鮮の使節の來朝の事などあり、當時我國に於ける煙草のセンセイションは、彼等朝鮮使節にもこれを持ち歸らせるに充分なものであつたらうと考へられる。然して當時の煙管も同時に持つて行かれて、刺戟のない環境の中に、今日までその型を變化せしめることなく保持して來て居るものではあるまいか。此の事は尙ほ充分の確實さをもつて主張できないが、朝鮮役によつて彼地より我國へ煙草を入れたといふが如き事よりもはるかに根據があるやうに思はれる。

再び支那の煙管にうつるが、その雁首が他國のそれに比して著しく小さいのは注目に價する。これは畢竟阿片を併用したが故であるとされるが、阿片の支那に知られたのは、

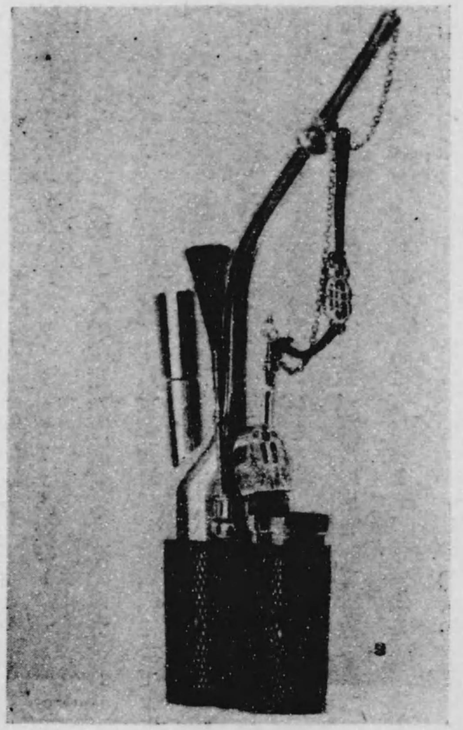
煙草より後れて、十八世紀の初期よりは溯らぬものと考へられる。依つてその雁首の小さなのは、英國の初期におけると同様に、煙草が極めて高價であつたこと及びその味が極めて辛辣であつたが故と考へられる。この型が更に阿片の併用によつて固定されて今日に及んで居るものであらう。

初めて阿片が知られたのは、和蘭人がジヤヴに多量を輸入して、水に割り煙草に含ませて喫してからだと云はれて居る。これは和蘭東印度會社の醫師ケムフエル氏(E. Kümpher)の認めるところであつて、支那文獻にも二三かく見えて居る。中には、かの精悍勇猛の臺灣人が曾つて破れたことのない歴史を有し乍ら、もろくも和蘭人に征伏されたのは、實に後者によつて齎らされた阿片の故であるとさへ云ふ者もある位である。

事實、當時臺灣に渡つた支那人は、阿片吸煙の風に染まるに早く　一方南支那海を渡つてジヤヴ、バタビアから入つた阿片もまた、速かにひろがり、是に耽溺するものは夥しき數に上るに至つた。阿片は銅鍋に煮て、煙草とも混じられたが、此の阿片入りの煙草は、普通のものゝ數倍の價を呼んだ。やがて阿片のみを吸喫するに至つて現在の阿片煙管が發明されたのであるが、これも略十八世紀初期と指定される。

阿片に關しては、本書の目的より稍遠ざかるものがあるので、こゝに委細に亘ることを避けて次の機會に讓るとするが、兎に角阿片の煙管は、煙草の煙管から生れて、更に煙草の煙管に影響を與へたもので、然も阿片の吸飲は煙草によつて導入せられたものであるといふ事を知れば充分である。かの昆陽漫錄にのべてある、例の極めて細かく刻んだ金絲烟の如きも、畢竟、此の小さな火皿の中にでも、燃燒を可能ならしめる爲めに他ならないのである。

阿片吸飲によつて生れたものに、水煙管がある。委しくこれを說く必要もない程よく知られて居る所であるが、その原理はアフリカに於けるダツカ、その他中央亞細亞より小亞細、及び南米の一部にも見られるものと同様、煙を水中に通ずることによつて冷却して、氣味を溫順ならせやうといふのである。然しアフリカのダツカも、印度のナルギレも、波斯のカリアンも、又ムガールのフーカも、その目的は同様であつてもなほ支那の水煙管に及ぶものではない。



その精巧なる點、その合理的なる點、その美術的なる點に於て、支那の水煙管こそは世界獨歩の地位にある。

これは簡單に云へば、一つの水槽に二つの管が直立して居り、雁首たるべき方の管の下端は殆んど水槽の底に達し、他の一本は反對に外部に伸びて、羅宇と吸口とを兼ねて居るのである。これをもつて煙草を吸へば、煙は水中を通るうちに、ニコチンの幾分を吸收され、且つ冷却されるといふ仕掛で、火皿はとりはづされる様に出來て居り、又は二重となつて、同時に阿片も吸飲される様に出來て居るものもある。更にその水槽にならべて煙草入れの附いたもの、掃除用具を入れたものなどもある。現在の水煙管はすでに美術品の地位にあるもので、金銀象嵌、すかし彫りなど驚歎すべき細工が施されて居る。(上圖參照)

水煙管はすでに一六二六年、獨逸人ネアンデル(J. Neander)がペルシヤに見て居るし、同年、トーマス・ハーバート(Thomas Herbert)はアフリカ東岸ロコモ諸島（マダカスカルの北方）の一地方に見て居り、其後十二年ピーター・ムンディ(Peter Mundy)はマダガスカルに於て、「彼等は吸口を首に下げ、此の地に產する煙草を印度に於ける如く水を通して呑めり、此のフーカはその先を角にて作り、こゝより短き管を出し、これにさきの吸口をはめて用ふるなり」と觀察して居る。然し乍ら水煙管に關する最初の報告は一六一六年、エドワード・テリイ(Edward Terry)がかのトーマス・ローに從つて東印度の生活を二ケ年半續けた旅行記中に、バブルバブル(bubble-bubble)（恐らくその使用の際の音より來た名であらう）について述べて居るのがそれであるとされる。支那に於て最も早く現れたのは、十八世紀初め、甘肅蘭州に於てゞあるとされるが、これは臺灣、シヤム、バタビア等より渡つて來たものもあるので、直ちに肯定はし難い。然し現在では蘭州の水煙管は、その品質中國第一と稱せられ、土產の煙草も亦これに最適とされて居る。

嗅煙草も矢張り十八世紀の初め、ジエスイツト布教師によつて傳へられたもので、鼻煙と呼ばれて居る。初めは矢張りフランスあたりに於けると同樣、高貴の用として珍重されて、冠婚の禮ある時などにはこれを送るの風さへあつた。一六八五年早くも廣東へ輸入せられたと云はれて居るが、大體寒氣の激しい北方、北平を中心として用ひられ、その容器の製作の如きも、北平は水煙管に於ける蘭州の地位を確保して居る。更に山東省地方の煙草はその獨特の香氣をもつて最も鼻煙に適すると言はれて居る。

一方には極度に功利的の生活があると思ふと、又一方には驚嘆に價する藝術をもつのが支那である。こゝに二三の詩文を引いて、彼等の煙草に對する心境を見やう。

李斗揚州畫舫錄には、船を湖上に浮べ煙技をなして賣るものゝ事が述べてある。

匡子駕小艇游湖上、以賣水煙爲生、有奇技、每自吸十數口不吐、移時冉々如線、漸引漸出、色純白盤旋空際復茸茸如髢、色轉綠微如遠山風來、勢變隱隱如神仙雞犬之狀、鬚眉衣服皮革羽毛、無不畢現。久之色黑深、如山雨欲來狀。忽然風生烟散。時人謂之匡烟、遂自榜其船曰烟艇

新安の張山來語るところの煙曲よりも更に人に訴へる所があるのは美文の故であるかもしれない。清の曹延對が金絲烟を贈られて謝したる文には、

口生丹篆學獅炭之吐香。手挹青雲、勝龍團之解渴。色逾柳絲細埒花鬚錦囊時呈犀筒頻吸。

又婦人の喫煙を歌つたものに、

寶奩數得買花錢　象管彫鏤估十千
近日高唐增妾夢　爲雲爲雨復爲烟

又

烏絲裊裊細于綿　點點微櫻紅欲燃
差擬海棠初雨後　凝脂和粉泣朝烟

吸烟美人　何承燕

吐納櫻唇。氛氳蘭氣。玉纖握處堪憐。脂香粉澤。分外覺清妍。豈是陽臺行雨。剛來自十二峰邊。闌干外。風鬟霧

髻。猶自繞ニ雲煙一流連怎。禁相思暗結。閑悶難レ捐。筭消ニ遣春愁一。此最爲レ先。怪底鴛央綉倦。停レ針便坐爾情牽。
恰喜有ニ知心小婢一笑遞嬋娟。

女の膝にうたゝねの、顏に煙草をふくけむり、むりな思ひと知ればとて、あきらめられぬ我が戀よ、こよひこそはと夜さ〳〵を會へどもほんに氣おくれの、やるせないぞえ庭たづみ、影をうつして何とせうとでもいふあたりなのであらう。

支那朝鮮に於ける煙草の傳說一つ二つを揭げて此の章を終らう。いづれ歐洲系統のものとは考へられるが、先づ食物本草綱目に、「相傳フ、海外ニ鬼國アリ。彼ノ俗病ヒ將ニ死セントスルヤ卽チ舁キテ深山ニ置ク。昔國王ノ女アリ病革リ棄テ、コレヲ去ル。昏憒ノ中ニ芳馥ノ氣ヲ聞キ、臥セル傍ヲ見ルニ草アリ。乃チ就キテコレヲ嗅グ。便チ遍體清涼ヲ覺エ、霍然トシテ起チ奔リテ宮中ニ入ル。人以ツテ異トナス、叩キテ其ノ草ヲ得タリ云々」とて煙草に起死回生の効ありとなして居る。

又朝鮮の芝峰類說には「或ハ傳フ、南蠻國ニ女人淡婆姑トイフモノアリ。痰疾ヲ患ヒ積年此ノ草ヲ服シ瘳スルヲ得タリ故ニ名ヅク。」とタンバコの語源を說明して居る。劉延璣が在國雜誌には、更に美しい傳說が載せてある。「高麗國其ノ妃死ス。王之ヲ哭シテ慟ス。夢ニ妃國王ニ告ゲ塚ニ一草ヲ生ズ名ヅケテ煙草ト曰フ。之ヲ采リテ焙乾シ火ヲモツテ之ヲ燃シテ其ノ煙ヲ吸ヘバ則チ悲ヲ止ム可シ、亦憂ノ類モ忘ルヽナリ、王言ノ如クシテ采得遂ニ其ノ種ヲ得タリ」といふのである。

これと同じやうなことが、ニューヨークの娘さんにもあつたといふから可憐である。（但しこれは勿論前世紀の話し）。あるしとやかな娘さんが遺言した。「わたしが死んだら墓のわきへ煙草を植ゑて頂戴。わたしの魂から育つた煙草がやがてわたしの戀人に吸はれるやうに。」と。これをあの獨逸の電氣學者としてと同時に煙草好きで有名なシュタインメッツが、あはれに思つてその墓銘をかいてくれた。

「彼女の愛人はいとしのアンナが又花咲くとて憂ひを忘れることであらう！」

第八章　煙草四種

一　嚙煙草

徳川の初年、長崎に渡つて來た安南人等が煙草を喰ふのを見て、人人驚いたといふことであるが、寶曆現來集にも、文政七年常陸國に漂着したエゲレス船の水夫達が、「何れも煙草を好き喰ふ又は含む」と見えるし、紀州の虎吉はアメリカに漂流して、「彼地珍製の嚙煙草」を貰つて面喰つて居る。

煙草の用ひ方の中、此の嚙み煙草は最も原始的な方法である。アウストラリヤ人も白人との交渉ある迄は、煙草を嚙んで居つた由で、これは我々の祖先が、原始時代食物を求るに當つて、先づふれてみ、嗅いで見、ついで嘗めて見、それから嚙むといふ順序をふんで居た事を、

最も容易に說明してくれる一例である。人身牛首といふ支那の神樣炎帝神農氏も「百草ヲ嘗メテ始メテ醫藥アリ」といふ調子で、數萬年の昔から動かすべからざる人間食慾の最も赤裸な一相を示して居る。

故に此の嚙煙草の如きも、當然未開人種又は、肉體勞働者間に用ひられる所であつて、イスパニアのアメリゴ・ヴェスプッチ（Amerigo Vespucci 1451–1512）、フアンフエルナンデス（Juan Fernandez 1536–1602）等は何れも西印度地方メキシコ等に於ける嚙み煙草について書いて居るが、最も明確詳細を極めたのは、ニコラス・モナルデス（N. Monardes）の著述（一五七一）である。

「インデイアンにありては、煙草は渴を醫し又他の飲食に賴ることなく數日を堪へ得る樣、飢えを防ぐに用ふるなり。彼等、食物も水もなき砂漠又は無人の地を旅する折には、小さき煙草の丸藥を用ふ。即ち彼等は煙草の葉をとりてこれを嚙みつゝ、貝殼を燒きて作れる粉末と混じて、隱元豆より稍大なる丸藥に丸め、是を蔭干しにして用ふ。彼等飲食のなき土地を行かんとする時は、此のものを一箇とりて唇と齦との間に含みつゝ旅を續け、三日四日の程は飲食も欲せず、疲勞も訴ふることなし。」

モナルデスの此の著述は、當時歐洲各國語に飜譯された名著であるが、煙草の効に對するセンセイションは、これにも見る通り可なりの誇張で全歐に擴がつたものである。

葉を嚙むのは、元來藥用としてゞあつて、喫煙の如く單なる快樂のためではない。ジエラール（Gerard）の草本蒐彙（Herball. 1597）にも「同樣に葉を嚙む時は口中痰と水分とを生ず」とあり、ガーデイナー（H. Gardiner）の「煙草研究」（Trial of Tobacco）も亦これを主張して居る。あのジョン・バーキンスンも亦、煙草の草から汁液を搾つてこれを飲んだといふて居るが、これとてもその藥用としての見方からすれば、嚙煙草と同樣の効を求めたものであらう。

此の嚙煙草の原初を求めれば、ペルーのインカ族がコカの葉を嚙み、印度支那、羅遲、馬來の土人が蒟醬を嚙むの風と異る所はない。煙草はその初め煙として吸はれた所に、非常な好奇心を起させたものではあるが、是を嚙む原始の風もそのまゝ歐洲に紹介せられたもので、文明は又野蠻の模倣であることが、こゝにも首肯される。

一六六五年、英國においてペスト猖獗の際には、嚙み煙草が豫防として用ひられたことは、例のサミユエルペピスの日記にも記されて居る。即ちその六月七日のところを見ると、「此の日ドラリー小路に於て、いたましきものを見たり。二三戸の家戸を閉して、赤き十字のしるしを附せられ、戸口には「神よ我等に慈悲を垂れ給へ」と讀まれたり。我これまで諸々のものを見しかども、斯程に胸つぶるゝ思ひをせる事はなかりき。惡臭を覺え心持あしくなりたれば若干のロールタバコを求めて香を嗅ぎ、これを嚙みて氣をしづめぬ」とある。

又同年、ケンプ（W. Kemp）といふ人が、ペスト豫防に關する小冊子を公にしたが、その中に煙草について、「是を燻らす時は大氣を淸淨にし、是を溶かせば腐敗を防ぐ。即ち此の葉を嚙みても又は燻らしても、その精分は全身に廻りて、胃にもどり、更にこれより口に上つて全身の惡氣を吐くべし」とあるが、競馬で有名なダアビイあたりでも此の年には市民皆、口一つぱいに煙草を含んで豫防した由である。

嚙煙草の英國に於ける流行は、ジエームス王の頃からであると云はれ、當時の上流紳士は銀製の痰唾入れをもつてあるいたとは、きれいな樣できたない話しである。スペインの無敵艦隊を破つた殊勳者ジョージ・モンク（George Monck）將軍は又嚙煙草の功勞者であつたと云はれて居る。彼は王政復古にあづかつて力あり、宮廷ではアーベマール公の尊稱を奉られて居たが、始終、嚙煙草で唇まで眞黑にして居たといふことである。

十七世紀末から十八世紀にかけて、海外發展の盛なるに伴ふて、水夫達が此の流行をますます盛ならしめたもので、

波止場に立つたマドロスは
ヅボンに兩手を突込んで
印度の方を眺めやり
嚙んだ煙草を海に吐く

といふた樣な小唄が、港の裏通りの酒場から聞えた。當時の「可愛らしい若者達」も何とかして大人らしく見られたいものだと苦いのもがまんして煙草を嚙んであるいたものだが、(これは丁度日本の高等學校の生徒が、徽章を硫黃でいぶし、白線をお茶で染め、さてバットを吸ふて見せるやうで、)大變氣の毒であると當時のウォールド紙(The World)が批評した程である。

フランスは流石に上品な丈け、嚙煙草はさして用ひられなかつたらしく、嗅煙草全盛の感があつた。ベイヤール(E. Baillard)の煙草論(Discourse de Tobac)(一六九三)には嚙煙草(Tobac machicatoire)が饑渴を防ぐに功ある由を述べては居るが、實際フランスに用ひられたとはかいてない。

何といふても嚙煙草の最も似合ふのは、マドロス達である。彼等には嗅煙草は勿論、シガレットも用ひさせたくない。あの潮と脂とで眞黑に澤の出たパイプも惡くないが、矢張り彼等には嚙煙草だ。ポケットから取り出した嚙煙草のかどを、太い頸で千切りとつて嚙んで居るあたりには、何ともいへぬ魅力がある。

嚙煙草の原料は主として、濃厚なアメリカ煙草の葉であつて、これを充分醱酵させて、ニコチンを和げる爲めに灰を混ぜる外に、ソーダ、生石灰なども入れられるのである。更に糖蜜や、梅酢などを混じて好みの味に作り、これを強壓の下に固めるのであるが、酒呑みに酒造りの話が堪らないやうに、嚙煙草好きはこんな話しにも全く他から想像もつかぬやうな熱情をよせるものである。海遠く東インドに故郷を離れてたゞ一人、英國の若者が嚙煙草によせた純情の手紙を紹介する。

〔東印度總督ワーレン・ヘイスチングス〕

千八百十三年三月二十四日グレイヴゼンドの高地にて

愛する弟のトムよ

此の手紙を受けとるお前は相變らず達者のことゝ思ふ。俺も至極元氣で昨日午後四時からこゝに滯在して居る。長からぬ航海中、一二度の暴風に會つたが、大變愉快な旅であつた。愛するトムよ、俺達のお父さんは矢張り達者で元氣であつて呉れと祈つてるよ。俺はもう嚙煙草が何にもなくなつたことをお前に知らせなくちやならない。さうして俺はグレーヴゼンドをさがし廻つたが、唯貧弱なぐにや〳〵のものしかないのだ。船のボーイが此の手紙をお前の許にとゞける筈だ。愛するトムよ、もしお前が煙草を買ふてくれるならば、彼はそれを受けとる筈だ。ロンドンに一番よい品は、あの「黑ン坊」のところで七本の紐で卷いて賣つて居る。あそこへ行つて最上の嚙煙草を買ふてくれ、一ポンドあれば充分である。それから俺は襯衣にも不自由して居る。愛するトムよ、俺は今二枚の襯衣しか持ち合せてない。さうしてそれも全く破れて居てこれ以上着られさうもないのだ。けれども何より嚙煙草を忘れないでくれ。俺は木曜日以來何にもなくなつて居るのだ。愛するトムよ、襯衣はお前の肩巾で丈が少し長ければ

結構だ。俺は此の襯衣を長いこと着て居る。さうして今に新しいのを着られるだらう。品が上等でしかも大變安いのをタワーヒルで賣つて居る。

然し先づ「黑ン坊」のところへ行つてくれ。愛するトムよ、さうして最上の七つ續きの嚙煙草を求めてくれ。船のボーイはそれを俺のところへ持つて來てくれることに話してある。けれどもあいつも嚙煙草には飢えて居るのだから、包みはしつかりと縛つてくれ、愛するトムよ、此の月曜も何處かへ過ぎ去つて了つた。襯衣は洗濯して貰へるからさう必要でもないよ。けれども嚙煙草の方は忘れないでくれ。俺はそればつかし待つて居る。

お前を愛する兄より

二伸、嚙煙草を忘れるなョ。

二　喫煙草

Henry Butte, Diets Dry Dinner (1599)

ヘンリ・ブテスのダイツ・ドライ・デイナーには、喫煙草が、アメリカ渡來の良種の葉を赤味を帶びた褐色となる迄に蔭干しにして精製するといふやうなことが、節面白く述べられてあるが、これは一五六〇年頃フランスのカタリナ・ド・メヂチ母后が用ひられたのが歐洲に於ける最初で、それから英國に渡つた物であると考へられるが、一七〇八年刊、ブリチイシュ・アポロ（卷一）British Apollo によると、「最近迄は英國民に全然知られざりしところにして、他の流行と同樣フランスを經て渡れるもの」であつた。しかるにブテスが喫煙草のことをかいて居るのは、これより百年以上も先になるわけで、流行を物語る場合に、此の年月の間隔を「最近」とは云はぬと思はれるし、オクスフォードによつて見ても、「一六八〇年頃より流行初む」、されどアイルランド、スコツトラインドにてはこれよりも昔の事なり」とあつて、その流行は矢張りブテスより百年近くも遲くなつて居る。Oxford English Dictionary

然し例のデツカアの「鷗の嘴」（一六〇二）The Gull's Hom-Book には、「食事の際にも當時の粹人連は金銀象牙の煙草入れを、各自の經濟の許す限りに張り込んで持つてあるき、冷くツンと來る樣な一喫ぎを樂んだものである」と述べてあるところから見ても、喫ぎ煙草の流行は、矢張り十六世紀末からのものであるらしく。ブリチイシュ・アポロ、オクスフツードなどの「流行」の意味は此の際非常に嚴密に用ひられて居ると見るべきであらう。

ジエームス・ハウエルの文集（一六五〇）James Howell Letters には「イスパニヤ人、アイルランド人は煙草を粉末として用ふ、こは腦を明快にする功大なり。アイルランドにて此の喫煙草を用ふること、イングランドにてパイプを用ふるにひとしと思はる。洗濯をなす下女、女中、又は鍬鋤をもつ農夫等仕事に疲れたる時には、煙草匣をとり出してピンを以つて鼻に入る、かくすれば新しき力湧きて再び仕事につく可しといふ」と述べてあるが、俄然一六六五年、かゝる傍觀的の態度では濟まされなくなつて來た。

此の夏、炎熱燬くがごとく常の年と異り、草木も生色なく、國王チヤールス二世さへも裸になるといふ有樣であつたが、畢竟これは惡魔の呪ひの然らしむるところで、軈て全イングランドには恐る可き黑死病が襲ふて來た。特に不潔狹小なる街衢より成つて居たロンドンは、ペストの猖獗最も甚しくわづかの間に十萬の死亡者を出す有樣であつた。

それで迚も棺桶も間に合はぬので、郊外に大きな穴を掘つて、人骸燒却所とせねばならなかつた程である。やがて秋風立つと共にさしものペストも終熄したが、今度は空中のバイキンを燒き殺さうといふので市中の各所に大篝火を焚いたが、これが又ロンドン市空前の大火となるといふ始末で、それからは火の用心專一といふのでパイプもうつかり吸へず、さりとて煙草はやめられずといふので、さてこそ喫煙草の流行となつたといふのは牽强附會の邪說である。喫煙草流行の眞相は、ペピスの日記にもある通り、病は鼻より入るといふので、衞生的の見地から、これが豫防のために使用したもので、火の用心といふ立場は第二次的のものであつた。これは然し流行といふべくあまりに悲慘である。

これは實に事生命に關する重大問題であるから、煙草を用ひることを徹底的に奬勵し、小學校兒童の鞄の中にも、パイプが鉛筆と一緒に入れられてあつた程だ。さうして朝禮の際に校長先生の合圖で一服づつ吸はされたのである。嫌ひなのを父親につかまへられて無理に吸はさせられる時程苦しかつたことはないと當時のことを述懷して居るものさへある(トーマス・ハーン Thomas Hearne による。一七二一)。學校あたりでは吸ひ方の上手な子供に褒美をやるといふ樣な敎育法をとり豫防に肝膽をくだいた。やがて疫病のあとに大火が起り、それより此の喫煙は、喫煙草へと轉化して行つたのは當然である。しかも、これがフランスの宮廷から流行り出したものときいては、デツカーではないが、無理なやりくりをして迄も、その容器などに苦勞する連中が上流に現れるやうになる。そしてそれが紳士の條件とまでされるやうになつた次第である。

技巧的でさうしてバセティツクな詩人ポオプ Alexander Pope (1687-1744) の髮盜人 Rape of the Lock (1712-14) にも喫煙草が非常な活躍をして居る。初めの中は、「話の合間には喫煙草さては扇」などと上品なところを見せて居るが、やがて好色の男爵が、懸想して居るベリンダの美髮をせめて身につけて居たいといふ一念から、こつそり後ろへ廻つて一房剪りとる。これを知つたベリンダは奮然、柳眉を逆立てゝ、彼の鼻が命の息を吸ひ込まうとするところへ、喫煙草の一彈を投げつけると、地の神ノームが飛び出し來て、此のピリピリする辛い粉を鼻の奥へと押し込む。男爵の涙はボロ〳〵と流れるし、その嚏は高い丸天井にビインと響き反るといふ始末。こうなるとよしどつしりした花瓶の中には、勇士達の才智が藏せられて居ても、喫煙草匣(スナフボックス)の中には、色男達の機智はなく、たゞ大きな嚏が三つ四つ二つなどしまつてある位なものである。

此のポープの髮盜人は、實際の事件からものしたのであつて、當時の上流生活が輕妙な筆に美しく描かれて居り、喫煙草が如何に用ひられて居たかもわかつて中々に面白い。ゴールドスミスの Oliver Goldsmith (1728-74) の「復讐」Retaliation にも喫煙草が皮肉をやつて居る。

彼等がラフアエル、コレヂオを語る時も、
彼ひとり喇叭を置いて喫煙草をとる。

かやうにして喫煙草は當時の社交界にもて囃されたもの故に、その容器の金銀象牙七寶のぜいを盡したものは伊達者連中の所持品であり、親友間の贈物であり、更に鼻ぐすりといふ意味ではないが高位高官への進物でもあつた。さうして喫煙草の種類も——自家特製などいふのすらあつて殆んど數へ切れぬ程であつたが、おしまひには朝喫ぎ、晝喫ぎ、宵喫ぎ、夜喫ぎなどいふものさへ出る樣になつた。

これといふのも、喫煙草が流行り出した當時、機敏の商人が居らず、これを販賣する店がなかつたのと、貴族連の理由のない虛榮とが相俟つて、自家製が巾をきかしたからである。お勝手元不如意ではあるがそれでも見榮はおとし

たくないといふ堂上華族では、煙草の根を乾燥して固くしたもので、葉をこすりつけて粉として作るのがせい〳〵であつたが、工面のよい貴族は、此のこすり木を見事な彫刻のついた象牙で作つて、内かくしへ入れてあるいて得意がつたものである。さうして家で、こつそり煙草の根つこで摩つて來た樣な連中の前で、こし〳〵やつて見せびらかすのであつた。

アイルランド、スコツトランドの方が嗅煙草の本家であるとは、一般の定說であつて、オクスフォードにも出て居るが、彼等はロンドンへ出ても此の事が、大變得意であつたと見えて、一オンスの嗅煙草を買ふのにも、わしが國さのものでなければといふので、わざ〳〵遠方のハイランド人の看板のかゝつた煙草屋へ出かけて行つたものだとは、ウォルター、スコツトがお國自慢の一つ話しであつた。事實彼自身も中々の煙草好きで、悴が入營の際には、インヴインシブル、アルマダを邀へた英國水兵が、敵艦見ゆの警報に、「先づ煙草を吸つて了はうぜ」といふたあのブリトン魂を忘れるなと、愛用のパイプを餞けしたといふ程の男であつた。

しかし一七四五年のジヤコビン黨の騷ぎが鎭まつて、議會があのおかしなものを前にブラ下げて居るハイランドの服裝を禁ずると決議した時には、流石の北方ブリトン魂も閉口したと見えて、當時の新聞に、「日頃あれ程勇敢に嗅煙草屋の店頭を守つてキビ〳〵とポカンとして居るハイランド人」が決して皇帝に對して叛逆的思想を持たず、常に國法に忠實ならんとして居るものであるし、さうして又、新しい服を買ふ金がないから（スコツトランド生れであることを考へ給へ）何卒特別の御慈悲で、此の服裝を許して戴きたいと歎願したとかき立てられた程だから、煙草屋あたりであんまり威張るのも考へものだ。

しかしいぢめられたのは、ひとりハイランド人のみではないのであつて、十八世紀の末、フランスに於ては、嗅煙草自身が悲しい運命に見廻はれたのである。一七八九年の花薫る五月、平民第三部會は獨立して、國民議會（アッサンブレーナショナル）として憲法の制定に着手した。七月にはバスチーユの攻擊となつた。市民は――平民は起つたのだ。ルイ十六世は怒つた。それは一揆ではないかと。否、これは、革命であつたのだ。こゝに王室と貴族と僧侶とは沒落しや、アサンブレー・ナショナールは、遂に一切の封建的特權の廢棄を宣言した。こゝに八月、革命の烽火全國の農民を起たしめるに至るた。さうして嗅煙草も亦その運命を追はねばならなかつた。

まことにそれは革命であつた。きのふ迄、王城の奥ふかく、美婦を抱いて羽毛の寢床に享樂を恣にした貴族等は、今日は逃れ行くエミグレーである。然も逃れ得るものは羨まれてあれ。ギロチンは忙しかつたからだ。雄々しき騎士も楚々たる佳人も、こゝに上らずんば、バスチーユの暗黑が待つて居た。嗅煙草も今は最後の奉仕である。ルイ十六世はいたましき囚人護送車に乘る際に、持ちなれた寶石入りのスナツクボツクスから、最後の一つまみをとつたといふ。

古き社會は崩壞した。混沌の中からは、自由と平等と相愛の叫びが新社會の秩序を保證してあがつた。境界を置くべき生活は完全に倒されたかの如くに思はれた。嗅煙草の匣は、セーヌの水底深く、然らずんばラインの彼方遠くに追ひやられた。今日はエミグレーとなつて異國に彷徨ふ貴族達が、わづかにきのふをしのぶよすがとするものは、ポケツトに殘る嗅煙草だけである。ドイツに、オランダに、さうしてドーヴアーを渡つて英國に、彼等は淋しい乍らも安住の地を見出した。さうしてなほを昔忘れぬ身だしなみに、わづかに王朝華やかなりし頃をしのぶ有樣であつた。

かうして彼等は最も美しい誘惑を、逃れ來つた國の人々に感ぜしめずにはおかなかつたのである。ロンドンに於け

る煙草の一老舗の如きは、機敏にも某フランス貴族の名をかりて屋號となし、よき喫煙草を發賣して、ロンドン上流生活の時好に投ずるにあやまたなかつたといふ。王侯貴族、名流上流は爭ふて此の店を訪れた。畫家のホキツスラーも、思想家のラスキン――煙草は朝の空氣の清淨を汚すとて非常にこれを惡んだあのラスキンさへも、ビールは酒に非ずとて飲んで居る禁酒家のやうに、喫煙草は煙草にあらずとてか――兎に角、此の店を訪れたものゝ由であるし、

又クウパアは此の喫煙草の流行を William Cowper (1731-1800)

パイプが喫煙草匣（スナフボックス）に云ふことにや、
紳士淑女が君の顏のどこに惚れるのかわからない、
君が國中の流行ツ兒で
僕がこんなに零落れてるのがわからない。

などゝ歌つて居る（一七八二）。

しかし、やがて十九世紀の實生活のテムポは前世紀の思ひ出多きあこがれの優美さと、歩調を共にして行きがたいことを見出した。生活のテムポは時代と共に躍進するに反してその追憶のみは止る。故に過去のものは當然置き去られやうとするのである。喫煙草亦此の運命を辿るものであつて、次第に新しき世紀の子、卷煙草は、よし棺桶の釘と罵られやうと何であらうと、確實なる歩調で生活のテムポに乘つて來たし、ハムマーシュタインは葉卷速製機の特許をとつた。時代はすでに喫煙草の姿を遙か後方に望むのみとなつた。

三　葉　卷

葉卷と云へば如何にも貴族的に聞えるが、實は元來野蠻原始の喫煙法であつたので、アメリカンインディアンの一部はコロンブス渡來より遙か以前に是を用ひて居つた。西印度諸島、アマゾンの流域も皆葉卷の形式で喫煙して居た。

チアパの僧正ラス・カサスがこのことを委しく述べ傳へた事は前述の通りである。

シガーを最初にヨーロッパに輸入したものは、直接南米と交渉のあつたスペイン人であるが、これが廣くもて囃される樣になる迄は、實に二世紀の歳月を要して居る。これはスペインよりヨーロッパ本土への關門、且つ流行の本場たるフランスに於ては喫煙草が全盛であつたがために、容易に此のグロテスクなシガーを口にしやうとしなかつたのも原因であるが、大體は煙草そのものと同程度に――場合によつてはそれ以上に誘惑するところのパイプに多大の興味がむけられて居たからでもある。

それで葉卷が全歐に擴がつたのは、今から僅か百年前でしかない。十八世紀では、シガーといふ語は說明を必要とした。「彼等は我等にシーガーと申すものを與へ候。こは煙草の葉を丸めたゝみて、そのまゝパイプとも煙草とも相成るやう作れるものに候。彼等はパイプなるものは不好、ヌエバ・イスパニヤ至るところ同樣に候」（コックバーン J. Cockburn、一七三五）といつた調子で、一七八八年、シュロットマン H. Schlottman が、ハムブルグで葉卷製造會社を建てた當時なども、全くかへり見るものがなく、「イスパニアのチガルロと申す煙草」などと言ふて居

つたのである。

シガー(Cigar)といふ語は、スペイン語のシガレル(cigarrel or cigarral)から來たといふ。これは果樹園といふ樣な意味で、當時ドン某といはれるほどの、スペインの貴族達が、自分の農園に栽培した煙草でシガーを作つて、"Es de mi cigarrel"(私の畑で出來たものです)と來客にすゝめたが、スペイン語に通ぜぬ外國人が、これをシガレルといふのだと早合點して了つたものであるといふのである。我が國のカメ犬式の面白い由來であるが、眞面目な說によると、矢張りスペイン語には變りないが、その形がシガロ(cigarro)卽ち蟬に似て居たからだといふ。

此のチガルロと申す煙草を獨逸で作り初めたシュロットマンなどは、初め中々賣れないのには、全く苦心慘憺したといふ面白い內輪話しもあるが、それはあとに述べることにする。シガーがヨーロッパに流行し出したのは、彼の一八一七年、ボリヴアール(Simon Bolivar (1783-1830))によつて起されたヴェネズエラ獨立戰爭以後の事であつて、これに出征した英佛の軍隊が、彼地から覺えて歸國してからだといはれて居る。クロッカー(J. W. Crocker)(一八三一)によると、「喫煙の風が復活したのも、フランス戰爭中の軍隊生活からであると考へられる。然も今は眞面目な古來のパイプよりも新來のシガーがよろこばれたさうであるが、ほんとうにシガーが全歐の心を捉へたのは何といふても、メリメの傑作カルメンが世に出てからである。あの情熱の女カルメンが薔薇赤き南歐の煙草工場に作つたであらうシガーの何本かは、如何に當時のシガー黨の胸をときめかせた事か、更にビゼーがその代表作に於てカルメンの情熱を歌つてからは、シガーは正にその全盛期に入つた。クデル氏(Robert Cudell Buch vor Tobak(煙草の本))も、「まことのシガー文化は十九世紀後半より二十世紀の初めに於て正にその最高點に到達したのである」といふて居る。

ビスマルク(O. E. L. von Bismarck-Schönhausen (1815-1898))の葉卷好きは有名であるが、彼がケオニヒスグレーツの戰ひで、唯一本の葉卷しか殘さず、戰ひ終つてから吸ふのを何より樂しみとして居たが、路傍に兩腕を碎かれて氣息掩々たる一人の兵士が何か求めて居るのを見た時に、決然唯一本のシガーに火をつけて與へた。あとで彼自らこの事を述懷して「その時の兵士の笑顏を見せたかつた。わしはあのわしの吸はなかつたシガーほどうまく味つたものはかつてない」といふたさうである。

又彼は一八七一年、普佛戰爭後、ジュール・ファブル(G. C. Jules Favre (1809-1880))との媾和談判に於て、シガーの德を初めて知つたといふて居る。此の時、アルザス・ロートリンゲンの問題について、兩方の意見が合はなかつたが、ビスマルクはシガーのお蔭で此の危機を脫し得たといふ。彼の曰く

「討議に入り、當面の問題にふれて語氣烈しくなり易い時に煙草をのむのは大變よいものである。シガーを吸ふに際して、指に挾み、口に持つて行つて落すまいと、身體を動かさぬやうにする、さうすると我々の思考能力を少しも妨げることなく精神の安靜が與へられるものである。シガーは一種の氣分轉換劑(アフレンクング)である。人はもつれ昇る靑い煙にしらず〳〵眺め入る。それは人の氣分を和らげる一種の魅力を與へて呉れるものである。さうしてその際眼は動き、手には成すべき事があり、嗅覺亦滿足して居るのだといふ事を充分に感ずる。さうして更に妥協の心が湧いて來る。」

述懷よく煙草の醍醐味を語つて居る。然し實は、彼は此の時少しも妥協などせずジュール・ファブルを泣かせたのであるが、ファブルに同行したデリソン伯(Comte d'Hérisson d'Trison)の日記によると、動ともすれば會議の性質上興奮し易い立場にあつたが、ビスマルクはその度毎に笑顏をもつて否定しつゝ香の高いハヴアナをすゝめたといふことである。

又勇將モルトケ(H. K. B. Von Moltke (1800-1891))は、フランスの大軍と戰ひ乍らも、差し出されたシガーから最上のものを撰ぶ丈けの餘裕があつて、

大勝をはくし得たことは廣く傳へられる所である。アメリカ南北戰爭の勇將グラント亦シガーの吸ひ殘しを、指揮刀代りにふりかざして、奪戰遂にドネルスンを占領したのは、更に有名な逸話である。Ulysses Simpson Grant (1822–1885)

伊太利の愛國革命家ギュゼッペ・マチニは、志むなしく破れてロンドンに亡命中、數名の刺客の襲ふところとなつたが、靜に彼等を迎へて「一本如何です」と葉卷をさし出した。刺客等が意外の機先を制せられてたじろぐのを更にギュゼッペは「だが諸君は吾輩を殺しに來たのぢやないですか」と疊み込んだ。刺客等は次の瞬間、床に跪いて彼に心服を誓つたといふ話しである。Giuseppe Mazzini (1805–1872)

ラ、ナガに平和あり、ヘンリイクレイに靜寂あり
されど最上のシガーはひと時に灰となりてすてらる
とキプリングは歌つて居るが、そのハタリと落ちる眞白な灰に、我等が日毎、働き、休み、休み又働いて年長くえ
となみ來つた過去の思ひ出がなつかしくもしのばれて、かすかなる哀愁は、匂はしく漂ふのだ。

さては蒼色にしてほのかなるハヴアナの花よ
胸の痛みを眠らせつゝ我が唇の邊に匂へり
もの言はぬ死よ我は汝に謝す
屢々の苦しき時に我を助けくれたるを
我に見ゆ青き煙のもつれの中
我等二人が落ち行く悲しき運命
時至らば我等息絶えて人々の
口のはより消え、疾き風も
衰へうせてわれきみが纖維の如く
あとには一握の灰より外に殘るものなし

（バウル・ハイゼ）

バイロンはこれに反して、雄渾華麗の筆をもつて葉卷を讃へて居る。

壯んなる哉煙草、東より西に至るまで
水夫の勞苦も、回教の褥の椅子に
名を誇る土耳古貴人の安息も
慰めつくして阿片の類に劣らず
スタンブウルに於ては壯麗、又壯大劣るとも
ウヲビン、ストランドにてはその愛讓らず
蝠蛤（フーカ）に用ひては神聖、華麗なるは
豐熟芳醇の琥珀の口あるパイプに吸ふ時
さながら盛裝更にまばゆき佳人が
愛を求めて媚ぶるに似たり

されど煙草のまことの戀人は
一絲纏はぬ美をぞ讃ゆれ
いざ我に葉卷を與へよ

The Island
(「島」第二章)　Vuelta Arajo

葉卷の上等は何といふてもハヴアナである。然もハヴアナの中にもヴエルタ・アバジョの名葉は天下第一とされる、然もそのヴエルタ・アバジョの煙草の中から更に嚴密なる選定をへて、世界極上といふ品は一收獲に二千本多くて五千本に達せぬもので、その一本を手に入れるものは、世界のシガー黨からひとしく恨まれる程の絶品である。日本にはこんな恨みを受けるやうな危險は先づ——全然ないといふてよいから安心である。

キユバの此の地方の一部は、神樣が唯葉卷のために作られた世界唯一の場所とも云ふ可きであつて、地水火風の四元の結合、陰陽の理、合してヴエルタアバジョの煙草となるので、決して人爲のみによるものではない。すでに發芽の頃より一本の株の中から、どの葉とどの葉といふ風に選定して置いて年中注意を怠らず、廣大なる耕地より僅少の葉を得るのであるが、これとても單なる勞働以上に、纖細なる頭腦と經驗とを必要とする。かくて得られた葉は、愼重なる醱酵を經て葉卷とされるのであるが、更に丁寧すぎる程の包裝につゝまれ、芳香ある杉の箱に詰められて、さうして高貴なる葡萄酒庫に貯へられるのである。貯藏庫はその葡萄酒を犧牲にしてまでも、濕度、濕度を葉卷の爲めに調節せねばならぬ。かうしていよ〳〵最後の醱酵を終へて庫より出す時には、古式に則つた祭祀を行ふのである。卽ち銀の盆にその葉卷の一本をのせ、盃には古く芳醇の酒をもつて供へる。やがて主人より來賓に一本宛の葉卷が配

られると、彼等は恭々しくセイバの香木を焚いて是に火をつけるのである。

然し上から下まで、純良なヴエルタの葉で卷いたものは、先づないといふた方が正しいので、如何にヴエルタシガーと稱しても、中の方には他の葉の芯が入れられてあるものなのだが、これを見わける樣になるには、殆んど一生涯をあらゆる葉卷に苦勞して見ねば、先づ常識といふところまでは行けないといふ。

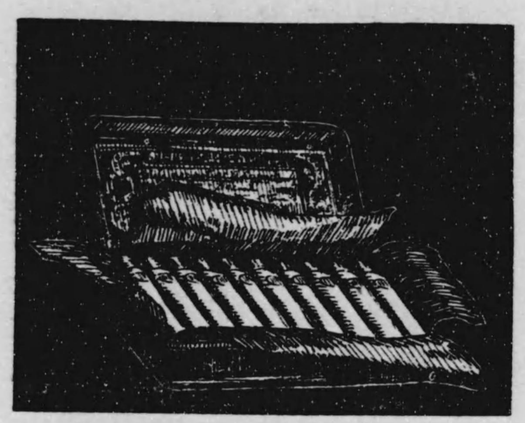
History of Tobbacco　W. P. Penn

煙草史の著者ペンは、面白いことをいふて居る、卽ち女房をえらぶと同樣に葉卷をえらぶ時に、その外觀だけに心をとめる男は、大ていの場合その期待を裏切られるものだといふのである。此の女とシガーの兩つの場合には同じ樣な誤謬に陷りやすい。卽ち和かな葉卷を求めやうとすると自然、色のクラロ（極く輕い）のものか又はコロラド、クラロ（輕い）のものに手を出しがちであるのは、上皮の色は、その香味と殆んど無關係であるといふことを御承知ないからで、色が如何にマヂユロ（濃熟）であつても、それは直ちに、强い香味を意味するものではない。むしろ此のマヂユロのシガーは、それが粗惡品でなければ、マイルドであり、目方の輕いものは概して香味に乏しい。然し商人の方でもいろ〳〵に化粧させるので、外面のみでは判斷が出來ない。これは、殿方は金髮を好み給ふといふたところで、そのブロンドは案外染め上げたものであつたりして、とんだ目に合はされることがあるのと同樣だから、殿方はよく〳〵御注意ありたしといふのである。

此の胡魔化しは何も新しいことでもなく、舶來だといふとすぐに買ふ氣を起すのは、日本ばかりではないと見えて、案外獨逸あたりにも、葉卷よりも外國製といふ名柄を買ふて喜んで居た連中が多かつた。といふのは十八世紀の末、シユロットマンが葉卷の國產品を出したが、中々に賣れず、遂に一策を案じて、製品をはる〳〵、クツクス

ハーフエンまで運んで、そこから船で送つてハムブルグに陸上げさして云ふことには、「本年走りのアメリカ葉卷唯今ハムブルグ港に入荷」とやつて賣りつけ、所謂通人連をして、「矢張り本場だね。」「これだからシュロットマンのなんか吸へないのさ」などと悦に入らせて居たといふから罪な話しである。但しこれは他人事にあらず。

四　卷煙草



和やかにして甘美なる生活のリズムはすでに過ぎ去つてしまつた。甘き無爲は、たゞ日曜の教會の椅子に居眠つて居るのみだ。新しき世紀は電氣と速力の時代となつた。訪れ來り、過ぎ去り行くものゝ一瞬なる哉。ラヂオとテレヴイジョンと、鐵と油と、さうして、精敏絹絲の如き人間の神經とである。忙しき人々の棄て行く吸殼、試みに見給へ、鋪道にすてられた卷煙草の煙が、なほしばらくも消ゆることなきかを。あとにつゞく靴の踵がこれを踏み消して行くに、如何程の時間が必要だといふのか。葉卷の煙のアダージョは、今や卷煙草一本のアレグロとなり、プレストとなり、プレステイツシモとはなつたのである。

葉卷を樂しむ半日の恍惚は、我等が父の日の祖父の日のはるけき夢となつて了つた。今や卷煙草の時代である。吸ふに何の準備も用具も要せぬことは、先づ近代の生活に適合する。さうしてその安價は更に大衆性を帶びて居る。(但し日本の煙草はもつと上等なのをもつと安くすべし)。コールリツヂがクブラカーンの夢はあまりにも奢りを極めたものである。我等が夢は一本七厘のバツトの煙、忙しき鋪道の數歩の間に求められねばならぬのである。

乾燥し、醱酵せしめ、又乾燥し、又醱酵せしめられて樽に詰められ、工場に入つて蒸氣にむされ、ロールの下をくぐつてケークとなり、截斷されて乾燥され、やがて、驚くべきメカニズムによつて、一分間數百本の卷煙草は、その金文字さへ鮮明に流れ出して來る。此の一本一本にこそ、我等が求めるところの、安易なる慰めがひめられて居るのだ。

卷煙草は誰も知る通り、トルコを最上とする。しかもクサンテイ、カヴアラの名葉は、シガーに於けるヴエルタ、アバジョのそれに比せられるものである。サムソンには葉質柔軟、芳香甘美の葉を產し、シリア地方にはラタキアの絕品がある。實に小アジアこそ卷煙草のエルサレムである。エジプト煙草と稱して、嗜好やまざるところのものも、皆その原料はトルコ煙草であることは大方御承知のところ。エジプト政府は一八九一年、煙草の栽培を禁じたのではあつたが、エジプト煙草の名柄は棄てがたく、トルコより原料を入れてこれを製造して居るのである。五千年の昔に偉大なる文化を築き上げた豐沃ニル河のほとりに、前世紀の末まで花咲いて居た煙草の味こそ、煙草ロマンチストが憧憬れの的である。

卷煙草もまた、アメリカに於ける土人が檳榔又は鈴懸の葉をもつて煙草を包んで用ひたのが元祖であるが、歐洲に知られたのは、今からわづか二世紀の昔に過ぎない。最初南米よりスペインに入り、東邦航海の船によつて小アジアに入り、こゝに世界無類の卷煙草の葉を產するまでになつたのである。これ等とは全く無關係に、一八一二年、長らく

キュバに居つたハムブルグの一商人が、「シガリトス」の製造販賣をやつたといふ事が知られて居るが、これはキュバの卷煙草の正直な模倣で、矢張り檳榔の葉などに卷いたもので、彼のシュロツトマンの葉卷同樣、成功はしなかつた。

一八四五年、デエルンウエール(Dairnwel)なる者が、卷煙草の如きもの近頃フランスにもてはやされ初めたるが、かくの如きは一時の流行にして永續すべきものにあらずと難じた。「サンジヤツク街又はオデオン座あたりに行かば、まだ乳臭き若者が卷煙草ふかし居るを見るべし。思ふに彼等も、やがて半歲ならずしてパイプを吸ふに至らん。(中略)彼等は煙草のむを好む故にあらず、煙草のみの風を裝はんがためのみにして、香り高き煙をたのしむなどの事夢にもなし。」更に彼は卷煙草を頭から馬鹿にして、その運命を次のやうに豫言して居る。「如何に考ふるも卷煙草のもてはやさるゝは、藁火の燃えつくす程にて永きことにはあらじ。彼等もやがて他に心むきて、まことの喫煙、言ひがたき愉悅を葉卷とパイプによりて求むるに至るべし。」であつて、卷煙草の如きは「幼童小兒の初心者が用ふるところのみ」なので、ほんとうの喫煙とはかやうな女々しいものではないと力んで結論に至つて居る。「おゝ亡び行く卷煙草、纖弱に消え去る煙よ、忘却の風は汝を吹きとばさん。」

彼デエルンウエールが、クリミア戰爭のあと迄生きて居なかつたのは、彼にとつて幸福なことであつた。彼がこんなに罵つてからわづか十余年にして、彼の所說は事實、權威によつて、粉碎されて了つた。彼こそは纖弱に消え去る煙であり、忘却の風に吹きとばされる藁火の灰であつたわけだ。

即ち、かのクリミア戰爭(一八五四——五六)は、英佛の同盟軍を、小アジア、ロシアに入らしめ、彼等に土俗の卷煙草を敎へたのである。これによつて、戰後此のモスコー、コンスタンチノープルの風は直ちにロンドン、パリの風となり、やがて全歐にひろがるに至つたものである。

然らばこの小アジアにおける卷煙草の起源は如何といふに、これは又戰場における偶然のチャンスから發明されたものである。即ち一八三二年トルコ帝國が、衰退の一路を辿り初めると見るや、エジプト太守メヘメツト・アリはマームード二世に代つてトルコ帝國に君臨せむと叛旗をひるがへすに至つた。この時アークルの攻擊に於て、エジプト軍の一砲術長たりしスリマンベーなる伍長は、交戰中大切なパイプを敵彈に粉碎されて了つた。彼はこゝに於て喫煙不能の苦しみから逃れたいばつかりに、大砲用導火線の包裝紙を破つて、これで煙草を包んで吸ふたのが抑々卷煙草の濫觴なりと云はれて居る。さうして此の新しい喫煙の樣式は、忽ちにして全軍の間に歡迎され、やがてクリミア戰爭迄には、すでに小アジア一帶を風靡して居たわけである。

かうして英國に齎らされた卷煙草を廣く上流社交界に紹介するに功あつたのは、あの文人にして旅行家にして且つしやれ者であつたところのローレンス・オリフアント(Laurence Oliphant)とされて居る。當時の貴族、上流にあつては、嗅煙草を自ら挽いたやうに、卷煙草もまた、自分で混合して自分で卷いたものである。煙草にあつては此の混合は極めて重要なる技術であつて、如何にクサンテイ、カヴラ、サムソン、ラタキアなどの良品でも、各々單獨では到底よい煙草とはなり得ないので、我々を隨喜渴仰せしめるやうな煙草は何れもこれ等諸品の巧みなるミクスチュアによるのである。

卷煙草に用ひられたペーパーは、十九世紀の中頃から工業的に作られ初めたものであるが、その最初はフランス・カムペレーのマウヂユイ工場に於てゞあると傳へられる。此のペーパーの製造は、最も細密な技術を要するもので、その純白、その薄さ、その强さ。その無味、その可燃性などの諸條件を滿足せしめうる事は、フランスの他、何處に

も望みがたい技術であるとされて居る。

當時にあつては、煙草を卷くのは皆手先きの仕事であつて、ポーランド人、ロシア人等が多くこれに從事したものである。一八六二年ドレスデンに於てフイルマ・ラフエルメ（Firma Leferme）なる男が卷煙草製造業を始めた際には、これらの國の女六人　男一人を使つて居たといふ。

エジプト、トルコあたりでは、一人で初めから刻み上げ、型に入れ、手で卷きあげるのであるが、唯永い間の經驗によつて、彼等の指先きは、驚歎すべき鋭敏精確を期し得るにいたるのであつて、同量の煙草を少しの疎密もなく卷き入れて、美しき妖精がすむ家の象牙の柱にも似たる幾本かをならべるのである。かやうな技術は、たゞ東方の神秘靜寂なる世界に育つて、無智乍らも自ら諦觀の心境に達し、深く眠る魂の安らかさを惠まれてあるものゝみがよくなし得るところであると考へられて居る。

事實、此の卷煙草に限らず、手先きのことには、東洋人が最もすぐれた點を誇り得るものらしく、アメリカのカウボーイが、原野に馬を驅り立て乍ら、片手にダラムの安煙草をクル〳〵と卷くなどは、まことに粗野な見榮といふべきものだ。然し又、機械によつて作られた卷煙草は、手で卷いたものより遙にまづいなどと半可通を振り廻すのもキザであり、バツトの卷き方の硬軟を比して、これは女が卷いたもの、これは男がまいたのだから硬くてまづいなどとならべ立てるのもまた、駱駝の乾糞を吸はせても、よい煙草だと言ひかねない連中だらう。

近代人のポケツトには、金がなければ卷煙草がある。金も煙草もない時は――或は、交番の角をまがつて鐵道線路の方へ行く道だけがあるのかもしれない。煙草は時に命の瀬戸際に偉大なる力を發揮することがある、さうしてかくの如き場合には、特に使用簡單の卷煙草が然りである。

歐洲戰爭もやうやく酣なる一九一五年の一月、英國の誇りとする戰鬪艦フォーミダブルが獨乙の潛航艇に爆沈された時の話し。ボートも奪はれ去つて、今や沈沒せんとする此の甲板上に、艦長ロクスレイ大佐以下の乘組員は何等の昂奮も、何等の叫喚も、何等の恐怖も、さうして何等の救助を求めるといふ事もなく、最後の數分間を全く平靜に、ピアノに合せて歌を歌ひ、各自卷煙草をくわへて、死の顏に煙をふきかけて待つた。從つて、それ等の煙草が全く消えてしまつたのは、此の戰鬪艦を、冷い英國海峽の波が呑んで了つた時であつた。はげしい渦卷きのあとに、幾百本の吸がらが、むしく漂ふて、彼等死に當つて從容たりしジョンブルの英靈を弔ふかたちであつたといふのだ。

しかし實際のところロクスレイ艦長の如きは、魚雷を喰つた瞬間には可なり狼狽したものらしく、誰かから卷煙草を一本すゝめられて初めて落ちついたといふのが事實らしい（ニューヨーク・グローブ（New York Globe）一九一五・一月五日）。しかしこれを全員ならつてやうやく突嗟の混亂から、死の諦觀の境に達し得たのであつて見れば、煙草の力や偉大なりといふべきである。

又、メキシコ戰爭に於けるトレオンの激戰の勇將フランセスコ・ヴイラ（Francesco Villa）は、幾度か擊退せられた敵壘奪取の最後に、自らその先頭に立ち、口には一本の卷煙草をくわへて、微笑しつゝ彈丸雨飛の中を突きすゝみ、遂に敵壘に近づくや、携へた爆彈に自分の口の煙草を吸はせ、口火が燃えつくさうとする瞬間、これを投げつけて敵を壞滅させ、遂にメキシコへの道を開いたことは更に有名である。今回の日支事變においても皇軍の眞價は、北滿に南支に遺憾なく發揮されて爆彈三勇士以下、大和魂そのものを腹の底から抉り出して見せる樣な勇敢さで、全世界を驚かしたが、ヤング氏（William）

Young (The Story of the Cigarette)
(卷煙草の話)は、日本の兵隊が世界一に強いのも、政府が軍事に愼重なる注意を以つて當り、特に煙草を戰時と同樣平時にも、正規の糧食の一部として居るからだと云ふて居る。まさかそれ程でもあるまいが、九一式九二式の戰鬪機や、陸奥、長門などの軍艦が帝國國防のために缺くべからざるものであると同樣に、「バット」や「ほまれ」や「三笠」などは、わが皇軍にとつては缺くべからざる軍需品の一つであると言はねばなるまい。かくてこそ、

それから後は一本の
煙草も二人でわけてのみ
死んだら骨をたのむよと

言ひ交はすところの勇敢なる日本兵が生れるのである。

第九章　ブライアー物語

ブライアーパイプを語るにあたつて、先づ著者自　の思ひ出に、數頁を費すことを許して戴きたい。

J. M. Barrie, My Lady Nicotine
バリイのマイ・レディイー・ニコテイーンの中に、「二つのメヤシヤウムに夢中になつて、氣遠ひじみた一月を送つた」ことが出て居る。彼が夢中にさせられたメヤシヤウムといふのはがリヂエント街のショーウインドーの中に仲よく並んで居たので、彼はそれを勝手にロムルスとレムスと名づけて思ひこかれ、その前を素通りすることが出來なかつた。時にはその視線をさけやうと廻り道をしたりすのであるが、結局買ふのである。結局買へたのだから、私にくらべて非常な幸福者である。私はつまりそれほど不幸であつたわけ。

ブライアーパイプの作者自著

事の起りはかうである。數年前、まだ私が京都で學生時代、何かの用事で大阪へ行つた。さうして用をすませて、歸りに心齋橋をあるいて、ふと丸善へ入つたものだ。私は今でも散歩の折などにぶらりとかういふ所に書物の香ひをかぎに入るのが大好きなのである。但しポケツトはいつも空なのである。悲劇の原因は——何時でもさうなのだが、特に此の場合、このポケツトの中にひそんで居たのだ。二階の洋品をならべてある所へ行つた時、突然私は息がつまつて動けなくなつた。磨きたてられたガラス棚の中に、そのパイプがあつたのだ。

大都會の午後三時にふりそゝぐ陽光は、何かしら哀愁を覺えさせるやうな、ほろ〳〵とした和やかさで、此の丸善の二階のブラインドを金色に透して居た。そのほつとりとしたあかるさを斜めにうけて、パイプの椽は窈然たる光に浮いて居た。クリーム色の鞣皮の上に、褐色の膚の一部を銀綠色に映々出させて——眠つて居た。その椽のやさしさ、その線の美しさ、その膚のなめらかさ、さうして神のめぐみの下に伸びきつたやうなその柄の素直さ、さうして幸福に飽滿したやうなその小首のかしげ方、賢明にして通なる讀者諸兄よ、此際パイプマニアのエービーシーが、グレインをどうのこうのと云ふ余裕がなからうとて夢嗤ひ給ふな。私は完全にとらへられたのだ。

世に一目惚れ——といふものがあるといふことを、初めて知つたのは實に此の時であつた。私は全く息を凝らして

見惚れて了つた。美しい！　いや美しい以上の魅力！　さうだ、たしかにそのパイプからは、何か生命に似た能動的のものが私に働きかけて居たのだ。私は勿論それを手に入れねばやまないと自ら誓つた。さうしてポケットの隅へまでも手を突込んだが――勿論その指先は呪はしき袂糞にふれたのみであつた。淋しい財布を引つぱり出して生れて以來の自分の主人につらい思ひを公衆の前でさせるやうな、そんな考へのないことを、それでも私の手はしない位の理性があつたのだらう。

だから勿論その硝子戸に飛びついて、これを破つて强奪するといふ樣なギヤング的衝動も感ぜずに、極めて紳士的に――憂鬱を胸いつぱいに吸ひ込まされたまゝ、とぼ〳〵と歸らざるを得なかつた。私はそれから、一日もそのパイプの事を忘れることが出來なかつた。然しそれに對して丸善の主人が要求して居る代價は、九圓五拾錢といふのである。私の手が一旦ポケットへ入り乍ら又空しく出て來たのでもわかる通り、私の當時としては、これは到底許さるべき戀ではなかつた。丸善に注文して置いた本の方がそれの優先權を主張して居た。さうしてその本は又私としては買はねばならぬ必要のものであつた。そのために苦心して殘されてあつた十圓紙幣は、だから此のパイプと五拾錢とになつて私の手に歸つて來られる性質のものではなかつたのである。

然し私はあきらめられなかつた。寢てもさめても、そのパイプが目先にちらついた。その美しいグレインにちらとした媚態を見せたり、その緣をちよと動かしてウインクしたりした。さうして時には笑つたりした。これは全く氣が變になりさうであつた。然しすでに紳士的修養をつんで居た私は、つとめてこれを色に出すまいとした。勿論友人に對しては少しくらゐはそのパイプの話しをしても、決してとり亂したところを見せぬやうに努力して居た。さうして私は立派にそれに成功して居ると考へて居た。ところが親友のHがあとで見せた彼の日誌によると、その頃私は「パイプと戀におちて少し氣がおかしい」のであつた。

私はその間、あらゆる方策を考へた。注文した本をやめるといふことは不可能であつた。然しパイプをあきらめるといふことは尙更不可能であつた。だから一晩考へぬいたあげく、私はひとまづ、その本をうけとり、その本を質に入れてパイプを買ひ求めやうかとも考へた。さうして本の必要の時は、パイプを抵當に出して――それは買はぬ前からでも身をきられる思ひであつたが――Hからいくらかの金をかりて本を出す、但しHはそのパイプをもつて私の室を出てはならぬといふことに――これは然しHが贊成してくれなかつた。

今度は、Hにその本を買はないかと勸めて見た。彼は法律研究の學生が、美術のそれも外國語の、それも十圓もする本などは買へるものではないといふて相手にしてくれなかつた。私は遂に私の不用の本を賣ることに決心しなければならなかつた。しかし使ひなれたペン先をすてるにも、なほ若干の未練を感ずる私としては、これは中々につらい事であつた。私は涙の中に私と別れるべき本を數冊選定した。さうして悲しい葬送曲によつてこれを古本屋に持ち込んで、一枚をつかむや直ちに京阪の急行で大阪市心齋橋通り丸善の二階の西側の二番目の棚の最下段のパイプのところへかけつけた。今すぐあのパイプが自分のものになるのだと思ふと、全く足も階段につきはしなかつたのだ。

けれども、何といふことだ。あれほど私に物狂ほしい數日を過させたパイプは、その棚の中の、そのクリーム色の緑皮の上には居ないのだ、居ない！　私はあらゆる棚をさがした。もう私はその時有りうべき最大不幸が、かくも早く來たといふ事に對して、否定する可能性がだん〳〵なくなつて來るのを認めずには濟まされぬ狀態になつて居た。

買はれた――賣れた。誰かゞ――私ではないところの、私以外の誰かゞそれを買ふて行つたのだ。さうしてあのパイプは今その見ず知らずの男――恐らく品性下劣のブルヂョアだ――の唇に、媚びを强要されて居るのだと考へると、立つても居られない樣な焦燥と無念とを感じた。さうして、何時賣れたかの返事として「ほんの二三時間前でございます、ハイ」といふ言葉をうけとつた時、私は何だか口中が乾いて舌がバサ〳〵する樣に感じた。

何といふことだ！　氣をとり直して楷段を下りて、人通りへ出た私のポケツトの十圓はその夜道頓堀のカフエーのキヤツシヤーの中へ投りこまれた筈である。

失戀の苦味をこうもみじめに味はされた私は、その後快々として樂しまず、あのパイプの幻影から逃れることが出來なかつた。さうしてもうどんなパイプをも見ることが嫌になつた。然し結局、私はパイプと全然離れてなど、到底やつて行ける男ではないのに氣がつくと――あの十圓はもうないので、自分で作らうと決心した。せめてこれが、慾じ賣つて居るものを買ふなどよりも、あのパイプに對する忘れがたき純情のあらはれとも見られるなどと――妙にこうセンチメンタルになつて鄕里へ歸るや、小川のほとりに茂つて居る野茨の古根の一つを掘りかへした。

ブライアーとはけだし日本語の茨に相當して居るからだ。だからこのブライアーは私の方の小川のほとり、垣の間にふんだんに野生して居るのである。勿論それがコルシカ原產のブリユイエールと、どこが同じのかなどは問題ではない。野茨である限りは明かにブライアーである――字引を見ろ、字引を！　私は自らさうはげまして春の一日、此の恰好のブライアーの根を掘りかへしたのだ。

ブライアーであるからは勿論堅い、さうして――私が手にマムシをこさへて鑿をとる間に、次第に我がジヤバン越後のブライアーは、生れついての蓮葉なところを現して來た。乾燥するに從つて、次第に大きくなつて行く木理のヒゞは、やがては私の戀の幻想のそれへまで延びて行くひゞであつた。折角丸く彫りあげた時には、火皿の片方は私を嗤ふ樣に大きな口をあいて居た。私はこれを、あのパイプを求めた男の面へたゝきつけるつもりで庭先へたゝきつけてやつた。

さうして、さてもう一度ブライアーの根を掘りに行つたのである。私はどうしても、あのパイプに感じた最初の純情を、私自身の努力によつて、同じすがたの中に刻みつけて我が身を離すまいと決心して居たのだ。さうして我がブライアーが、コルシカのそれとは全然關係なく、極めて無造作にヒゞが入るので、これをまづそのヒゞの入るまゝにまかせて乾燥し切つたところへ、純情の鑿を入れやうと、今度は氣永に乾燥した。さうして作り上げたのがこのパイプである（カツトの寫眞參照）。

勿論、丸善のガラス戸越しに戀をしたあのパイプとは似ても似つかず、矢張り蓮葉らしい小ひゞさへあり、火皿の形も歪んで居る。さうして先年ふとしたはづみに、象牙のシガレツトホルダーで作つた柄を折つて以來、適當のものも見當らぬまゝに、こういふすがたで、私に仕へて居るのであるが、私は尙ほいまだにあのパイプを忘れ得ないだけ、それだけこの私に對して首つたけのまづしいパイプを愛して居るのである。

Arther Machien, Anatomy of Tobacco 1926

アーサー・マチエンの煙草哲學は驚くべき衒學にみちたもので、煙草の初りにおいても、すでにピタゴラスが登場して來るのである。彼によるとピタゴラスは數學の原理を發見したのち東方に眞理を求めて、ペルシヤア、ラビアより支

那に渡つたが、何の得るところもないどころか、その國のトマストマス（θωμας-θωμας　著者註今から考へて見ればこれは支那獨特の世界に奪く打樂器ダマスダマスの舊名である。）といふ打樂器の騒音に折角發見した「數」と「音」とに關する神秘的な哲學も破壞されさうになつたので、更にカムチヤツカへ逃れた。そこに當時としては全く驚くべき煙突から煙を吐いて居る船を發見し、それにのせられて向ふ岸についた。彼はこゝに於てカウシデーの王子オデイセウス・B・ポツヂの名の下に、大鵬に乘つて神に誓ひ、遂にモリイよりも、アムブロジアよりも驚歎すべき靈草タバコによつて、その世界を廻つて求め來つたところの眞理を發見したといふのだ。さうして多くの煙草とパイプとをキノシムスに持ち歸つたなどと云ふて居る始末である。彼マチエンによると此のパイプの學究的分類といふのも亦當然頗る煩瑣を極めたベダンチツクのものでなければならぬ。

Odysseus B. Podge, Prince of Caucidae

一、パイプ――それによりて煙草の煙を吸飲すべき器具
二、火皿――そこに吸飲すべき煙草が詰めらるべきパイプの一部
三、柄――それによりて煙が火皿より口中へ導入さるべきパイプの一部
四、吸口――柄の一部にして火皿より最遠距離にあり・且つ柄と其の物質を異にす
五、蓋――煙草が風に吹き散らされざらむ爲めに時として火皿に附せらるゝもの
六、蝙蛤（フイカ）――煙草の煙が水を通じて吸はるべきパイプの一種
七、裝飾――パイプが火皿に於て又は柄に於て平面を有せざる部分
八、固有色――製作の技術によりてパイプの表面が顏料をもつて染められ居る場合
九、偶發色――喫煙者の技術及び保存によりて煙草の脂をもつて染められ、黑色或は褐色となりたる場合
十、單式――パイプが單一の材料より成りたる場合
十一、復式――二種以上の材料より成りたる場合

といふ樣なものであるが、こゝに語らうとするのは・此の單式と復式の分類の二大原則によつて、クレイやカラバツシユやコーンコブを分類研究しやうといふのではない。もつと自由に――煙草をのんで居る氣もちで・ブライアーの話しをしやうといふのである。

多くの發明發見がさうであるやうに、ブライアーがパイプとして理想的の材料であることを知られたのも、全くの偶然ともいふべき事柄からである。フランス人はとかく理窟をつけて、その恩人はナポレオン一世だといふ風に、主張したがるが、英雄崇拜もこゝまで引伸しされてはピンボケである。

皇帝ナポレオンの偉業はモスコーに挫折し、ワーテルローに崩壞し、やがてセントヘレナの悲劇に終つたが、彼を崇拜するフランス人は、單にその墓に詣づるに滿足できず、その生誕の地コルシカに巡禮するものも尠くなかつた。或る時（十九世紀前半）一人のパイプ屋がこゝを訪れて不幸にも――さうして結局は幸福なことにも、彼愛用のパイプを壞すか、紛失するかして了つた。彼はコルシカの百姓に何か間に合はせのパイプを作つてくれと賴んだところ、その百姓は野原からブライアーの根をとつて來てこれに作つてやつたものが、今日のブライアーの濫觴だといふのである。

この間に合はせのパイプは、パイプとしての條件を驚くほどに完備して居ることが直ちに分つた。卽ちクレイのや

うに脆くないこと、金屬のやうに熱の傳導を容易ならしめぬこと、並びに重くない事であり、然も當時まで用ひられて居た木のパイプの如何なるものよりも、煙草の火熱によつて炭化し又はヒビの入ることが少いといふ上に、木理がこまかく堅く、然も細工が比較的容易で、仕上げは立派な光澤によつて一層見事になるといふのであるから一點非の打ちどころのない理想的のものであることがわかつた。

櫻のパイプは、その香りもよく堅いところから英國保守黨首領ボールドウヰン氏以下愛用する者は相當あるが、その火皿の炭化しやすいことゝ、細工が充分にやれないといふ木質の缺點から決してよいパイプを作れるものとは云へない。樫の根なども用ひられるが、罅の入り易い缺點を第一としてその重量においてもはるかにブライアーの好條件に劣る。我が國でも槐（おんじゅ）で作つたきせるなどもあるにはあつたが、一般的にはならなかつたところを見ると、決して具合の好いものではなかつたのであらう。アメリカの大衆向きのパイプにコーン・コブがある。これは玉蜀黍の軸で作つたもので、ダニエルブーン（Daniel Boone (1735–1820)）がこの創始者であるといはれ、現在では年に約二千七百萬のパイプがミゾウリイ州から產出されるが、安いこともこの上なしだがその生命の短いことや、體裁のわるいことなどに於て到底ブライアーの敵ではない。カラバツシュパイプ亦一部に用ひられるが、これは一種の瓢簞を、小さい中に一定の型に挾んで成熟させたもので、その炭化、脆弱などに於て殆んど問題ではない。

メヤシヤウム（Carl Kovacs）については、ブダペストの靴屋カール・コヴクスがその最初の製作（一八二〇年代）の名譽を與へられて居るが、これを發見したのはアンドラツシイ伯（Graf Andrassy）で、彼はバルカンの旅行中、此の純白の石灰質の塊を得て、それが容易に彫刻の鑿を入れられ得る硬度を持つて居るのに目をつけて、持ち歸つて、コヴクスにパイプに作つてくれと命じたといふのである。このメヤシヤウム（海泡石）パイプは、使用するにしたがつて次第に栗色に變じて行く、その色澤の美を骨董的に賞翫するのが第一の目的であつて、時には喫煙それ自體がむしろ、パイプのための强制的奉仕であつたりする。しかも理想的の色澤を出すには、殆んどパイプを冷す暇のない程の不斷の喫煙をつゞけて、些少の手脂の附着にも注意すべきで、好事家はわざ〳〵、パイプをすつかりワツクスで包んだり、フランネルで蔽ふたりして用ひて、永年の後その蔽ひをとつて、豐潤の色澤をたのしむといふ樣なものすらあるのだから、その使用の際の煩瑣と、質の脆弱と高價とは、明らかに近代生活のテムポに歩調を一にしがたい骨董的のものである。

ブライアーはかくの如くにして、他の如何なるパイプ材料にも優つて居たので、前世紀の前半に早くも異狀なる流行を見せた。コルシカに發見された此のブライアーの根は、木工細工で昔から有名なサン・クロード（St. Claude）に齎らされ、こゝからいよ〳〵ブライアーパイプの華々しいデヴューが迎へられたわけである。一說にこれ一八五四年といふ。

サン・クロードはリヨンから東北にわづか、ジユラ山中の一小村であるが、冬期間中村民が內職として初めた木工細工は、古くから有名で更に十八世紀末からパイプの柄の製造にまでその技術をひろげて居た。然も此の小村に落ち合ふ二つの急流は充分なる電力を供給してます〳〵木工業に好條件を具備させて來たのである。

ブライアーパイプの試作は忽ちにして、此の小村の繁榮の基礎をつくるに至り、一般の木工業はこれを附近の村々に讓り、專らパイプの製作に從事するまでになつたが、然しブライアー素材の撰擇の困難、加工の困難は、此の製作技術を殆んど專門的のものたらしめて居るのである。

ブライアーの產地はしかし、單にコルシカにのみ限られて居るわけではなく、南フランス、イタリアの一部、西地

中海沿岸などの、極度に暑く乾燥した夏季のあとに、靜かに雨天の多い冬がつゞくといふた地方の荒野に產するのであつて、かゝる氣候の數十年の試練の下に、やうやく、木理が細く錯雜した大きな根塊が生ずるのである。土壤も亦大いに此の品質に關係して來るのであつて、最も良品とされるものは岩石の間に深く喰ひ込んで育つたものゝうちに見出されるのであるが、就中その土中に枯れつくして居る根塊の如きものからは時として驚嘆すべき絕品が見出される事があるといふ。

しかし、こんなものは殆んどないといふてもよい位で、よし偶々見つかつたとしても、すぐ好事家の手に入つて了つて、容易に我々の手に入るものではない。現在一般に出て居るものは主として南イタリイのカラブリア、アルヂェリア地方の產であるが、是等の多くは先づサン・クロードに於て適宜加工されて英國に輸出される。英國は更にその中から二十萬本以上の良品を輸出して、そのほんのいくらかが日本あたりへ配給されるといふ具合なのである。

然しブライアーは若くて二十年から、更に五十年以上を經たものでなければ、パイプを作るまでには至らないのであるから、早晩は漁りつくされて、代用品に苦勞せねばならぬ日が來る筈である。

山から採掘されたブライアーの根は、人工熱の少しも加はらぬ乾燥室に約三乃至四ケ月間放置して置き、更に四週間位、特別の乾燥器にかけて完全にその水氣を除去してから、工場へ廻す。そこでは先づ適當の形に切られるのであるが、此の不規則な根塊から、最も美しいパイプを得る爲めには、如何なる部分をすて、如何なる部分をとるかといふことは、ダイヤモンドの原石を前にして、これを如何なる形にカツトすべきかを考へる磨工以上の苦心が必要であるとされて居る。

これが終ると今度は略々同型のものに荒削りされて、いよ〳〵火皿たるべき位置を決定して先づそこに孔をあけるのであるが、こゝらからそろ〳〵製作技術は纖細になつて來て、その柄の方の錐孔の如きは、最もデリケートな技術を必要とするのである。かうして作られた原型は色上げされて、更に數回の磨きをかけられる迄、驚くべき多くの人手と時間を要するのである。

さてこれが出來ると、マチエンの分類の第三項第四項の問題となるが、琥珀の高價から、近年はエボナイト・ヴアルカナイト、ベークライトの發明となつて、複式パイプ界の革命を齎したわけである。ヴアルカナイトの吸口が發明されたのは一八七八年で、獨逸は初めしばらく、その專賣に成功して居たが、やがてサン・クロードにも此の製造が行はれるに至つて、ブライアーパイプはいよ〳〵完全なものとなつて來たのである。

私は本書において、饒舌に過ぐる迄に煙草のことを述べて來乍ら、遂に第一篇に論じたところの喫煙の理由については、何等適確なる解釋に到達し得ないですでに本書も終らうとして居るが、パイプについては、せめて結論らしきものを述べて、擱筆したいとおもふのである。

何萬年を過去にして、そのかみアジアの未開民族が最初に用ひたであらうパイプについては、その遺物は勿論、それを推論すべき材料すら皆無であつて、こゝに語るを得ないが、アメリカ土人によつて用ひられた有史以前のパイプから、今日のブライアーまでの變遷推移を通觀して見るならば、時代や、民族や、地理的環境やらの、あらゆる溪流、急潭、深淵の、侵蝕、運搬、堆積の諸作用を交互錯雜せしめ、しかも常に琢磨洗練され乍ら、廿世紀文明の大流の中に遂にブライアーの完成を見るに至つたものであることが理解できやう。

未開民族にあつては、パイプの素材は土、石にあらずんば、瓢簞、コーン、又は葭、竹などであつて、これ等を加工して洗練されたるパイプを作るべき判斷力と技能とを缺いて居たが故に、徒らに勞多くして功少く、醜惡、怪奇、混錯せるグロテスクのものゝみしか作り得なかつた。それは彼等にとつては、充分、滿足なる美の所産ではあつたらうが、その美的觀念なるものは、今日我等のいだくそれとは凡そ大きな隔りをもつものである。

是等の原始的パイプは、一度近代文化の中にとり入れられるや、忽ちにしてその止むことなき向上發展の精神と、はるかに洗練されたる美的感情との坩堝の中に投げ込まれて、前後四百年の試練改良の結果、遂に藝術的美を求め得るまでに完成されるに至つたものであるが、この完成せられたる美こそは、唯「簡單」の一語につきるものである。

複雜した裝飾によつて歪められたパイプは、すでに過去のものであり、又いまだ未開野蠻の領域を脫し得ないものである。現代パイプの美は唯簡素なるブライアーパイプにのみ、その完成せるものを求め得るのである。數百年を地中海岸の荒地に苦しみ育つたブライアーの、無用なる凹凸を附屬せしめざる火皿と、何ともなきヴアルカナイトの單純さの合理的結合の中には、嘗つて如何なる時代、如何なる民族、如何なる國にも求め得られなかつたパイプの美がある。

必要こそは近代美の第一條件であり、又最後條件でゞもある。今日、機械の美なるものが、しきりに云々されるのも、機械には唯、必要なるものゝ合理的結合があるのみで、他の一切の無駄が排除されて居るからである。飛行機は現代の機械美を代表するものゝ一つであるが、それには不要なるものは、ピン一個すら許されては居ない。況んや意味なき凹凸をもつてする裝飾的附屬物は、凡そ呪はしき前世紀の遺物として、はるか地上に投げ棄てられてある。唯高く、速く、遠く、飛ぶてふ要求をみたすべきものゝ合理的結合の結果の所產のみが、高く大空に許されるのだ。故にその完成されたものには、卽ちその使命を完全に果しつゝある時の飛行機には、たしかに我等の胸を躍らせるに足る美の躍動がある。

煩雜とか、重壓とか、不均整とかは、凡そ美的感情とは對蹠的の不快なるものである。現代の生活は、常に簡易で明朗で、不安のないことを必要として居るものであるが故に、この美の適用は、我々の周圍の一切のものについても可能であらねばならない。能ふ限り簡にして、しかも要を得たるものにこそ、我々の滿足がある。滿足とは美的感情の自らなる集積の結果の快感である。

卽ちふたゝび、ブライアーについて言ふならば、ブライアーパイプこそは、今日までの喫煙の歷史のあらゆる頁におどる幾千種のパイプの中に、完成の美を獲得したところの最後の勝利者である。況んやその簡單なる形體機構と、必要條件との完備の他に、更に地下幾百年の試練の結果たる木理(グレイン)の中に、微妙無限の美を示して飽かしめざるに至つてはである。

東西喫煙史　終

昭和八年四月五日印刷
昭和八年四月十日發行

東西喫煙史
定價二圓五十錢

著作者　曾我重郎

發行者　長坂金雄
東京市麹町區飯田町六ノ二三

印刷者　山縣精一
東京市神田區今川小路一ノ一

印刷所　山縣製本印刷株式會社
東京市神田區今川小路一ノ一

版權所有

發行所　東京市麹町區飯田町六ノ二三
振替口座東京二四二二七番
雄山閣

東京市麹町区飯田町六ノ二三
雄山閣出版目録
振替東京二四二七

著者	書名	定價	内地送料
藤懸静也	浮世絵	五・五〇	二二
同	美人風俗浮世絵集	五・二〇	二二
井上和雄	歌麿浮世絵集	五・六〇	二二
關根默庵	講談落語今昔譚	二・五〇	一〇
山内繁雄	人類の進化	二・〇〇	一四
三宅驥一	遺傳と結婚	一・八〇	〇八
森本六爾	金鑑山古墳の研究	一・五〇	〇八
大野雲外	土中の日本	二・〇〇	〇八
高橋健自	古墳と上代文化	二・〇〇	一〇
同	滿鮮考古行脚	一・六〇	〇八
八束清貫	裝束と着け方	二・八〇	一四
後藤守一	漢式鏡	九・〇〇	三〇
西村文則	日本文化生活史	四・二〇	二二
今泉雄作	茶道研究茶器の見方	二・〇〇	〇八
同	增補訂正日本陶瓷史	五・五〇	二二
小森彦次	高麗茶碗と瀬戸の茶入	二・三〇	一四
三田村鳶魚	史蹟巡禮足の向く儘	二・五〇	一四
田中治吾平	天照大神々格論	二・五〇	一四
細木原青起	日本漫畫史	二・二〇	〇八
辻善之助	人物論叢	四・〇〇	二二
渡邊世祐	足利時代の研究	四・五〇	二二
同	石田三成	二・五〇	二二
同	蜂須賀小六正勝	二・三〇	一四
大類伸	永久の都羅馬	一・八〇	〇八
同	國史研究法	一・五〇	一〇
市村英輔	古典美術の研究	三・〇〇	一四

著者	書名	定價	内地送料
稲葉君山	朝鮮文化史研究	三・六〇	二二
後藤朝太郎	支那民情を語る	四・二〇	二二
和田英松	國史國文の研究	四・〇〇	二二
岩橋小彌太	京畿社寺考	二・二〇	一〇
藤井甚太郎	明治維新史講話	二・五〇	二二
同	日本憲法制定史	二・五〇	一四
大塚久	政略結婚と武將の家庭	二・二〇	一四
中澤見明	古事記論	二・五〇	一四
坂井衡平	今昔百話新釋	三・〇〇	一四
杉本文太郎	香道	四・〇〇	二二
井野邊茂雄	幕末史の研究	五・六〇	一四
櫻井秀	日本服飾史	二・六〇	一四
梅澤和軒	南畫の見方	二・三〇	一〇
大倉桃郎	長士武	二・二〇	一〇
國史講習會	幕末明治人物史論	二・〇〇	〇八
同	御家騷動之研究	二・〇〇	一四
同	成吉思汗非源義經論	一・六〇	一四
同	東洋藝術史	二・〇〇	〇八
同	原始時代之研究	三・六〇	一八
同	趣味之考古學	一・〇〇	〇六
同	國史上疑問の人物	二・五〇	一四
同	國史上問題の女性	二・五〇	一四
尾上柴舟	歌と草假名	三・八〇	二二
同	平安朝時代の草假名の研究	四・五〇	二二
同	校註古今和歌集	二・〇〇	一四
同	行きつゝ歌ひつゝ	二・五〇	一四
堀江秀雄	末哀謠史	二・二〇	一四
藤澤衞彦	日本民謠史序說	二・二〇	一〇
藤村作	近世國文學序說	二・五〇	一四

一意孤行